

世田谷文学館

収蔵資料

調査と探究

03

横溝正史  
海野十三

## 目次

横溝正史と海野十三

日下三蔵

資料写真1

横溝正史日記〈昭和10年、23年、30年、32年〉

インタビュー1

父と娘の日記からたどる、横溝正史の面影  
野本瑠美

資料写真2

海野十三 横溝正史あて書簡

〈昭和21年4月14日～23年10月31日〉

23

16

11

4

インタビュー2

海野十三と家族の記憶

坂井陽子、鈴木江利

27

父の思い出

佐野暢彦

31

資料翻刻1

横溝正史日記〈昭和10年、23年、30年、32年〉

33

資料翻刻2

海野十三

73

横溝正史あて書簡〈昭和21年4月14日～23年10月31日〉

横溝正史／海野十三 略年譜

122

# 横溝正史と海野十三

日下三蔵（SF・ミステリ評論家）

本書は、世田谷文学館が所蔵している横溝正史の未刊行日記と海野十三から横溝正史へ送られた数多くの書簡を翻刻していく企画の第一弾である。

横溝正史は本格推理小説、海野十三はSFと、現在は独自の発展を遂げている各ジャンルの基礎を築いた重要作家であり、その素顔が垣間見える今回の資料は、それぞれの作家のファンのみならず、ミステリに興味のあるすべての読者にとって、第一級の内容といってい

いだろう。

横溝正史が成城、海野十三が若林と、ともに世田谷区在住だったために、ご遺族から寄贈されたものであ

る。その一部は、二〇二五年四月から九月まで開催された「海野十三と日本SF」に展示されたが、やはり肉筆の文章を、短時間ですべて判読するのは困難であったから、こうして活字に起こして刊行してもらえ

るのは、本当にありがたい。

横溝正史は昭和四十年代に角川文庫に入った旧作が爆発的に売れたことで、作品の映画版、ドラマ版も大ヒットし、国民的ともいえるブームを巻き起こした。

金田一耕助は日本でもっとも有名な名探偵となり、二〇二六年の現在でも、マンガ化やドラマ化が相次ぐ

ほどだが、実はブームの頃には、還暦を超えて古稀に近い老大家であり、著者のキャリアの中では晩年に当たるのだ。（巻末の年譜参照）

横溝正史は一九二一（大正十）年に「恐ろしき四月馬鹿」でデビューしており、これは江戸川乱歩が「二銭銅貨」で登場するより、二年も早い。しかし、デビュー当時、薬学専門学校の学生だった横溝正史は、卒業後も家業の薬屋で働きながら、たまに筆を執る兼業作家であり、まだアマチュアといっても良かった。

江戸川乱歩のデビューがエポックとなって、次々と探偵小説を手がける作家が現われ、国産ミステリは大正後期から昭和初期にかけて、大衆小説のジャンルとしての地位を確立していく。

乱歩の勧めで上京して博文館に入社し、「新青年」などの編集に携わることになった横溝青年は、間違いなくその中心人物のひとりであった。

入社翌年の一九二七（昭和二）年には、早くも森下雨村の後を継いで二代目編集長に就任。同誌の摩登リズム路線を押し進める一方で、作家としても活躍した。本格推理だけでなく、サスペンス、怪奇小説、ユーモア小説、コントから翻訳まで、この時期の作品は極めて多彩である。

一九三二年に博文館を退社して作家専業となるが、翌年に結核を発症して咯血。三四年七月から信州上諏訪での療養生活を余儀なくされた。この時の資金は、水谷準をはじめとする仲間の探偵作家たちが、すべて出してくれたという。

三五年、上諏訪で書いた畢生の傑作「鬼火」（「新青年」二〇三月号）でカムバックを果たし、三六年から旺盛な執筆活動を再開する。

本書に収められた三五年六月から九月にかけての日記は、この上諏訪時代のもので、体調や病状についての記述が、頻繁に登場するのが痛々しい。

七月二十四日以降、「面影双紙」「蔵の中」「鬼火」などの作品に手を入れているのは、この年の九月に春秋社から出る短篇集『鬼火』のための修正作業である。その他の収録作は、「講談雑誌」九月号に発表されたばかりの「獣人」とトム・ガロン作「視機械倫敦綺譚」の計五篇。

この日記で目を惹くのが、書き継がれている「火蛇」という作品の存在である。第一回四十五枚とあるから、連載小説と思われるが、著作リストには該当する作品がない。第二回までは完成して、第三回を執筆しているが、なんらかの事情で未発表に終わったのか、ある

いは雑誌に掲載されたのに、誰にも気づかれぬまま埋もれているのか、見当がつかない。

いずれにしても、百枚近い分量が、実際に書かれていることは事実なので、未完だったとしても、ぜひ読んでみたいものだが、こればかりは発見される奇跡を待つしかない。

ここで、既刊のエッセイ集に入っている、横溝正史の日記について、まとめておこう。

A 探偵小説昔話（新版横溝正史全集18）75年7月 講談社

桜日記

桜日記に寄せて 新稿

B 横溝正史の世界 76年3月 徳間書店

続桜日記「幻影城」76年5月増刊号

C 横溝正史読本 76年9月 角川書店

日記（昭和四十年）

昭和四十年の日記について 新稿

D 真説金田一耕助 77年12月 毎日新聞社

七六年八月二十二日から七七年八月二十日までの日記（抜粋）

このうち、「桜日記」は一九四六（昭和二十一年）「続桜日記」は四七年の日記である。タイトルは、横溝正史の疎開先が、岡山県吉備郡岡田村字桜だったことに由来する。「続桜日記」以外はすべて未発表で、これらの単行本で初めて公開された。

AとBは中島河太郎編、Cは小林信彦編。CとDは角川文庫にも収められたが、文庫版では日記は割愛されていた。

現在では、柏書房で私が編んだ《横溝正史エッセイコレクション》（全三巻）に、元版のまま収録。ただし、Dの単行本では、毎日新聞の連載エッセイ「真説金田一耕助」と日記の抜粋が交互に配置されていたので、柏書房版では、エッセイパートと日記パートを、それぞれまとめておいた。

近年では、二〇二四年四月の「別冊太陽 探偵小説の鬼 横溝正史 謎の骨格にロマンの衣を着せて」（平凡社）には、「特別公開 横溝正史の「日記」として、昭和二十一年、二十二年、二十三年の日記が、それぞれ見開きで紹介されている。

二松学舎大学の山口直孝教授による特集解説は、「簡潔な生活記録——横溝正史の日記」。というか、この「別冊太陽」自体が、山口先生の編まれたものであった。

本書を皮切りとした翻刻シリーズは、現存する横溝正史の日記から、これまで公刊されていない部分を、年代順に収めるものである。

四八年一月から十月までの日記は、疎開先の岡山で書かれたもの。執筆中の作品として、「読物時事」の「黒蘭姫」、「月刊読売」の「びっくり箱殺人事件」、「男女」の「夜歩く」などのタイトルが見える。

一月十一日の項目で、かもめ書房が「黒猫」掲載誌の「小説」を送ってこなかったと怒っているが、これは金田一ものの「黒猫亭事件」の初出タイトル。この時期、イヴニング・スター社から「黒猫」という探偵小説誌が出ていたので、紛らわしい。

二月四日の項目で友人への献本の手配をしている。『暗闇劇場』（22年8月／一聯社）、『双生児は踊る』（22年9月／民書房）、『罨』（22年10月／隆文堂）、『本陣殺人事件』（22年12月／青珠社）、『蝶々殺人事件』（23年1月／月書房）と、毎月のように著書が刊行されているのが凄い。

横溝正史が岡山から東京に戻るに当たっては、海野

十三からのひとかたならぬ力添えがあったのだが、その詳細については、後段の海野・横溝書簡の解説で述べることにしたい。

四八年の日記で特筆すべきは、少年向けミステリの戦後第一作『怪獣男爵』（偕成社）が、書下し作品であるという従来の定説が裏付けられたことだろう。

一般向けの単行本と違って、児童書では雑誌連載か書下しかといった書誌データが明記されていることは稀で、『怪獣男爵』も状況から見ると十中八九、書下しと思われる。確定事項ではなかった。そのため、戦前の旧作を改稿したものである可能性を指摘する声もあったが、今回の資料で、偕成社のための書下し長篇であったことがハッキリした。

五五年一月から二月までの日記で、「墮ちたる天女」「蜃気楼島の情熱」「湖泥」などを改稿しているのは、東京文芸社《金田一耕助探偵小説選》のための手直しだろう。

この年には十月からスタートした大日本雄弁会講談社の《書下し長篇探偵小説全集》に『仮面舞踏会』で参加するが、ついに完成せず、六二年から「宝石」に連載を開始したが、これも七回で中絶した。

しかし、七四年十一月、横溝ブームを受けて発刊さ

れた講談社《新版横溝正史全集》で書下しの第十七巻として『仮面舞踏会』は、ようやく刊行された。当初の予告から、ほぼ二十年が経過していたが、横溝正史はこの作品を忘れていなかったのである。

五七年四月の日記に登場する角川書店《現代国民文学全集》はA5判函入で、細かい活字の三段組のシリーズ。そのため、第八巻には、江戸川乱歩『孤島の鬼』、木々高太郎『人生の阿呆』、横溝正史『八つ墓村』と、長篇が三本も入っているのに三百八十ページしかない。

七一年四月に『八つ墓村』が角川文庫に入ったことで、爆発的な横溝ブームが巻き起こるのだが、それより十四年も前に、角川書店の文学全集に『八つ墓村』が入っていたのだ。

電気試験所で無線通信の技術開発に従事していた佐野昌一は、一九二八（昭和三）年、海野十三の筆名で『新青年』に「電気風呂の怪死事件」を発表し、探偵作家としての活動を始めた。

奇想横溢の探偵小説を書き継ぐ一方で、科学者ならではの知見を活かした本格的な科学小説にも意欲を示し、数多くの作品を残した。

探偵小説に「振動魔」「爬虫館事件」「三人の双児」

たので、海野が人気作家となっていく過程に伴走したのは、三代目編集長の延原謙と四代目編集長の水谷準であった。

ただ、当時は探偵作家の人数が少なく、仲間意識は強かったから、本書の横溝の三五年の日記にも、海野のエッセイを読んで病気の心配をしたり、新著や手紙のやり取りがあったことが記されている。

両者の間で頻繁にハガキや封書が交わされるようになったのは戦後のことで、海野が横溝一家の疎開先の岡山に手紙を出したことから、毎日のような文通が始まったという。

探偵作家クラブ会報の海野追悼号に寄せた横溝のエッセイ「断腸記——海野十三氏追悼——」には、こう書かれている。

私はちかごろ、朝の郵便をうけとることにしよげかえる。毎日きまつてどいた、海野さんの、筆で書いた、あの達筆の手紙が見られないからだ。こゝ三年、海野さんの手紙は毎日必ず一通は来た。どうかすると手紙とハガキがいつしよに来ることがあった。二日もとぎれたかと思ふと、三日目に三通そろって来た。日附を見ると、ちゃんと毎日書いてみられるのである。

「深夜の市長」「蠅男」、科学小説に「地球盗難」「十八時の音楽浴」「生きている腸」「放送された遺言」などがある他、少年向けの科学冒険小説でも、たいへんな人気を博し、「海底大陸」「太平洋魔城」「火星兵団」などの作品を発表している。

しかし、なかなか科学小説を手がける作家は現れず、海野は念願だった科学小説時代の到来を見ることなく、四九年に結核で世を去った。

五七年に星新一がデビューすると、小松左京、筒井康隆、豊田有恒らがこれに続き、国産SFは新たなジャンルとしての独立を果たした。マンガの世界でも、手塚治虫を筆頭に、藤子不二雄や石森章太郎（後に石ノ森章太郎）らが積極的にSF作品を発表していく。

ここに名を挙げたクリエイターたちは、いずれも少年時代に海野十三を愛読し、SFへの夢と憧れをかき立てられていた。海野が蒔いた種が、巡り巡って大きな花を咲かせたのである。現在、海野は「日本SFの父」と位置付けられており、生まれ故郷の徳島県には、その業績を讃える碑が建てられている。

一九二八（昭和三）年に海野十三がデビューした時の「新青年」編集長が横溝正史である。しかし、半年も経たないうちに「文芸倶楽部」に異動になってしまっ

横溝家は疎開に当たって吉祥寺の自宅を人に貸していたが、戦後のことで、戻るから出ていけとも言えず、困っていたところ、杉山書店の社長が成城に家を見つけてくれたという。

早稲田大学に入学した長男の亮一氏が、上京した際に海野邸に挨拶に行き、事情を伝えたところ、その家はぜひ買った方がいいと、筆筒預金から購入資金を立ててくれた。海野のおかげで、横溝家は都内に戻ってくる事が出来たのである。

海野夫人の佐野英さんが追悼文集『横溝正史追憶集』（82年12月／私家版）に寄せた「追憶」には、このようにある。

今となつては昔の話になりますが、横溝さん御一家が疎開先の岡山県から今の成城のお屋敷に御上京なさったのは、思えば若葉のかほる頃でした。御長男の亮一さんが早稲田に入学を機に是非御上京なさるよう、毎日の手紙に海野は御すすめしておりました。

その頃は海野は朝起きて、仕事をする前には必ず横溝さんに御便りを書く習になつておりました。机の上によさしい字の横溝さんの封筒を見る事が一日の生活のよろこびになつていたのです。

# 資料写真1 横溝正史日記

昭和10年、23年、30年、32年

上 昭和30年2月、愛犬カピと  
下 昭和11年、療養先の上諏訪  
にて。紙飛行機を持つ横溝の両  
脇に長女・宜子、長男・亮一  
※上下とも写真提供：二松学舎大学



希望していたように、横溝さん御一家が御上京なさったその数日後、乗物に恐怖のあった横溝さんが水筒にお酒を入れて、成城から若林まで歩いてみえられました。私が横溝さんにお目にかかったのはそれが初めてでした。

横溝さんには海野が「新青年」に掲載出来るきっかけをつくって頂いたお話がよく聞いておりましたが、私に記憶がなかったのでしょうか。あんなに毎日手紙の往復してた方がその時初めてのお目もじとは、いまでも不思議に思うのです。

海野はさらに、鎌倉にいた延原謙にも、世田谷に家を手配して呼び寄せたという。「新青年」グループの友情の厚さを感じるエピソードである。

また、海野の没後も横溝家と佐野家の交流は続き、横溝は定期的な収入になるように、海野の少年ミステリの出版をポプラ社に斡旋した。実際、同社から出た『美しき鬼』『少年探偵長』『超人間X号』などの海野作品は何度も版を重ね、一九七〇年代半ばまで新刊と

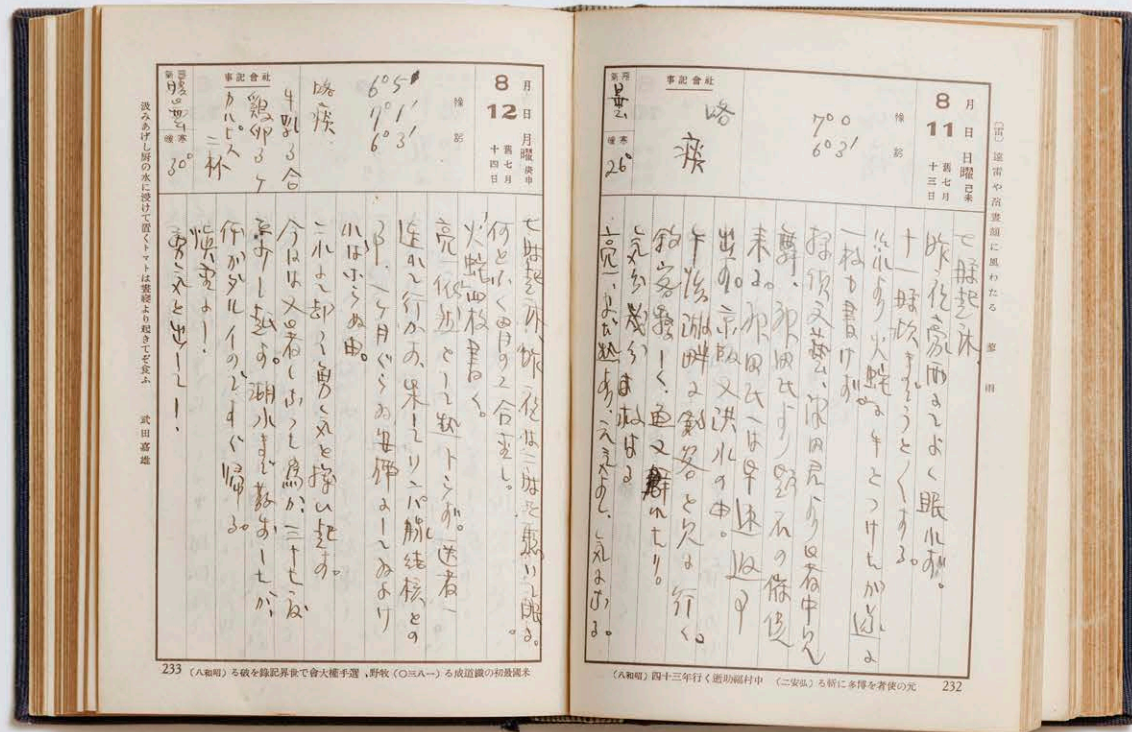
して入手可能であった。

そういえば、海野の死去によって中絶となった連載作品のうち、『未来少年』は高木彬光、『美しき鬼』は島田一男、『少年探偵長』は横溝自身が後を引き継いで完結させたが、その手配も横溝によるものだったという。

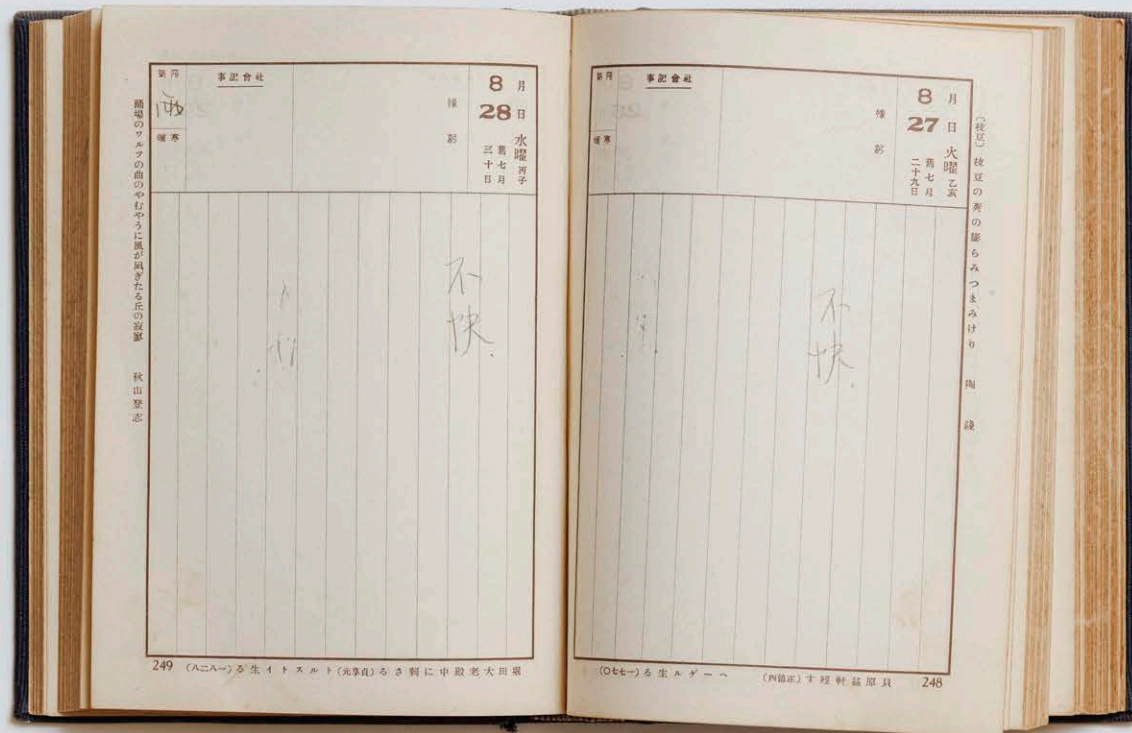
横溝・海野往復書簡については、前掲の「断腸記」の他にも、自伝エッセイ「続・途切れ途切れの記」や「日本探偵作家クラブ会報」掲載の追想エッセイ「日本文」などで、くり返し触れられているから、ファンにとっては有名であった。

しかし、七十年以上も前の、まして私信である。目にする機会が訪れるとは想像もしていなかっただけに、現物が展示されているのを見たときには、大いに興奮した。同じ思いのミステリファンの方は、私以外にも多いと思う。

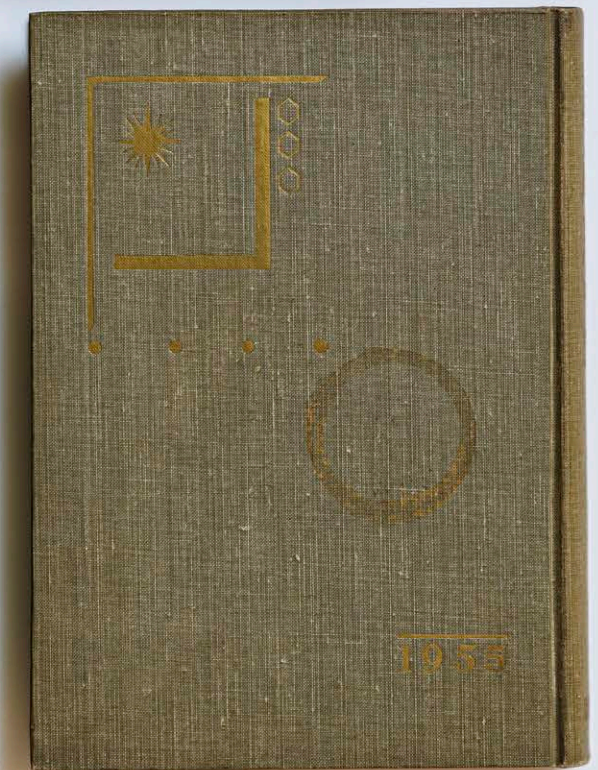
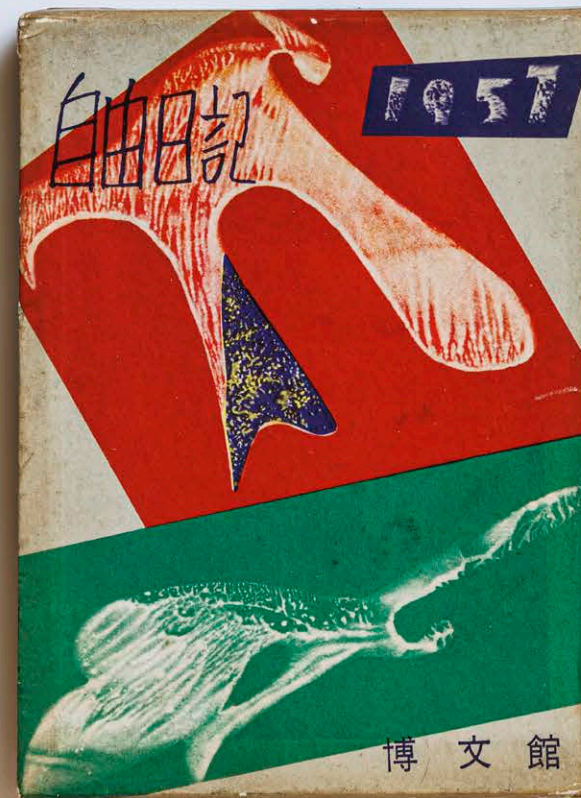
さらに、こうして活字化されて手軽に読めるようになることは、奇跡といっても過言ではない。今回の出版に関わった両家のご遺族の皆さまと世田谷文学館の方々に、心から感謝したい。



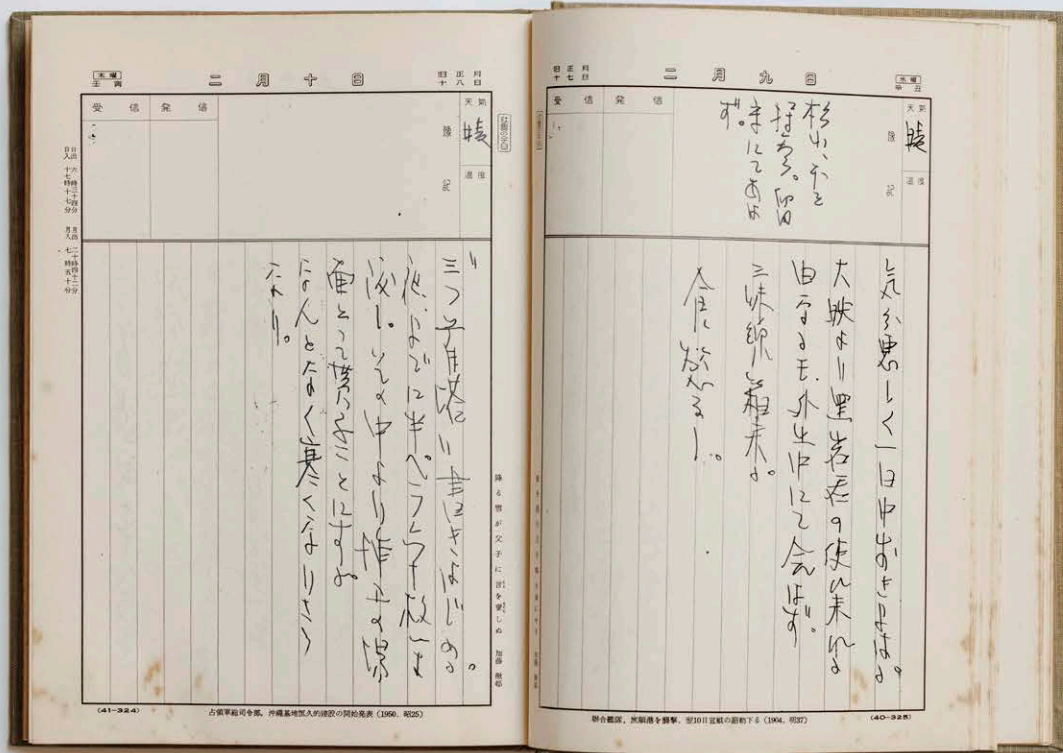
昭和10年8月11～12日の日記。12日の末尾には「慎重に！勇気を出して！」と己を鼓舞するかのよう書き綴っている



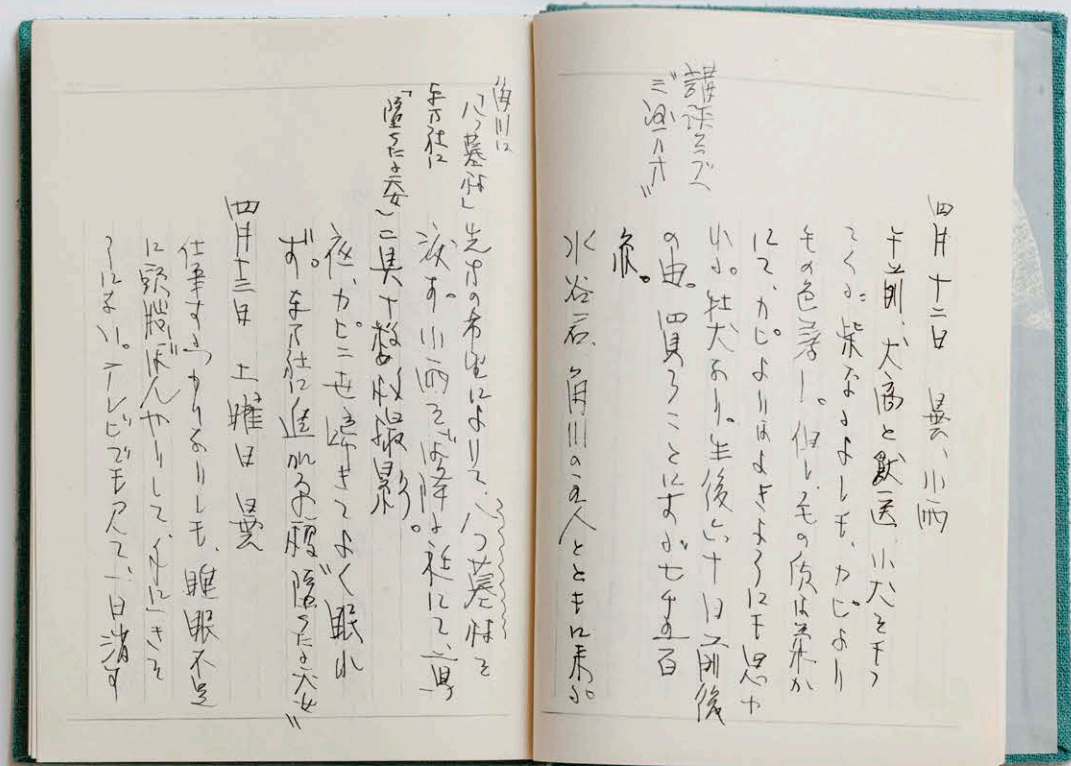
昭和10年8月27～28日の日記。8月19～31日はほとんどが「不快」の記述のみ



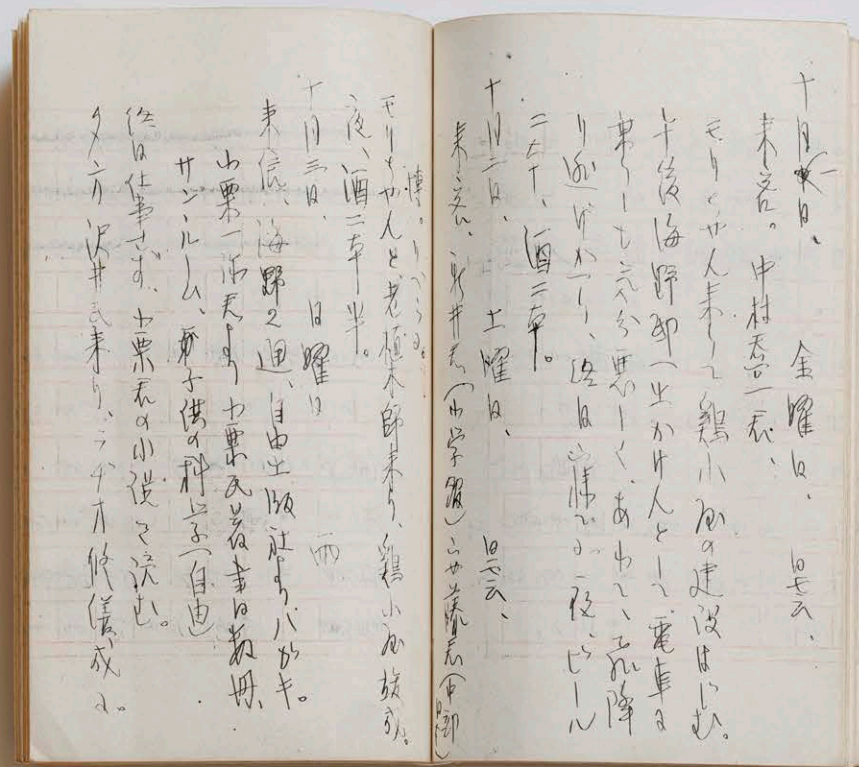
右上：昭和10年の日記、左上：昭和23年の日記（使い古しの原稿の裏を綴じたもの）、  
右下：昭和30年の日記、左下：昭和32年の日記



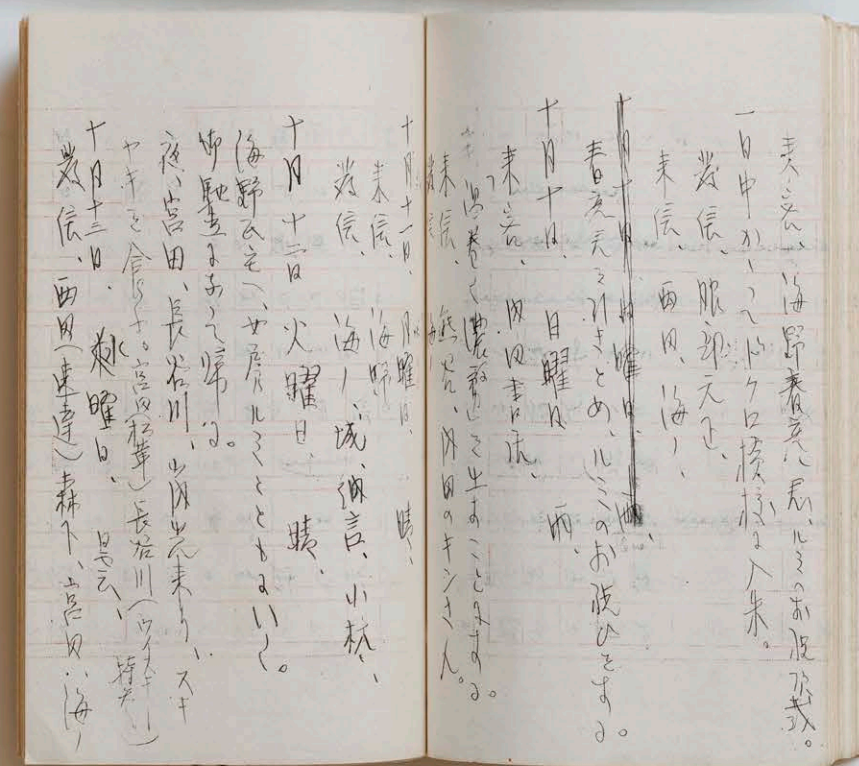
昭和30年2月9~10日の日記。10日に「三つ首塔」の執筆を始めたことが書かれている



昭和32年4月12~13日の日記。子犬を迎えた日のこと



昭和23年10月1~3日、成城の家で記された最初の日記



昭和23年10月9~12日の日記。12日には海野十三宅へ夫人とともに出かけた様子が綴られている

## 父と娘の日記からたどる、

## 横溝正史の面影

野本瑠美氏（横溝正史次女）

野本瑠美

児童文学作家。1939年、横溝正史の次女として長野県に生まれる。慶應義塾大学文学部哲学科卒。著書に児童文芸新人賞を受賞した『みたいなみたいな冬の森』（文芸の森社）、近著に『父、正史 母、孝子』（KADOKAWA）がある。

## 《頭の中のパズルを崩してはいけない》

——本日はありがとうございます。今回翻刻を掲載しました横溝正史日記と、そして今日お持ちくださった瑠美さんの小学生時代の日記を手掛かりに、お話を伺っていきたくと思います。まず、1948年の横溝日記（P47〜67）ですが、この年の夏に、疎開先の岡山から成城に引越してこられたんですね。

岡山に疎開する前は吉祥寺に住んでいました。父は1932年に出版社を退職して、退職金で大正浪漫風の家を建てたんです。玄関のドアにはステンドグラスが嵌っていて、とても素敵な家でした。2階は全部個室で、応接間には大きな電気蓄音機と、ポータブルレコードプレーヤー。モーツァルトやベートーヴェンのシンフォニーのレコード

もたくさん本棚にあって。岡山へはその応接セ

ットも全部持って行ったので「これは疎開じゃなくしてお引越した」っていわれました。でも無蓋車っていう屋根のない貨車に乗せられてしまったもので、本がみんなびしょびしょになってしまいました。カビたりもして、ずいぶん本を失いました。

岡山の家は、六畳間の上りと、八畳の父の寝室と、書齋に使った八畳間と、兄の部屋にした三畳間と、四畳半のお茶の間があるきりで、お台所は土間にお竈（へっつい）でした。それから車井戸。そんな家でしたから応接セットは使っていなかったんですが、東京に戻るとなって、それが次々と出てきたの。岡山の家には梯子段で上がる屋根裏があつて、そこに仕舞っていたんですね、よく天井が落ちなかったと思います。電気蓄音機やプ

レーヤーは出してあつても、父が執筆をしている

と聴けないんです。音楽が大好きな兄は、押し入れにポータブルプレーヤー入れて、毛布をかぶって音が漏れないようにして聴いていました。頭から湯気が出るように暑いのに、それでも音楽が聴きたくて。父は眠っているとき以外は四六時中集まっている人ですからね。黙ってるとか静かにしてろとか言う人じゃないんですけども、父の気迫というのかしら、そういうのに押されて、静かにしていなきゃいけないという家庭の掟みたいなものがありました。足音さえ立てられません。

食事のときも、途中で考え事をして、お箸から何か落ちても気が付かないんです。温かいうちに食べたほうがおいしいものも、箸にぶら下げたままじっと考えている。とにかく頭の中は小説で

いっぱいだね。物語の最初から終わりまで頭の中で全部組み立てちゃうんですよ。書きながら考える人じゃないんですね。パズルを全部頭の中に組み立ててしまう。だからそのパズルを崩しちゃいけないという感覚が、家族全員にありました。食事

も別で、一緒に食卓を囲むのはお正月三が日の朝だけです。ご飯を食べる時間ももつたいないから、錠剤3錠飲めばお腹がいっぱいになってエネルギーが出るようなもの、そういう、今でいうサ

プリメントみたいなのがあればいいのにつづつと言っていました。

ステーキ、鰻、お寿司、すき焼きとか、エネルギーが出るものばかり食べるんです。母の手料理も好きなんですけど、間に合わないんですよ。急に書き出したり急に食べたくなって言い出したりするから、作っている暇がない。だから母は幕の内弁当をよく作っていました。呼ばれたらお重に詰めてぱりっとなげていく。夜中も書くので、母はずっと起きてついでにしているわけです。夜中でも食べたいといえばまた作って。食べないと、お腹がすいてエネルギーが出ないんですね。真っ赤に燃える汽車の罐（かま）に石炭を放り込んでいるみたいでした。

でもステーキも鰻もお寿司も、家族は食べられなかったんです。父だけ特別。子どもには別に手取りのものを出していました。お寿司屋さんが「こんなにしょっちゅう注文するなら、もう庭先に店を出させてください」って言うの。成城の家の前は東宝撮影所に行く人たちも通るので、ここに店が出せたら先生が食べなくても売れるからって。お店は実現しませんでしたけれど、5月の父の誕生日にガーデンパーティーをする時には、お寿司屋さんが来て握ってくれました。

——執筆のためのエネルギーとしての食事だったんですね。お母様のご不在時には瑠美さんが作る

こともあつたとか。当時小学4年生の瑠美さんの日記にもあります。

「お昼ちよつと前にお母さまがおつかいにいったのでじつとおこたつにあたつていた。なかなか帰らないので雪だるまと雪うさぎをつくった。手がつめたくてじんじんするのでおこたつにあたつていたら、お父様が「おい」とよんだのでいったら「はんとゆつたのでこまつてしまった。お母様はまだ帰らないといった。またすこししてからまたよんだのでいったら「はらがへつた」といった。私はありあわせでしようと思つて、ちよつとまつて、といつて、お台どころえいって、戸だなをあけたらなにもないのでけさのおみおつけをぬくめてそれからごはんむしにごはんを入れてぬくめた。おつゆだけしかないのになまたまごどほしぎかなをやいてまにあわした。」（1949年12月27日）

そうでしたね。そんなふうには、ともかく常に食べる物には困らないように気を付けていました。疎開せず東京に残った方から食べる物に困っていると聞いたので、成城の家でも作物を育てました。引越してきて最初に植えたのが「陸稲」。お米一俵分とれたの。家族総出で稲刈つてね。父は岡山では肥たごを担いでいましたから、畑仕事していれば健康だと思つたのかしら。でも自分はほとんど農作業しないんですよ。父の日記には岡山で



昭和20年終戦前後、岡山の疎開宅の縁側にて。左から長男・亮一、正史、妻・孝子、次女・瑠美、長女・宜子（写真提供：二松学舎大学）

何を植えたとか、東京で畑やったとか書いてありますけど、陣頭指揮をとるわけでもなくて、ジャガイモ植える時にもちよつと穴掘って埋めるくらいでね。少しでも胸に障るとすぐ咯血しますから。成城は植木屋さんの土地だったので広い庭がありましてね。落花生とかいろいろ植えました。だんだん食が足りるようになってから、母がイチゴを植えて。お米一俵とれる土地にイチゴ植えたら大変な騒ぎなんですよ。毎朝毎朝熟しちゃって、とるのが大変。編集者の方々からお見舞いにいたたくフルーツバスケットのカゴにイチゴを詰めて、ご近所に配って歩くのが私の役目でした。残りはジャムにして瓶詰めをいっぱい作りました。それからフルーツバスケットに入っているレモンも、絞って蜂蜜を入れたものを父がとても喜んで、1日に5個も6個も搾って飲むんですよ。すると今度は皮ばかり残るから、母がマーメイドにしましてね。レモンのマーメイドは、私も、私の娘も孫も作ります。庭のスタチとか夏みかんとかでも。母の工夫が今に続いているんです。

### 《戦時中の横溝家》

戦争中は干し芋をよく作りました。ナントカ売号という美味しくないお芋をふかして、木綿糸で切りましたね。屋根に上って瓦に並べて干すわけ。

「九時ちよつとすぎて目がさめたので本をよんでいたらガタガタとゆって電気がゆれだしたのでじつと見ていたら、じしんのだいきらいなお父様がじしんだじしんだとゆってとびでてきたので私もびっくりしてよぎをひたたくって外えとびでた。お母様もとびだした。」(1949年12月26日)

寝巻のまま父は飛び出すでしょ。冬ですとね、火鉢もって飛び出すんです。自分の手あぶり用の小さな小さな火鉢をもって。そうすると母は、自分は寝間着のまま、父の着る物をもって飛び出します。私は次に毛布をもって飛び出す。だからもう癖がつかましてね、夜寝る時は自分の洋服をたたんで枕元に置くようになります。父は地震だけでなく、雷も火事も大嫌いでしたね。でもそういうことが起きると、普段静かにしてなければならなかった家で唯一みんなでキヤーキヤー騒ぐことができたので、楽しかった、嬉しかったという思いもあります。

### 《海野十三との交友》

——今回の翻刻には入れられませんでした。海野十三さんからの書簡にも「地震がそんなにお嫌いとは、おどろきました」との記述がありました。海野さんとの交流についても伺います。横溝日記に海野さんのお宅に行ったことが書かれています

それを大きな缶に入れて防空壕に保管して、防空壕で食べたりしてね。吉祥寺の家の近くに中島飛行場というのがありまして、そこに爆弾が落ちると防空壕にばらばらばらと土が落ちてくるんです。兄は防空壕にポータブルプレーヤーを持ち込んで、私が怖がらないようにとレコードをかけてくれました。

中島飛行場は飛行機を製造していたので、そこを目標にB29が来るんです。家の近くでかなり低空飛行になる。見えるんですよ、飛行機のお腹がね。兵士の顔が見えるくらい下がってくる。そうすると父がね、ベートーヴェンの「田園交響曲」の雷鳴の部分がありますでしょ、すごいところ。そこを電気蓄音機で最大音量でかけて、B29に向かって「わかるか、この芸術がわかるか!」って叫ぶんです。戦争と芸術との戦いでしたね。父は決して戦争反対とか口で言う人ではないけれど、心では絶対反対。戦争を激励する小説は一切書きませんでした。ですから食べていくのが大変でした。乾信一郎さんから勧められて書き始めた捕物帳が、戦地の兵隊さんの読み物として喜ばれるので慰問袋に入れてもらっていたんですが、人形佐七と妻のお糸との色っぽい会話からイカンと言われて、それで捕物帳も書けなくなりました。自由に物が言えないということは、本当に怖いこ

が(P66、瑠美さんの日記にも登場します)。

「今日私は海野のおじちゃんちへお母ちゃまと二りでいきました。私は五つめのわかばやしでおりてはたけの中や、竹やぶの中を歩いていきました。おじちゃんのうちの門にひょうさつがたくさんならんでいるのでよくわかりました。」(1949年1月3日)

表札がたくさん並んでいたというのはなぜかわからないのですけれど、ご本名とペンネームが掛かっていたということかもしれません。お名前といえれば私も、「うんのじゅうぞう」さんと言っていたんですよ。正式には「うんのじゅうぞう」さんというらしいですね。

海野さんと父との仲というのは、乱歩さんとの仲ともまた違ったかたちでした。海野さんとは、父が「新青年」時代に、海野さんの作品を父が認めて、それからのご縁ですね。戦時中には海野さんは大変な人気作家になったんですが、父は戦時中は書きませんでしたから、収入がほとんどなかったんです。東京に帰りたくても、吉祥寺の家は国策によって強制疎開者が入居したままになっていて、成城の家を紹介されたけども買えない。兄が東京の大学に受かりまして、海野さんのところにご挨拶に行ったときに、家は見つかったけれど買うに買えないといったら、僕が工面する

とです。

することがないから、その頃父は編み物ばかりしていました。父は40歳、私はそのとき3歳で七五三の年だったんですが、着物なんて買えるご時世じゃないので、代わりに赤い毛糸でワンピースを編んでくれました。それもフリルがいっぱい付いたフリリリの。それはほどこいてカーディガンに編み変えてしまったんですが、今も大事にとっているのは、半袖の白いレーシーなセーター。刺繍も父がしたんです。あれは編み物のエキスパートの人もどうやって編んだんでしょうというような困難な編み方らしいですよ。不思議ですね。婦人雑誌を見て、網目記号通りに編んでいたんですが、ちゃっちゃかちゃっちゃか編むんじゃないの。一目ずつ、針に糸をかけて。それでもいつの間にか編みあがってくる。でも考えごとをしていて目を落したりすると、パーっと全部ほどこいちゃうんですよ、もつたない。後年、なんで当時編み物をしてたのか聞きましたら、「原稿用紙に一字一字書くのと、一目一目編むのと似ていたから」と言っていました。

——横溝先生と編み物の組み合わせは意外に感じますね。意外といえば、地震がひどく嫌いだったとか。地震嫌いのお父様について日記に書かれています。

からと言って資金の3分の1くらいお貸し下さったんです。とてもご親切にしてくださいました。岡山にいるときにはたくさんお手紙をやり取りしましてね。きれいな筆の字で、子どもながらにこなぎれいな字を書くのはどんな素敵な方だろうと思っていたんです。初めてお会いしたとき、ああ、その通りの方だと思いました。とてもお優しい方で。同病(結婚)ということもあって、乱歩さんとも違った親しさがあつたようです。

岡山には一日三通も海野さんからの手紙が来ることがありました。検閲があつたので、何通かまとめて来るんです。三通来ると三通分父が返事を書くわけ。そうすると姉が郵便局まで自転車で行く。日文矢文って父は言っていたけど、あれが本当に、父を激励してくれたものだと思いますね。ひとり孤立していましたからね、でもその孤立がまた父の栄養になったと思うのです。おそらく東京にずっといたならば、いろんなお付き合いとかもあって、その上食糧難もあつたでしょうから作品をじっくり考える時間はなかったと思いますね。——さきほどの日記ではお母様と一緒に海野家に行っていますが、その翌週にはお父様も一緒にいらしています。

「またお父ちゃんとお母ちゃまと海野のおじちゃんの家えいきました。いったらのぶひこさん

とまさひこさんとようこねえちゃんがいきました。はるひこ兄ちゃんはまだ学校から帰っていませんでした。お母ちゃんやお父ちゃんもお話をしていました。私はようこねえちゃんなんかとランプをしていました。帰りお父ちゃんが電車ののるのがいやになったので歩いて帰りました。たけやぶやはやしやおみやのところをとうりしました。もう月あかりだけだったのでとてもよかった。」(1949年1月10日)

この時と、それから海野さんが亡くなる寸前の時(5月14日)と二度、海野さんの家(松陰神社前)から成城まで歩きました。行きは豪徳寺で玉電に乗り換えて行ったんですけども、父は乗り物恐怖症でもあったから。よく父は道がわかったものだと思いますね。暗い中、一時間以上歩いたはずで。月明りの中、成城の桜並木の影が黒々としていて、それを踏んだら地獄に落ちてしまうような思いをしながら帰ったのを覚えています。

### 《江戸川乱歩は競争者》

——横溝日記と瑠美さんの日記を見ると、出かけていくのは海野さんと乱歩さんのお宅だけですね。ご自宅にはたくさん作家仲間が集まっていたと伺いました。

成城の家は最初はガスコンロが2つだけの粗末

の時に電報一本で東京に來いって言われて。でもその時もう母と婚約していたんです。母は薬剤師のところにお嫁に来るつもりだったのが、作家になっちゃったわけですね。作家仲間はみんな呑ん兵衛で、集まっては車座になって呑むわけですから、母は「私は山賊のところ嫁に来たのか」って言うていました。母は医者の家で育って、みんな下戸だったから呑ん兵衛なんてものを知らなかったそうです。父が24、母が21で結婚して、それですぐ父は博文館で編集長になったのですが、その頃にアメリカやイギリスのミステリー、探偵小説をたくさん読んで、吸収していました。そのこともあって、日本の小説はこのままではいけないという思いがあったようです。

### 《日本らしい探偵小説を書く》

渡辺温さんという、父と一緒に博文館で仕事をしていた編集者がいたんですが、事故で若くして亡くなってしまった。温さんがもし健在だったら、父はああいう小説を書くような人にはならなかったと思います。温さんは非常にモダンで、伊達で。探偵小説はロンドン、ニューヨークを舞台にした横文字ばかり読んで。温さんと一緒だったら外国ものの焼き直しのような小説を書いていたかもしれない、本当に仲良しでしたから。なんでもシル

な台所だったんですが、お客さまがいらつしやるようになって改造しました。大工さんが熱意を込めて、まるで今のシステムキッチンのようにしてくれて。倒れそうな日本家屋なんですけど、キッチンだけはピカピカ。父が、食器棚の色は瑠美に任せるからというので、私が好きなペーパージントグリーンに塗ってもらいました。明るいキッチンで、ダストシュートまで作ってくれたんです。ストンと入れると下にあるバケツに入るようになっていました。立派なオーブンもつけました。大きな電気冷蔵庫も三越まで母と買いに行きました。食器も20人分近くの魚河岸に買いに行きました。魚屋さんが、そんな大勢のだったら魚河岸に買いに行けばいいよって教えてくれて。まるで魚屋さんのどんぶりみたいな、分厚い、不格好な食器を山ほど買ってきました。同じ大工さんに折り畳み式のテーブルを2つ作ってもらって、それとお座敷の朱塗りの座卓を3つ並べて。父の体調が良いと、十五、六人もお客様がいらつしやっていたものですから。

——乱歩さんが急にいらした日のことも日記に書かれていました。

「今日は、金曜日なので、ピアノなのでかみをゆっていたら電話がかかってきた。江戸川のお小父ちゃんがくるんといつてかかった。いそいでおそ

クハットに燕尾服で慶應に通っていたという方です。父はカンカン帽に白いパンツとブレザーで銀座を闊歩していて、そんな仲間毎日遊び暮らしていましたからね。

探偵小説は都会でなければ成り立たないと、母にずっと言っていたらしいんです。それもあって疎開をするのは嫌だったようなのですが、姉が勤労動員されていた中島飛行場に大爆撃があって九死に一生を得てから考えを変えると共に、瀬戸内海の島々の小説を書きたいというのがあって、疎開しました。そうしたら、実は岡山は、横溝家の先祖の地だったんです。親戚付き合いは面倒くさいから親戚筋のあたりとは少し離れたところに住んだんですけどね、ところが、どうも「横溝家の顔」っていうのがあるらしいんですよ。村の人が「あれは横溝家の顔だ」って言うていっぺんにバレたわけ。余所者じゃないってわかったことで、一気に仲良くなりました。

加藤一さんという、父の作品も読んでいたインテリなお百姓さんがいて、村のゴシップなんかをいろいろ聞かせてもらったんです。それと、田舎には家柄というものが因習的に残っていることに気が付いた。あの時代の都会でそんなこと考えないで暮らしてきた人が初めて気が付いたんです。それで、日本らしい探偵小説を書くって覚悟した

うじをしたり机えをだしたりした。もう新宿に來ていたので大いそぎだった。もうすぐきてしまった。お小父ちゃんがきてごあいさつだけしてピアノにいった。ピアノから帰って、おぎしきにいった。火ばちにあたったらいくとき一っほんしかたばこがさきつていなかったのにひばちのまわりに三とうりぐらいでとりまいていた。灰おとしがあるのに火ばちばかりにいられた。お父様もだいい火ばちにさしていた。帰るまでたばこばかりすっていた。ごはんをすませていたらこんどはおかさけをあまりのまないのでもあまいものがすきだった。」(1950年1月13日)

乱歩さんは父にとって、競争者でした。乱歩さんが目標で、尊敬する先輩、追いつきたい存在。乱歩さんがいなきや書く気が起きないんです。乱歩さんは「宝石」の編集とか、皆さんをバックアップしたり、まとめたり、そういうことに能力を発揮されて、だんだん書かなくなってしまう。それがくやくしてくね。「何とか書いてほしい、そうしないと僕の目標がなくなるから」って。酔っ払うと夜中に「乱歩の馬鹿野郎！」って怒鳴るんです。「乱歩さんが書いてくれないなら僕は書けない」なんて言いながら泣くような人でした。

父が18歳の時に乱歩さんと出会って、24歳



昭和22年11月、乱歩一行が疎開先の岡山の家を訪ねてきた時の写真。左から瑠美、乱歩、西田政治、正史、鬼怒川浩(写真提供:二松学舎大学)

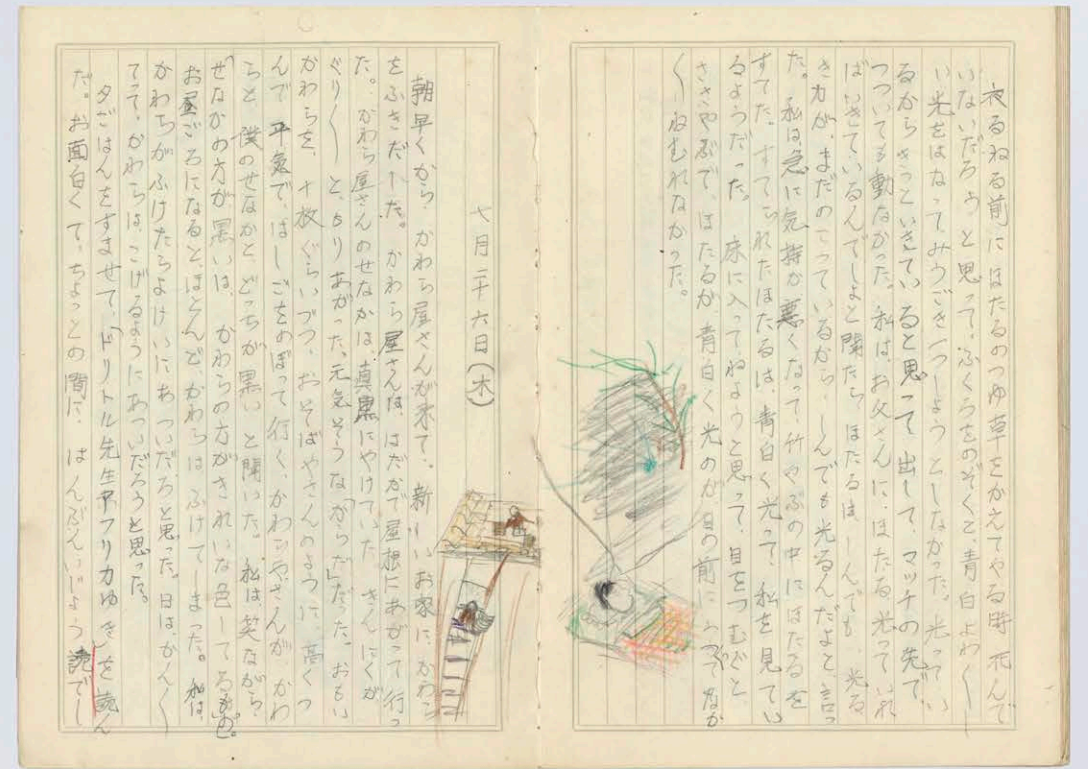
のか、これで書けるって思ったのか。ですから、父は不思議な人です。ピンチがあると、チャンスがめぐってくるように努力する。ピンチをピンチのままにしない人でした。ね。「ピンチがチャンス」っていうのは我が家のモットーですが、努力をしないとチャンスは来ないということもあわせて、父に教わったのだと思います。

——ありがとうございます。

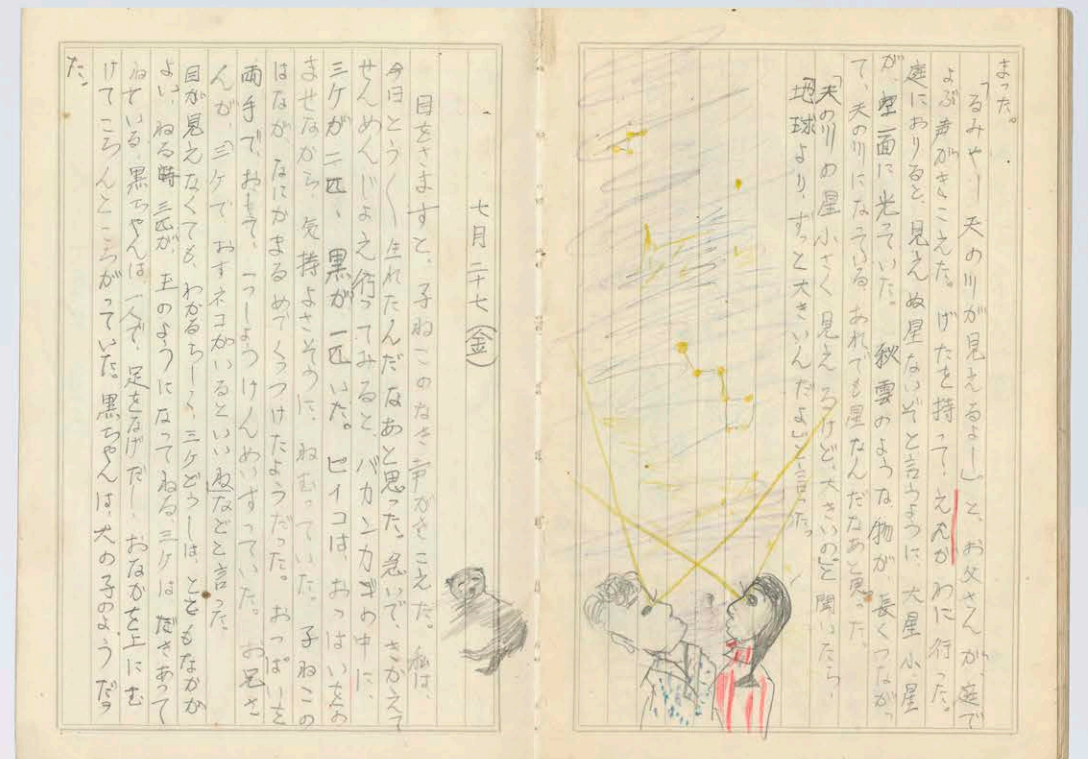
2025年6月17日収録

資料写真2  
海野十三  
横溝正史あて書簡  
昭和21年4月14日  
23年10月31日

昭和23年10月23日、海野宅にて。  
左より海野、西田政治、横溝正史



瑠美さんの1951年(昭和26年)の日記から  
(右)7月25日。蜜は死んでも光るよ、という話をお父様から聞いて、眠れなくなりましたこと。(左)7月26日。瓦屋さん came こと



(右)上段の続き。お父様と天の川を見上げたこと。(左)7月27日。子ねこが生まれたこと

九月廿七日  
海野十三

九月廿六日 午後三時  
奥様が見えぬに悲しく、  
たいへんうれしいことでした。お  
かげに元気を加えました。  
あなただけの涙とお悔みの由は  
懐かしいです。吸入がいいと思  
ひますか、如何。リンサレ、コデ  
インも少くありませんから、  
吸入用をどうぞ。  
今日はおの心持が前進  
始末三日目です。昨日まは  
と小かき起す。たが、今日  
何か原因があるに違いない  
と思ひます。遠因はハ  
い問題にせりと思ひます。

所へは、現在の無能を残念がら日まし  
にやえ、また。  
与たムニわしの様様人字も、どこにいのか  
ありの件のことはいま忘れかけている。こ  
んど、死刑囚の死体部、朱子件、作らま  
し、犯人がからくは、もし、そうそう忘  
れゆるよ。そのうすれ、もう一つの件が起  
たら、そのときは完全な心こしませら  
人間はさよのうのい、前の二つの件をい  
んてら  
を見舞に行つた。が、その会見中に博士は肉  
絶してしまつた。話は九鬼刑務所へ移つて、  
月夜に死刑囚は至平が絞首刑となり、その  
死体が阿蘇陀堂に移されたが、その夜、  
阿蘇陀堂で、  
外務省、  
入道、  
さうはつて、  
をうはつて、  
をうはつて、

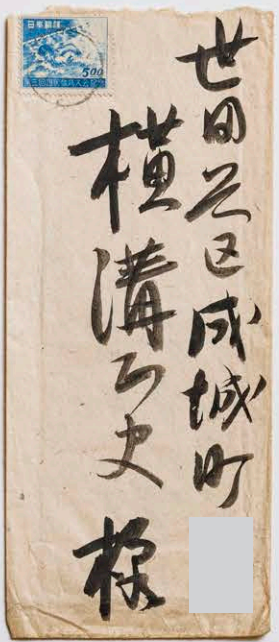
昭和23年9月26日の書簡。「超人間X号」の草稿(部分)裏面にしたためられている

おを禁  
い得ず  
今日の方は同感  
究の平上信とよまかど、  
今更のやうにこれより、何かお祝  
の事柄もかると考へました。が、ゆく  
ゆく、  
まどろこしく、  
おを禁  
い得ず  
今日の方は同感  
究の平上信とよまかど、  
今更のやうにこれより、何かお祝  
の事柄もかると考へました。が、ゆく  
ゆく、  
まどろこしく、

口々、  
さして、  
日は七月廿一日だ。あるは、  
念日である。今朝  
一日に入ります。ん  
る、まると昨日の  
二とである。す  
ると、  
サウラ、  
こも、  
はぬ。二は  
えらいことにな  
つた。と、  
おを禁  
い得ず  
今日の方は同感  
究の平上信とよまかど、  
今更のやうにこれより、何かお祝  
の事柄もかると考へました。が、ゆく  
ゆく、  
まどろこしく、

口々、  
さして、  
日は七月廿一日だ。あるは、  
念日である。今朝  
一日に入ります。ん  
る、まると昨日の  
二とである。す  
ると、  
サウラ、  
こも、  
はぬ。二は  
えらいことにな  
つた。と、  
おを禁  
い得ず  
今日の方は同感  
究の平上信とよまかど、  
今更のやうにこれより、何かお祝  
の事柄もかると考へました。が、ゆく  
ゆく、  
まどろこしく、

昭和23年7月31日の葉書(拡大)。横溝正史一家の帰京にあたり、「寿」の大きな字で喜びを表現している



十月廿二日  
 あんといよ 暖かいせい、後、  
 物も元気にまはるに、この  
 とまよとばかり、あまは、  
 ヤリあやました。十五枚と十枚  
 そーと夕方に、これ、  
 すぎたると、後悔、  
 何一も持ちこしの、  
 三三山精し、  
 いりぬる、明日一杯は火のな

病も者のひまもなしといふに  
 身。ふんも因果で、  
 病も鳥に、  
 た。そーと、  
 こ下よに、  
 人、  
 え、  
 キのち、  
 のおけをく、

大と、  
 見、  
 た、  
 今、  
 十三

「インタビュー2」

# 海野十三と家族の記憶

坂井陽子氏（海野十三次女）

鈴木江利氏（海野十三次男・暢彦氏の長女）

## 《渡り廊下の図書室》

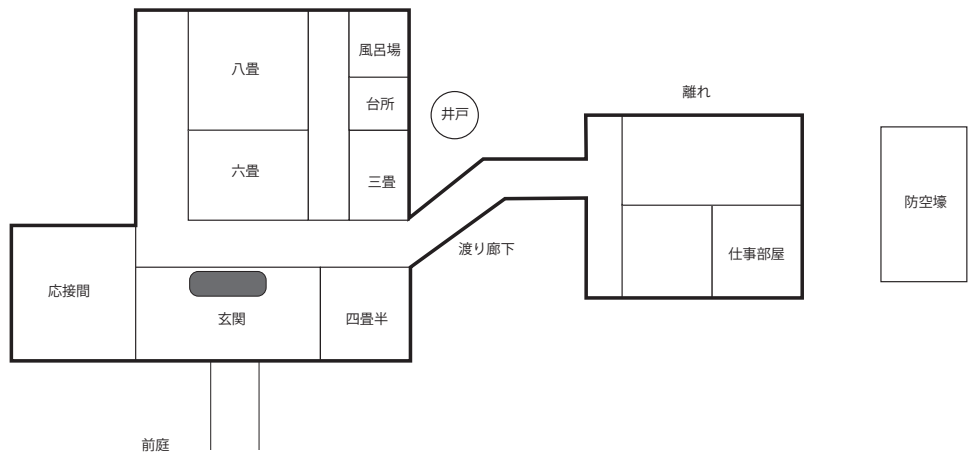
「きょうは、お父様の思い出についてお話を伺っていきたいと思います。ご家族はご両親とお姉さまの朝子さん、陽子さまの下に晴彦さん、暢彦さん、昌彦さんと坊ちゃんたちが続くのですね？ お父様がご自宅で執筆されるのでさぞ気を使われたのではないのでしょうか。」

坂井 5人も子どもがいますからね、うるさいものだから太平洋戦争が始まるころには母屋のほかに離れを作ってそこで執筆していました。離れまで6、7メートルの渡り廊下があって、そこに書棚を作って「おまえたちがいつでも本が読めるように」ってぶ厚い百科事典がたくさん置いてありました。親戚がくると、「おじさんのところは本がいっぱいあっていいね」と喜んで見ているんで

すが、私たちは外で遊んではかりました。門から入ると小道があって両開きの玄関から一段上がります。玄関が結構広かったです。はじめは母屋で書いていたと思うのですが、子どもたちがうるさいので、離れを作ることになったんです。

鈴木 私が高校生になるまでこの家がありました。平屋で大きな玄関と応接間、六畳と八畳、三畳の部屋があって、お風呂、台所。台所の後ろから離れがあったようです。応接間は洋風で縁側がありました。離れは私が物心つく頃にはもう無くなっていました。庭がかなり広がったです。戦争中はカボチャを作っていて父はもう一生分食べたといっていました。

坂井（家の間取り図を見ながら）離れは八畳と六畳、四畳半だったかな。三部屋の一番奥を書斎



《海野十三郎間取り図》 ※坂井陽子氏・鈴木江利氏からの聞き書きを元に世田谷文学館が作成した

昭和23年10月22日の書簡。横溝の「獄門島」(「寶石」昭和22年1月～23年10月連載)最終編を読んだ感想が述べられている



左から英（海野十三夫人）、三男昌彦、海野、長女朝子、前左から次男暢彦、長男晴彦、次女陽子。1938年、自宅庭にて

にしていました。ここが防空壕です。広さがあるので食料を入れておいたりしました。庭では戦争中は畑を作りました。かぼちゃ、南京豆、トマト、いろいろ作りました。二百坪くらいあって、庭では鬼ごっこでもかくれんぼでも泥遊びでも友だちはみんなうちに来て遊んでいました。でも「今日はお父さんいるからうるさいのだめよ」と言われると、どこかへ遊びに行ったりしてました。

### 《仲が良かった両親》

坂井 父はやさしくて、母は元気で、いつも張り切っていました。父にはいつもちゃんと御馳走が出るんです。食道楽っていうんでしょうか、お酒

は飲まなかったけど、おつまみみたいなものが好きで、子どもたちもみんな好きで、父から「食べるか？」なんて言われるとお茶碗出していました。——こちらはご家族全員で撮影なさった写真ですね。

坂井 私は弟たちがいたから男の子みたいでね、この自転車はね、暢ちゃんがこっちに乗りたいというから私が譲って、私はこっちの木馬に乗ってふくれているんです。いまでも恨んでいますよ（笑）。男の子たちはとても仲がよくていつでも一緒なの。

父に関してはへえーって驚くような話題が多いんです。「今日はテレビが映る実験をやってきたよ」とか子どもたちに話してくれるんです。計算もすごく好きでした。父の実家はご典医だったから数学が好きだったんだと思います。新橋で特許事務所を開いていましたが、いつから小説を書くようになったか私にはよくはわかりません。絵が上手で、風の絵を描くと武者絵なんか売っているものよりも上手なんです。四国から出てきて神戸の中学へ、そこから早稲田大学に行っただけで、結婚する前は浅草に住まいを構えていましたから、そのとき見たものを子どもたちに作ってやっていたんだと思います。

二子玉川に遊園地ができて、雑誌「少年倶楽部」



自宅縁側にて、左より海野、暢彦、晴彦、英夫人

えで、私たちにはお小遣いを絶対くれなかった。お祭りにいっても駄菓子屋さんでもなんにも買えないの。だから抗議したことありますよ。最後にはねえやさんが一緒に行ったときは買ってもらえるようになりました。でも、新橋のお寿司屋さんには何回か連れて行ってくれたことはあるのよ。暢ちゃんだったかな、アナゴを好きで、「ぼっちゃんそんなにアナゴばかり食べたらなくなっちゃうからほかのにして」なんて言われたことがありました。食べるときは食べさせるの。

### 《無線ラジオで戦況の情報を集める》

——海軍報道班員として海野さんはラバウルに行かれますが、結核を再発して帰ってこられますね。戦中戦後のことで印象的な思い出を聞かせていただけますか。

坂井 僕は戦争に一番に行きます、って感じでした。それで太平洋戦争が始まってまもなく真つ先にラバウルまで船に乗って行っただけです。姉の旦那さん（長女・朝子さんの夫は海軍軍人）や兵学校を終えたばかりの若い海軍士官の方たち6人くらいの方たちと一緒に戦争に勝つつもりで意気揚々として出かけていきました。けれどラバウルは灰が降るから、そこで胸をやられてしまいました。昭和17年のお正月から行って、5月に帰って

きました。一緒に行った海軍の方たちには戦地でよくしてくれてありがとうって、目黒の雅叙園でごちそうしたりしていました。若い軍人さんたちがよくみえるので、近所の人たちがうらやまがりました。そういう若い方たちと知り合いになったのが、父としては楽しかったんじゃないかと思えます。

終戦の年の3月の空襲のあたりから電気がすぐ停まるようになったんです。そうしたら無線機みたいなラジオで一生懸命ニュースを聞いてね、ほら、世田谷文学館の展示にも写真があったでしょう？ 聞いたニュースは塙のところには張り出していました。隣組の人たちが正しい情報を知らないといけないからと言ってね。「俺はほんとうのニュースが聴けるから」と言っていました。

戦争が終わるとページ（実際には公職追放の仮指定）になってしまいました。本人も身体が悪くなつて家に引つ込むようになったでしょう。そうすると家にはいろんな方がいらっしやいました。廊下のことちの六畳からそつと覗くとどなたがいらしたかがわかる。延原謙さんや大下宇陀児さんはよくいらっしやって、母がおもてなしをしていました。横溝（正史）さんがいらっしやる時は何かもってきてくださる、父は電気のこと小説のことわかるから、どういうふうにしたら出版

の車が三軒茶屋まで迎えに来てくれて、私たちに遊園地の楽しさを経験させてくれたことがありました。私は車に酔っちゃうからいやだつて言ったんだけど「お受けするのがエチケツトだ」つて言われて出かけました。気持ち悪くなつちゃうから頂いたお菓子も食べられなくてね。

両親は電気試験所で知り合つて、お互い気があつて仲が良かったみたいです。茨城から来たねえやさんが2人いて姉妹なのね。両親は私たちをねえやさんたちに任せて神戸や箱根に出かけちゃうんです。「お土産買ってくるわね」と言つて、何日か泊まつて帰つて来るんです。私たちは遊ぶのに忙しくて文句も言わず、お土産を待つていました。両親は子どもたちにはぜいたくさせないという考

できるかご相談に見える方も多かつた。有名な方もいらっしやいましたよ。よく覚えてるのは、学生服を着た手塚治虫さんです。真直角にお辞儀なさつてね、まだ学生さんだけど本を書く人だよつて聞きました。

### 《勉強できるうちは勉強しなさい》

坂井 父の具合が悪くなったところ、私は初めて父に「女学校を5年でやめると、もう一年（新制）



行灯ラジオを発明したころ

高校っていうところへいくのどうしたらいいですか」って相談しました。そうしたら「これからいろいろな事習った方がいいから勉強は続けなさい」って言われました。その頃は学校に残る人のほうが少なかったんですが、6年まで行って、それから先は、好きな大学へ行けばいい、っていうことになったんです。でも父が（昭和24年）5月に亡くなってしまって、その先は母がしたいことをやりなさいって、ドレスメーカーに3年間行って23歳で結婚しました。父は勉強できるうちは勉強しなさい、大学も行ってほしいという思いがあったのでしようが、母は早くお嫁に行つたほうがいいという考えで、若い私はどちらに行つたらいいか悩みました。父がもう10年生きていてくれたら私の将来も変わつていたと思います。

### 《父の突然の死と母の偉さ》

坂井 父が亡くなったときは悲壮でした。急だっ

たんです。私は高校3年生でしたが、驚いて青くなってしまいました。かかりつけの先生もすぐに来てくださったんですけどね。私はその場にいません。上の弟は六畳の部屋に座り込んで出てこない。二番目の弟も出てこない。三男の昌ちゃんも近くにいました。私はお姉さんだから弟たちを静かにさせなきゃって思っていました。

だんです。「これおいしい水だから」って。3日3晩寝てなかったから、こっくんと寝ちゃったんです。

鈴木 父は明るいことが好きな性格だったのですが、そのときは誰にも見つかからないように押し入れに入つて泣いていたそうです。

鈴木 祖母は祖父から「僕は50歳までしか生きないよ。だけどお嫁さんになってほしい」と言われたそうです。「ほんとうかなと思つたけれど、ほんとうにそうなつちやつた」って祖母は言っていました。祖父は予期していたのかもしれないですね。

坂井 母は何があつてもちゃんとしていました。延原（謙）さんの奥さんが母をさすりながら「みんながいるから、手伝うから」と言つてくださったけど、それどころじゃなかったですね。横溝さんはじめ、みなさんがたくさんいらしてくださいってお通夜は徹夜でした。六畳と八畳の部屋を使つてにぎやかなお葬式でした。母はお酒とお寿司の支度をしてね。このとき、私ははじめてお酒飲ん

2025年5月27日収録

## 父の思い出

佐野暢彦（海野十三次男）

今でも父のことを想うと父の端正な顔が浮ぶ。父の所作には威厳があった。昨今では家族は皆友達になつてしまつたので父親が一人『孤独に耐えて凛とした風格を持つ』などすつかり影をひそめた。

父は「自分のことは自分でしなさい、人に頼るな」「節約に努めムダをなくせ」「どんな人にも敬意をもって接し礼節を忘れるな」「何事にも好奇心をもって」「どんなことでも平易に説明しなさい、それができなければ己の理解が不十分だと思ひなさい」などよく言われたが、ついぞ「勉強しなさい」とは言わず、成績を見せても何も言わなかつた。

太平洋戦争も末期になり日本の戦況は日増しに悪化していった。学童を戦火から守るために学校は父母に集団疎開か緑故疎開かを選択するよう通達がなされた。父はそれをいつまでも決心しなかつた。父に、学校から急がされているので早くと頼んでやつと緑故疎開にしようとした。早速家の引越の整理を始めた。家族総出で整理に没頭したが整理は遅々として進まず、ついに父は『疎開するなど全く無理だ』とサジを投げた。家族一同はその決断に安

堵した。あたりを見廻すと家財が散乱していた。その中に書物が山のように積み上つておりその片付を始めると沢山の英文の書籍が出てきた。英語の本と雑誌であつた。英語も分らなかつたが雑誌を手にとつて見ると何やら面白そうな挿絵や絵がありしかもカラー刷であつた。本は厚くページをめくるとあちらこちらに赤と青のエンピツで書き込みがあつた。筆跡から父のものだと思つた。その頃戦時中で英語などは使うなど、音楽の音階でさえ、信じられないことだが「ドレミファソラシド」ではなく「ハニホヘトイロハ」になっていた。そんな中で父はこんなものを読んでたのかと驚いた。これらの書物は結局土を掘つて作った防空壕に収めたが、そののち雨水が浸水し、だめになつたのは残念なことであつた。父の小説のヒントになつたのであろうか。

昭和十九年（一九四四）を過ぎると空襲はますますはげしさを増した。父は何を思つたのか兄（十二才）と私（十才）をつれて、前日の猛空襲で未だ戦火の残る本所・深川から上野・浅草方面に徒歩で探索した。道路には市電の架線がたれ下り折れ曲つて道を

# 資料翻刻Ⅰ

## 横溝正史日記

昭和10年、23年、30年、32年



成城自宅の縁側にて

横溝正史(よこみぞ・せいし[本名:まさし] 明治35・1902~昭和56・1981)  
兵庫県生まれ。小説家。1921年「新青年」に処女作を発表、1925年江戸川乱歩の招きにより上京し、博文館に入社する。「新青年」「文芸倶楽部」などの編集長を経て文筆業に専念し「鬼火」などを発表。探偵小説の発表が難しい戦時下は捕物帳時代小説の分野で活躍した。1945~48年、岡山県吉備郡岡田村(現真備町)で疎開生活を送る。1946年発表の本格長篇推理小説「本陣殺人事件」で戦後の推理文壇に多大な影響を与え、映像化された作品も多数。1948年より没年まで成城在住。

封鎖していた。子供を抱きかかえたまま黒こげに焼けた死体が道端に放置されていた。あたりを徘徊している人々の顔は火傷で髪は焼け焦げでこの世の事とは思えぬ光景であった。隅田川には逃げ遅れた人たちが飛び込んだのである。人々が死体となって川面に浮いていた。公園に引き上げられた死体は大きく掘った穴の中に投げ込まれていた。見てはならぬものを見た気持でうつつと長すぎる時間をすごした。疲れ果ててやつと駅までたどり着いた。その間父は終始無言であった。父に声を掛けることもできぬほど言葉を封印する威圧があった。父は我々に何を教えたかったのだろうか。

父は我々兄弟が生まれるとそれぞれの写真を撮り、出生から成長の過程を写真帖に収めた。それに、皮表紙の日記帖にはその時々父の思いをこめた寸言を書き留めていた。残念ながら年月を重ねると共に散逸し今は兄弟誰れも、数枚の写真を除いて、持ち合せていない。記憶にあるのは『父は五十までしか生きられない、だから写真と言葉を残す』と書き残していたことであった。

ある日父は私を呼んで『横溝さんの家を訪問するがお前もくるか』と言いつつ父と共に横溝家へと向った。昭和24年(1949)5月15日だった。母は父の体調を気遣いハイヤーを呼んで送り出した。父と共に家族で出掛けることはよくあったが私だけを連れてのことは始め

てであった。横溝家では大変な歓待を受けた。父は横溝さんと話はずんでご機嫌であった。父は、酒はビールならコップ一杯、清酒なら猪口で三杯が精一杯であった。かたや横溝さんは大変上戸であったが二人共意気投合している様子であった。夜もかなり深まり宴を終えた。それではと立ち上ると外は春の雨がかなり強く降り始めていた。不覚にも父は天気良好であったので車はすでに帰していた。それを知ってすぐ車を呼びますからとのご親切なご配慮があったが父は帰りは久しぶりに電車を考えていますからと再三の申出にも強くご辞退した。それでは亮一(横溝氏長男)さんをお宅まで同行させますとのこと父はそれはありがたくご好意を受けた。外に出ると春にしては強い雨で温度はかなり下っていた。ふと父の身体にさわりがいいのか、との思いが頭をかすめた。結局亮一さんにご同伴いただき無事その夜家に安着した。

その翌日から父の具合が悪くなったのであろう。翌日の夜、父の部屋の雨戸を締めるのは私の毎日の役目であったのでいつもの調子で雨戸をガラガラと締めると部屋の中から障子越しに『雨戸はもう少し静かに締めなさい』と父の叱咤の声が聞えた。

その夜半に父は大咯血し母が泣きさけぶなか咯血が喉につまんで窒息死した。享年五十一才であった。

※徳島県立文学書道館文学特別展「生涯一〇年記念 日本SFの父 海野十三展」図録(2008年)より転載



書けぬ旨重ねて返事を出す。甚だ残念なれど致し方なし。午後、依然として気分重し、早慶戦をきく。早8―慶4、蒸暑くして体温上昇す。五時半―六時半まで思ひきつて畑へ出る。却って幾分か気分軽くなる。夕食後四十分庭にて外気に浴す、涼しくして気分稍直す。ラヂオにて一柳君\*のチェロを聞き感服す。

\*萱原氏 萱原宏一。編集者。「講談倶楽部」「キング」の編集長を務めた

\*一柳君 チェリストの「柳信二（一柳慧の父）」

〔6月10日 月曜〕

6。4。6。5。6。9。6。7。6。5。大小便良好

朝二椀 昼二椀 夕二椀 晴 暑

六時半起床 火蛇下書十二枚 浅見君より手紙。譚海\*来る。午後は全部裸体にて空気浴安静。昨日にくらべ稍涼し。夕刻畑へ赴く。これが第一の楽しみ。気分快し、八時半より床に入。九時頃眠る。

\*譚海 「少女女譚海」。博文館発行の児童雑誌

〔6月11日 火曜〕

6。4。6。4。6。7。6。4。大小便良好

朝昼夕二椀 晴 冷

熟睡して気分爽快なり。七時半起床、畑に赴く。火蛇十七枚下書、最初より書直し六枚書く。新少年\*来る。午後かなり涼し、殆ど安静を怠る。夕刻畑へ赴く、夜庭にて四十分位空気浴、十五分散歩、注射 ラヂオを聞く、寝つかれず。「仮面」のプロット成る。「まぼろしの女」の書出しの腹案成る

\*新少年 博文館発行の児童雑誌

〔6月12日 水曜〕

6。4。6。3。6。4。6。3。大便稍軟シ 小便濃シ

朝二椀 昼夕二椀半 晴 暑シ

六時起床。Poll\* 畑へ行く。火蛇四十五枚迄書く。昼は概ね安静、夕方畑へ行く。外国雑誌を漁る。夜は殆ど安静せず。

\*Poll 不明

〔6月16日 日曜〕

6。2。6。6。6。7。6。3。大便良シ 小便濃シ

朝二椀 昼夕二椀半 晴 暑シ

朝六時起床 pundo\* 畑へ行く。水谷氏、探偵文芸より手紙 返事出す。朝、九時より十二時迄仕事。昼安静四時より六時迄朝の仕事の清書、ホンヤク八枚なり。夕、畑へ行く。散歩後安静。本日は少し安静不足。夕方の仕事の後に喀痰あり。気を付けるべし。

\*pundo 不明

〔6月17日 月曜〕

6。2。6。5。6。7。6。3。大便稍軟シ 小便濃シ

朝二椀 昼二椀 夕二椀 曇 蒸ス

六時起床、畑へ行く。朝九時より十一時迄仕事、ホンヤク八枚下書、同清書、昼安静。四時頃まで外国雑誌を読む。水谷氏より水彩画の書方来る。五時より六時半まで畑。茄子ノ苗を植ゆ。夜二十分散歩、一時間余庭にて藤椅子に寄る。雨降りさうにて降らず。九時より九時半までラヂオ 十時頃より雨来る

〔6月18日 火曜〕

6。3。6。5。6。7。6。2。大小便良シ

朝昼晩二椀 牛肉 曇 暑シ

六時起床。夜来の雨七時頃歇む。畑へ行く。（春秋社の神田修二\*より出版に就て手紙来る）九時より十一時半まで仕事 写実主義\*十枚訳す

朝二椀 昼夕二椀半 食欲好シ 晴 薄寒シ、

朝七時起床、昨夜うまく眠れず寝足りぬ気持ち。火蛇十八枚迄書く。午後は主として安静、夕刻畑へ赴く。草花に肥料をやる。今日は天気よきも薄ら寒きほどの陽気なり。二時、入浴、とても体だるし、「探偵文芸」\*来る、宜子\*遠足元氣にて戻る。寝つき悪し。

\*「探偵文芸」奎連社発行の「探偵文芸」は昭和2年に廃刊している。昭和10年3月創刊の同人誌「探偵文学」（「シュビオ」の前身とされる）のことか

\*宜子 横溝正史の長女。よし子とも表記

〔6月13日 木曜〕

6。3。6。5。6。6。6。3。大便良シ 小便濃シ

朝二椀 昼夕二椀半 晴 温

朝七時起床。火蛇三十枚迄書く。午後は主として安静、森下氏、岩崎君\*より結婚通知状、アサヒグラフ\*来る。森下氏には手紙を出す。夕刻畑へ一時間、食後又半時間畑へ行く。二十日大根ヲ間引く。夜は殆ど安静せず、九時半就床

\*岩崎君 岩崎昶。映画評論家、映画製作者、ドイツ文学者

\*アサヒグラフ 朝日新聞社発行のグラフ誌

〔6月14日 金曜〕

6。3。6。4。6。8。6。3。大便良シ 小便濃シ

朝二椀 昼夕二椀半 晴 暑シ

七時起床 火蛇三十六枚迄書く。並びに下書八枚書く。昼は概ね平穩にゐる。夕方畑へ行く。夜は殆ど安静せず。九時半就寝。夜中に火事にて眼を覚す

〔6月15日 土曜〕

6。2。6。5。6。7。6。3。大便下痢 小便濃シ

午後は安静 外国雑誌を読む。五時より六時まで畑作り、散歩。杓子菜の種を蒔く。注射。夜七時半より八時十分まで散歩。本日は朝より蒸暑し。最高二十九度、但し夜は急に涼しくなる。

\*春秋社の神田修二 春秋社創業者の次男で「探偵春秋」の編集長を務めた神田澄二のことか

\*写実主義 リチャード・コンネル「写実主義」〔「新青年」昭和10年夏期増刊号に掲載〕

〔6月19日 水曜〕

6。3。6。5。6。8。6。5。大便軟シ 小便良シ

朝昼晩二椀 曇 涼

六時半起床。睡眠稍不調。畑へ行く。散歩十五分、入浴、入浴のせみかとても体だるく九時より十時までうたゝねする。十時より十二時半までホンヤク十枚やる。午後は安静。四時半より五時二十分迄湖畔散歩。二十分休憩、それより畑へ行く。殺虫剤を施す。午前少女クラブ\*、本位田君\*より手紙来る。春秋社への出版断り状と共に直ちに返事を出す。

夜ラヂオ

\*少女クラブ 「少女倶楽部」。講談社発行の少女雑誌

\*本位田君 本位田準一。本位君などとも表記あり。江戸川乱歩の旧友で、「文芸倶

楽部」 「実話雑誌」などの編集にも携わる

〔6月20日 木曜〕

6。3。6。5。6。7。6。3。大便下痢気味 小便ヨシ

朝昼夕二椀 曇 冷シ

六時半起床。睡眠不足にて気分重し。畑へ行く。十時より十二時迄ホンヤク九枚する。手紙も何も来ず甚平和なり。昼は安静。ホンヤク二枚する。夕方畑へ行く。散歩四十分。夜散歩二十分。アダリン\*四錠を飲み眠る。

\*アダリン ドイツ製の催眠鎮痛剤

〔6月21日 金曜〕

6。4。 6。2。 6。8。 6。3。 大便下痢気味 小便良好

朝昼夕〔二枕 曇雨 寒シ〕

八時起床。アダリン残りて眠く物憂し、友井君\*より手紙来る。直ちに返事並びに本位田君より手紙を書く。文藝通信\*来る。昼安静。四時より五時迄散歩。途中より雨に降らる。黄金宝库\*を読む。「薔薇郎」\*にこの形を幾分取入れやうかと思ふ。本日は仕事を一切見合はず。

\*友井君 小説の解剖学的描写について相談していた慈恵医大の医師・友井敏男のことか

\*文藝通信 文藝春秋社発行の文芸誌

\*黄金宝库 F・T・バルグレイブ著“The Golden Treasury”の事か

\*「薔薇郎」 薔薇郎が登場する「薔薇と鬱金香」のことか

〔6月22日 土曜〕

6。6。 6。4。 6。7。 6。5。 大便軟シ 小便濃シ

朝昼夕〔二枕

七時起床、朝飯前四十分散歩、九時半よりホンヤク二枚する。疲れてるのでそれでホンヤクはあきらめ、ホンヤク六十枚水谷君に送る。上塚君\*より九月号に五十枚書けとの手紙来る。引受ける返事を出す。あとで何だか心配になったが、何とかやる事にする。十一時半より十二時半迄、火蛇九枚下書する。昼はウト／＼してゐる。夕方聚雨\*あり、夜降ったり歇んだり。「妖鏡」\*といふ題を講談雑誌\*の小説の題に撰ぶ アダリン四錠

\*上塚君 上塚貞夫。筆名・乾信一郎。作家、編集者。「新青年」5代目編集長

\*聚雨 複数記載あり、驟雨のことと思われる

\*「妖鏡」 未発表作か

す事にする。トマトが大分実りかけたり。

〔6月27日 木曜〕

6。7。 6。2。 便固シ 雨 暑シ

七時半起床。排便腰湯を使ふ。畑へ行く。アサヒグラフ来る。「妖鏡」十枚まで書くが気に入らず、全く別のものにしようかと思ふ。午後「火蛇」十枚を最初より書直す。この方は稍意に充てり。四時頃より雨となったため、今日は一日散歩せず。講談雑誌の筋に苦む。「夜光獣」\*にしようかと思ふ。

\*『夜光獣』 7月3日の項にもあるように「獣人」〔講談雑誌〕昭和10年9月号所収に改題

〔6月28日 金曜〕

6。8。 曇 暑シ

七時半起床、昨夜二時まで眠らず。畑へ行く。「火蛇」十六枚書く。「夜光獣」のプロット成る。一日、降ったり歇んだり。午後はとても蒸暑シ 今日より又朝日新聞を取り始む。

〔6月29日 土曜〕

6。8。 豪雨 暑シ

夜来の豪雨益々甚し。八時起床。洪水になるかと心配す。「夜光獣」十一枚書く。何とも言へず蒸暑し。ホーム・ライン\*来る。午後は安静にしたり、散歩したり。湖水へ水を見に行く。片倉館\*の側まで水が来てゐるのに驚く。号外、京都大洪水の由。一日先生を待てど来らず。夜は又雨となる。

\*ホーム・ライン 玉置合名会社発行の雑誌

\*片倉館 上諏訪にある温泉施設

〔6月30日 日曜〕

\*講談雑誌 博文館発行の大衆文学雑誌

【備考】6月22日と6月23日の日記上部に「↑↑」の交換の矢印あり

〔6月23日 日曜〕

6。3。 6。2。 6。8。 6。5。 大便軟シ 小便濃シ

朝昼夕〔二枕 曇 蒸ス

七時半起床、朝飯前一時間散歩。十時より十一時半迄、ホンヤク九枚する。昼、法政対ヒリッピン\*の野球をきく。夕方又一時間散歩。少し散歩し過ぎる嫌ひあり、「黄金宝库」\*を読む。夜半時間散歩、四時頃注射大小、夜ラヂオ

\*ヒリッピン フィリピンのことか

〔6月24日 月曜〕

6。3。 6。2。 6。7。 雨 涼シ

七時起床。別に变りなし、「妖鏡」のプロットを考へる。雨にて終日閉じ籠ってゐる。どこからも手紙来ず。夜仲々寝つかれず。

〔6月25日 火曜〕

6。3。 6。2。 6。8。 便固く痔起ル 晴 冷シ

七時起床。○入浴、畑へ行く。散歩少々「妖鏡」六枚書く。面白くなし。昼注射、午後又妖鏡を初めより書く。面白くなし、段々悲観する。夜アダリン四錠、寝つかれず。十二時頃散歩。二時を打つのを聞きてやっとうと／＼する。

〔6月26日 水曜〕

6。8。 6。7。 便固シ 曇 蒸暑

七時起床。排便後腰湯を使ふ。畑へ行く。上塚君、水谷君、本位君より各々手紙来る。「妖鏡」六枚書く。稍々自信を持ち直すが依然として面白くなささうなり。ホタルの事、仮死の埋葬の事などでいくらか誤魔化

6。9。 雨曇 26。

八時起床。入浴、雨まだ小さいのが降ってゐる。夜光獣十六枚迄書く。但し又嫌になり、最初より書き直さうかと思ふ。憂鬱なり。午後雨は歇みしも、陰鬱な天気蒸し暑し。但し温度は二十六度。四時半頃先生来訪。注射。「牧逸馬」氏\*の計を号外に見る。京都の洪水愈々甚しき由。本日も又何となく心苦く苛々する。夕方より風強し。

\*「牧逸馬」氏 小説家。林不忘、谷譲二、牧逸馬の三つのペンネームを使い分けた

〔7月1日 月曜〕

6。9。 雨 暑シ

夜中豪雨。殆ど眠らず。講談雑誌八月号来る。文芸通信より三、四枚書けと来る。どうしようかと思ふ。「夜光獣」始めより書直し十二枚迄書く。十一時頃より十二時迄又豪雨。午後四時頃迄安静、五時頃より六時迄、湖畔散歩、水溢れて釣客の夥しく群れたるを見る。夜、庭にて藤椅子に椅子、或ひは歩き廻る。夕方より雲切れはじめ星影チラリホラリ。但しまだ晴れさうになし

〔7月2日 火曜〕

6。9。 雨 涼シ

アダリンを嚙んでかなり熟睡す。新青年より「蔵の中」の稿料来る。百六拾五円也。礼状出す。「夜光獣」下書四十二枚迄書く。雨降ったり止んだり。午後、水谷君より探偵随筆六枚書けと来る。承諾の旨ハガキ出す。文芸通信へも何か書かうと思ふ。夜散歩半時間。雲稍々切れて星影洩る。

〔7月3日 水曜〕

6。9。 雨 涼

八時起床。畑へ行く。相変らず雨。「獣人」最初より十二枚清書し直す。

獸人とは夜光獸の改題なり。思ひがけなく野村胡堂氏\*より懇切な見舞状を戴く。「新青年」を待てども来らず。午後は安静、夜、野村氏へ礼状を出す。

\*野村胡堂氏 野村胡堂。小説家

〔7月4日 木曜〕

7. 1. 雨 涼

八時起床。入浴。降ったり歌んだり。暴風の警報出る。畑へ行く。新聞の新青年の広告見る。「獸人」二十二枚迄清書す。新青年来らず。本屋へ注文す。大下氏\*より来信、「蔵の中」に対する好意ある批評なり。午後文芸通信へ随筆四枚送る。大下氏へ礼状を書く。本屋に新青年来る。女房がひどく子供を折檻す。今日は少し仕事し過ぎ昂奮す。アダリン四錠。

\*大下氏 大下宇陀児。探偵作家

〔7月5日 金曜〕

6. 6. 6. 6. 6. 6. 5. 曇 涼

八時起床。何となく疲労して気分優れず。天気依然としてハッキリせず。獸人八枚清書す。疲労す。午後は安静、四時より五時まで家族一同と共に湖畔を散歩し畑へ行く。海野氏\*の随筆を新青年に読み、氏の病氣らしいのが何となく気になる。見舞状を出さうかと思ふが止す。却っていけないやうな気がして。新青年今日も来らず多分紛失したのだらうと思ふ。

\*海野氏 海野十三。小説家

〔7月6日 土曜〕

6. 4. 6. 7. 6. 8. 6. 9. 6. 4. 曇、雨 涼

七時半起 Pony\*床。便固くして稍出血す。腰湯を使ふ。亮一\*昨夜より

熱あり。はしかの疑ひあり医者に見て貰ふ。まだ不明、「獸人」十二枚下書

清書三十七枚迄する。西田氏\*より来信。「蔵の中」の讃辞なり。すぐ返事を出す。アサヒグラフ、文芸通信より受取る。亮一、三十九度の熱を出す。いよくはしからし。はしかならば心配いらぬとの事なり。夕方腰湯使ふ。尻痛し、痔の薬入れ毛糸の猿股をはく。

\*Pony 不明

\*亮一 横溝正史の長男。音楽評論家

\*西田氏 西田政治。翻訳家、探偵作家。神戸二中時代の友人・西田徳重の兄

〔7月7日 日曜〕

6. 6. 6. 6. 6. 6. 6. 1. 痔出血少々 曇 蒸ス

七時起床 痔出血、腰湯を使ふ。「獸人」四十七枚迄書く。稍心臓悪くすぐ疲れる。講談クラブ\*来る。亮一スツカリ熱下り、元氣なり。午後は階下にて安静。上塚君より中元来る。早速礼状出す。夕方畑へ行く。夕食後一時間湖畔を散歩す。注射。何となく体だるし、頭熱く心臓が重いやうな気がする。

\*講談クラブ 「講談倶楽部」。講談社発行の大衆文芸誌

〔7月8日 月曜〕

6. 6. 6. 6. 6. 6. 9. 6. 5. 晴 29

七時起床。腰湯を使ふ。「獸人」最後迄書くが四十一枚より又書き直し、四十五枚迄書く。今日は氣持よく、疲労を覚ええず。「探偵文芸」来る。午後、髭剃りする。宜子が又熱を出す。亮一は元氣なり 夕食後一時間半湖畔を散歩す。久し振りの晴天にて今日は一日氣分朗かなり。夜はラヂオにて河鹿の声をきく。

〔7月9日 火曜〕

6. 3. 6. 8. 晴 暑シ

六時半起床。暑いので痔もよくなった様子、腰湯を使はずに済ます。「獸人」五十五枚書きあげる。上塚君より題知らせとって来たので早速手紙を書く。西田氏よりハガキ、江戸川さん\*が手術後よくないときいて、早速本位君に問合せ状を出す。この二、三日夢見が悪ので甚だ心配なり。夜「獸人」を読み直し、汽車便にて送る。宜子の熱は相変わらず、大して上りもしない模様。子供に積木を買ってやる

\*江戸川さん 江戸川乱歩。小説家、探偵作家

〔7月10日 水曜〕

6. 8. 6. 8. 7. 晴 聚雨アリ 29

昨夜寝つき悪く十二時頃アダリン四錠飲む。八時起床。朝より暑さ厳しく、蒸す。心臓やゝ負担を覚ゆ。今日は一日仕事を休む事として寝てゐる。ぶろふいる、譚海、新少年来る。午後注射。七時より八時半迄散歩、夕方二十日大根を撒く。

〔7月11日 木曜〕

6. 4. 6. 8. 7. 0. 7. 0. 6. 4. 晴、薄曇 30

七時半起床、新青年へ探偵随筆六枚書いておく。「少女クラブ」来る。午後。散髪、剃鬚。入浴、五時すぎ、畑にて地震を感ず。かなり大きな地震にて驚く。夜。家内一同湖畔を一時間くらゐ散歩、入浴のためか、甚だ四肢だるし。本日は今年中最も暑し、宜子熱下る

〔7月12日 金曜〕

6. 4. 6. 9. 6. 9. 6. 4. 薄曇 29

七時半起床 何となく体物憂し。一日仕事を休む事とする。静岡大震災の号外 寝たり、起きたり。午後上塚君より手紙来る。「獸人」の受取りなり。直ちに「獸人」の一部訂正の手紙を出す。夕七時頃中川君\*来訪。九時頃まで話して帰る。それより散歩 今日四時頃より段々曇り初め

て夕刻よりとても涼しくなる。

\*中川君 「文藝倶楽部」の編集助手をしていた中川史郎か

〔7月13日 土曜〕

6. 4. 6. 6. 6. 7. 6. 4. 曇 涼シ

午前七時起床。昨夜はどういふものか大へん眠れず不快。仕事をしかけた所へ中川君来る。十一時頃迄話して帰る。後、「火蛇」最初より十一枚清書す。午後半時間程昼寝す。体ダルシ、四時半より六時頃迄散歩。本位君、水谷君より手紙。海ノさんは何でもなかったが、江戸川さんはあまり経過よからず、おまけに敏男さん\*の自殺一件を本位君の手紙にて知り、ガク然とす。何とも言ひやうなく暗澹たる氣持になる。

\*敏雄さん 平井敏雄。乱歩の末弟

〔7月14日 日曜〕

6. 4. 6. 6. 6. 9. 6. 4. 晴 30

七時起床、冷水摩擦。軽く散歩。「火蛇」二十四枚迄清書す。午後安静。注射。水谷君に手紙を書く。夜一時間半ほど湖畔を歩く。コロムビヤといふゲームをはじめて見る。

〔7月15日 月曜〕

6. 6. 6. 8. 6. 9. 6. 9. 鼻血少々 曇↓聚雨 27

七時半起床、冷水摩擦、畑へ行き、「火蛇」第一回分四十五枚清書す。午後、安静。夕方畑へ行く。茄子、胡瓜、二豆ト灰ヲヤル、段々曇ツテ来テ蒸暑クナル。夜、八時十分ヨリ八時五十分マデ散歩。パチンコトイフ遊戯ヲハジメテ見ル。ラヂオ聞ク。九時頃ヨリ雨トナル アダリン三錠。

〔7月16日 火曜〕

6. 6. 6. 7. 6. 9. 6. 4. 雨、曇 雨 29

七時半起床。冷水摩擦。昨夜は寝つき悪しく、十二時頃アダリン三錠の

めども、眠れず一時半頃散歩す。今日は眠く頭重し。午前中に、「火蛇」二十一枚下書きす。午後、安静。四時半頃より六時迄畑。セロリーを移植し、後へ二十日大根の種を蒔く。三つ葉を間引く。ナスターチューム、ローダンテなどを引き抜く。パチンコを見に行きたいと思へども雨のために行けず。

〔7月17日 水曜〕

6. 4. 6. 8. 6. 7. 6. 5. 曇 涼シ  
七時半起床、冷水摩擦 昨夜はうまく寝つかれず。一時をきく。(人の妻\*を読みたるせみらし) 十時より十二時半迄に火蛇第二回四枚清書す。午後、三十分程眠る。本位君より中元。新青年より増刊稿料百四拾五円。西田氏よりハガキ、税務署よりトクソク来る。夜一時間あまり皆で散歩。ソレゾレ返事出ス。

\*人の妻 バーサ・M・クレイ著、黒岩涙香訳「人の妻」か

〔7月18日 木曜〕

6. 5. 6. 8. 6. 7. 6. 6. 6. 5. 曇、夕方より雷雨 涼シ  
七時半起床。昨夜散歩が過ぎし為か体がだるいので、冷水摩擦を控ゆ。昨夜は十二時をきいて眠る。午前中(十時―十二時半迄)に「火蛇」第二回目、十四枚迄清書す。午後は殆んど安静。夕刻より聚雨。雷あり、新青年増刊来る。東京へ五十円送金。正木\*、茅野\*、神沢先生\*へそれへ中元。

\*正木 正木俊二(不如丘)。医師、作家。横溝が昭和8年に入院した富士見高原療養所の初代院長

\*茅野 上諏訪の茅野病院の院長

\*神沢先生 神沢太郎。茅野院長の甥で、横溝の主治医

〔7月19日 金曜〕

6. 6. 6. 8. 7. 0. 7. 1. 6. 7. 快晴猛暑 晴 32. 9  
六時半起床。入浴 昨夜うまく眠れたせみか気持ちよし 火蛇六枚書く。亮一は通じあり段々よろしい。友井さんの雑誌来る。午後より猛烈に暑くなり、遂に三十三度、本年最高の暑さなり、体温亦大いに昂り七度三分。神沢師亮一を見舞はる。夜、家族と共に湖畔散歩。帰ると家の中がとてもし暑く

〔7月23日 火曜〕

6. 8. 7. 0. 7. 1. 6. 7. 快晴猛暑 晴 32. 9  
七時起床。相変わらず暑し、仕事を休んで一日寝てゐる。友井さんより雑誌来る。亮一スツカリよくなり、お粥なれど食事大いに進む、今日も昨日に劣らず暑い、慣れたせみか、昨日ほど体温上昇せず。夕方湖畔へ散歩に行くも、腹痛くすぐ引返す。風少しもなく寝苦し。

〔7月24日 水曜〕

6. 6. 6. 8. 6. 4. 快晴猛暑 晴 32.  
六時起床。階下にて七時迄横になる。冷水摩擦。仕事を休んで寝てゐる。昨日より稍温度低く、風がある為に変しのごよし 春秋社の神田氏より手紙、すぐ返事を出す。「面影双紙」\*送れとハガキ出す 夜は一同と共に街へ散歩に出、落語全集を買ってくる。亮一坊主になる。宜子は今日で学校はおしまひ、夜は寒いくらゐ

\*「面影双紙」「新青年」昭和8年1月号に発表

〔7月25日 木曜〕

6. 3. 6. 4. 6. 9. 6. 5. 晴曇 29.  
八時半起床、昨夜は寝つき悪しく、アダリン四錠吞みて、一時過ぎに眠る。午前中に、火蛇七枚下書きす。神田氏に手紙出す。「鬼火」「蔵の中」など整理す。友井さんに手紙を書く。午後、「蔵の中」に一寸手を入れる。夜湖畔を一時間あまり散歩す。

6. 4. 6. 6. 6. 9. 6. 5. 夕刻より雷雨 曇 蒸ス  
七時起床。昨夜は十二時をきいて眠る。体ダルシ 午前中に「火蛇」第二回、二十六枚迄清書す。午後は殆んど安静。夕刻畑へ行って、大根の種を蒔き、キャベツの苗を植える。馬鈴薯の収穫あり。夕飯前に四十分程散歩す。夜は聚雨あり。ラヂオ狂ひて聴えず。

〔7月20日 土曜〕

6. 3. 6. 5. 6. 9. 6. 3. 曇 蒸ス  
六時半起床。昨夜は寝つきよく十時頃眠る。夜中一度眼覚めたるももなく眠る。午前中(九時―十二時迄)火蛇三十六枚迄書く。水谷君をはじめその他の諸氏より贈物来る。水谷、上塚、長井\*、荒木\*、広瀬\*、堀\*の諸氏へ礼状を出す。文芸通信、実話雑誌\*来る。夜七時半より八時半迄湖畔散歩

\*長井 長井壽助。小説家

\*荒木 荒木稔。筆名・橋本五郎。探偵小説家。筆名は他に荒木十三郎、女銭外二

\*広瀬 広瀬将。渡辺啓介・温兄弟の友人で、「新青年」にも小説を寄稿した

\*堀 堀経道。博文館時代の友人

\*実話雑誌 非凡閣発行の雑誌

〔7月21日 日曜〕

6. 4. 6. 6. 6. 8. 6. 5. 薄曇 暑  
七時半起床。昨夜は寝つき悪く一時をきいて眠る。朝ケダルシ、仕事をやすんで十二時頃迄ウトウトする。女房は学校の先生のところへ挨拶にく。友井氏より来信、二時頃昼飯、亮一、食べたものをみな吐き出す。嘔吐二三回、神沢先生に診て貰ふ大した事なし。注射。夜は割合早く寝る。

〔7月22日 月曜〕

6. 6. 6. 8. 7. 0. 7. 3. 6. 7. 晴 33. 猛暑

〔7月26日 金曜〕

6. 3. 6. 5. 6. 8. 6. 6. 6. 6. 晴 29.  
八時前起床、冷水摩擦、朝食後十時頃までうとうと眠る。十二時まで仕事、「火蛇」第二回分書きあげる。午後、「蔵の中」に手を入れる。夕食後「鬼火」前篇に手を入れる。八時より九時まで散歩、九時頃散歩より帰って検温すれば六度九分。今日は殆ど安静をせずこれではいけぬと思ふ。

〔7月27日 土曜〕

6. 5. 6. 9. 6. 9. 6. 9. 喀痰 晴 30.  
七時半起床。「鬼火」後編に手を入れる 海野氏より著書を送らる。何となく物憂く、心樂しまず。喀痰あり。夜は散歩を見合せる。

〔7月28日 日曜〕

6. 5. 6. 7. 7. 1. 7. 1. 6. 9. 喀痰 晴 32.  
八時起床。仕事を休む。何んとなく体だるく、心樂しまず。喀痰あり 春秋社、正岡君\*より手紙来る。温度上昇、体温亦昂る。注射。夜は湖水まで往復、

\*正岡君 正岡容(のちに正岡容)。作家、落語・寄席研究家

〔7月29日 月曜〕

6. 3. 6. 5. 6. 9. 7. 1. 6. 3. 晴 32.  
七時起床。午前中に「鬼火」後編に手を入れる。午後は安静、暑くして体温亦上昇す。夜家内一同湖水へ往復す。

〔7月30日 火曜〕

6. 5. 6. 8. 7. 1. 6. 3. 夜、聚雨 雷雨 晴 32.  
七時起床。午前中に「鬼火」後編に手を入れる。午後は安静。暑くして体温亦上昇す。中川君より手紙来る。夜家内一同湖水へ散歩に行く。雷雨至りて章周\*へ帰る。豪雨にして雷又甚し。寝られず。二時頃アダリ

ン四錠をのめども、眠れず五時をきいて眠る。

\* 章周て 周章てる (あわてる) か

〔7月31日 水曜〕

6. 9. 6. 夕方より曇 晴 34。

八時起床。昨夜の雷雨にて涼しくなるかと思つたのに反対に又暑し。

午前中うたゝねする。大阪、横山君\*より中元来る。午後安静、暑し。

豆自動車が来るといふので夕食後片倉館へ行けども来らず、帰る。講談雑誌、新青年より原稿料来る。

\* 横山君 不明

〔8月1日 木曜〕

7. 0 晴 34。

七時起床、相変わらず暑い事なり。新青年、講談雑誌へ原稿料の礼、海ノ

氏へ「火葬国」\*の礼、横山氏へ中元の礼、神田氏へ出版承諾の旨、萱

原氏へ原稿遅れる旨、武夫\*へ原稿紙の依頼状をそれぞれ出す。上田君\*

に五枚の原稿送る。武夫より新青年の古い分送り来る。午後は安静、黒

白書房\*より暑中見舞、夜一同と共に湖水に趣く。

\* 「火葬国」 『火葬国風景(海野十三短篇集)』(昭和10年、春秋社)

\* 武夫 横溝武夫。横溝正史の異母弟。「新青年」7代目編集長

\* 上田君 あとに何度か記載のある六桜社の上田か

\* 黒白書房 探偵小説を多く刊行した出版社

〔8月2日 金曜〕

6. 3. 7. 0. 夕方聚雨。晴 33。

七時起床。相変わらず暑し 午前中に火蛇第三回下書十二枚書き後、愛商

対岐商の野球をラヂオできく。愛商2—1岐阜商 午後は安静、ぶろふ

いるの九鬼澹君\*より何か書けといつて来る。断り状を出す。高森氏\*よ

り転居通知、文藝春秋より暑中見舞ひ。夜湖畔に散歩に行き、夕立に逢

ふ。夕立後、並木通を散歩す。

\* 九鬼澹君 九鬼紫郎の筆名のひとつ(他に三上紫郎など)。小説家、探偵作家、編

集者。「ぶろふいる」編集長を務める

\* 高森氏 高森栄次。編集者。「新青年」最後の編集長を務める

〔8月3日 土曜〕

6. 3. 6. 8. 喀痰あり 曇 29。

起床七時、火蛇十二枚下書する。午後中ラヂオにて、野球予選をきく。

講談雑誌来る。夜は家族一同街へ出て、芥川全集と鷗外全集、(共に改造社の円本)を買つて来る。武夫、本位田君より手紙来る。本日は涼しく、熱も低し 但し、一日中殆ど安静を怠り背骨痛し、

〔8月4日 日曜〕

6. 3. 6. 9. 喀痰あり 晴 30。

七時起床、火蛇三十四枚迄下書する 正岡君より礼状来る。ホームライ

ンより原稿依頼状来るが書かぬ事にする。武夫に礼状出す。注射最後な

り。夜は一時間半程湖畔逍遙す。日昼は相変わらず暑いが朝晩はメッキリ

涼しく大変しのぎ易し。喀痰検査にやる。

〔8月5日 月曜〕

6. 6. 7. 0. 喀痰あり 曇 29。

七時起床、「火蛇」第三回目九枚書く。新青年来る。今日は何となく体

だるく、胸痛し、一日憂鬱で寝てゐる 午後、都市対抗野球をラヂオで

聞く。夕方、探偵文学、戸田君\*より暑中見舞来る。こちらからも出す。

\* 戸田君 戸田謙介。編集者。昭和8年、本位田準一、横溝武夫とともに出版社、

六人社を発足

〔8月6日 火曜〕

6. 5. 6. 8. 6. 7. 6. 4. 喀痰あり 曇 25。

八時起床。何となく体だるく、仕事をするのが嫌なり。海野氏より手紙

来る。早速返事出す。火蛇を三枚書く。夕方湖畔を三十分ばかり散歩す。

夜は家の周囲を軽く歩く。九鬼君よりハガキ、今日は曇にて大へん涼し

い。にも拘らず体だるく、わけても手足が抜けさうなのは、暑さの疲れ

が今頃になって出たのかも知れぬと思ふ。用心々々。

〔8月7日 水曜〕

6. 4. 6. 8. 6. 3. 喀痰アリ 晴 涼

七時起床。依然として体だるし、午前中に火蛇八枚書く。午後ラヂオに

て都市対抗をきく。講談クラブ来る。博と準一\*来る。夕方湖畔を軽く

散歩。江戸川氏より手紙来る。選集の件なり。改めて断り状出す。夜湖

畔散歩。寝つき悪しく十二時頃眠る。

\* 博と準一 博は横溝の末の弟。準一は不明

〔8月8日 木曜〕

6. 4. 6. 9. 6. 4. 曇 涼シ

八時起床。十一時頃までウトウトする。体いよいよダルシ。今日は一日

仕事を休むことにする。博と準一は小児たちを連れて山へ行く。午後ラ

ヂオにて都市対抗の野球戦をきく。海ノ氏、ぶろふいる社から来信、ぶ

ろふいる社へハガキ出す。江戸川氏へ手紙書く。気分悪しく、ブローム

カリ\*をのむ。八時頃飯を食ひ、十二時頃眠る。死を願ふや切なり。

\* ブロームカリ 鎮静剤。ブローム剤とも表記している

〔8月9日 金曜〕

喀痰 曇 涼シ

八時起床。博と準一は朝の汽車で帰る。仕事に手をつけたが、一枚も出

来ず、いら／＼するばかり。食欲殆どなし。午後ラヂオで都市対抗の準

優勝戦をきく。夕方、海野氏へ書道雑誌来る、江戸川氏より、履歴の間

合状来る、すぐ返事を出す。食道薬\*来る。死を願ふや切なり。

\* 食道薬 食道薬社発行の月刊誌

〔8月10日 土曜〕

喀痰あり 雨 涼シ

八時起床。朝中かゝって、火蛇三枚書く。興味全くなく筆重し。昼中かゝっ

て火蛇一枚書く。探偵文芸より小栗氏\*論をかけと来るが断る。気分重し。

亮一少し悪し。アダリン三錠

\* 小栗氏 小栗虫太郎。小説家、探偵作家。昭和8年、横溝の代理原稿として「新青年」

に「完全犯罪」が掲載され、作家デビューした

〔8月11日 日曜〕

7. 0. 6. 3. 喀痰 曇 26。

七時起床。昨夜豪雨にてよく眠れず。十一時頃までウトウトする。それ

より「火蛇」に手をつけたが遂に一枚も書けず。探偵文芸、津田君\*よ

り暑中見舞、神田氏より題名の催促来る。神田氏へは早速返事出す。京

阪又洪水の由。午後湖畔に釣客を見に行く。釣客夥しく、魚又群れたり。

気分幾分救はる 亮一、まだ熱あり、元気なく、気になる。

\* 津田君 津田莞。少年雑誌などの画家

〔8月12日 月曜〕

6. 5. 7. 1. 6. 3. 喀痰 牛乳3合 鶏卵3ヶ カルピス二杯 晴曇 30。

晴曇 30。

七時起床、昨夜は二時を聴いて眠る。何となく胃の工合重し。「火蛇」

四枚書く。亮一依然として熱下らず。医者へ連れて行かす、果してリン

パ腺結核との事、一ヶ月ぐらゐ安静にしてゐなければならぬ由。これに

て却つて勇気を揮ひ起す。今日は又暑くなった為か、三十七度を少し越

す。湖水まで散歩したが、体がダルイのですぐ帰る。慎重に！ 勇気を  
出して！

〔8月13日 火曜〕

6. 8. 7. 0. ブローム剤 牛乳2 鶏卵2 曇 涼シ  
八時起床。昨夜寝つきよろしきも一時頃眼をさます。ノルモザン錠\*を  
探してみて、江戸川乱歩氏の手紙を発見し寢床の中でよむ。それより眠  
れず、四時頃になってやっとうとうとする。神田氏よりハガキ、直ぐ返  
事、体だるく、意欲なく、仕事を放棄し一日寝てゐる。牛乳を一日二合  
にする。亮一は急に熱が下ったものゝ、始終汗ばんでゐて、何となく体  
具合が悪さう、顔色悪く著しく痩せたのが眼につく。晩に方々でお迎火  
を焚いてゐるのをみる。子供にチョコレートを買ってやる。

\*ノルモザン錠 胃腸薬

〔8月14日 水曜〕

6. 4. 6. 8. 6. 5. 6. 3. ブローム剤 牛乳2合 鶏卵2ヶ  
雨 寒シ

七時半起床 昨夜は割によく寝たので今日はいくぶん気分よろし、但し、  
胃の具合は悪く食欲なし。仕事を休んで一日寝てゐる事にする。昼過ぎ  
てより「鬼火」を校正する、興味なし。生きてゐるのに迷ふ心地なり。  
亮一は段々よろしいやうなり。背骨が痛いのでベッドの下へ板を入れる  
事にする。

〔8月15日 木曜〕

6. 3. 6. 7. 7. 0. 6. 4. 喀痰2回 牛乳2合 鶏卵2ヶ  
雨 涼シ

六時半起床、入浴、昨夜は睡眠普通、午前中「鬼火」を校正する。ラヂ  
オにて甲子園の野球をきく。後、「獣人」と「ロンドン綺譚」\*に手を入

れ、「蔵の中」と共に、春秋社へ送る用意をする。亮一、追々元気よろし、  
宜子又少し熱ある由なれど、大した事ではなささうなり。

\*「ロンドン綺譚」 トム・ガロン作を横溝が蓼科三の名義で翻訳した「視機械倫敦

綺譚」(「新青年」昭和10年2月号に掲載)

〔8月16日 金曜〕

6. 5. 6. 7. 6. 9. 6. 2. 喀痰ナシ 牛乳2合 鶏卵3ヶ  
雨 涼シ

六時半起床 昨夜は雨のためうまく眠れず。体だるいゆえ、今日は仕事  
せぬ事とする。一日中、ベッドに仰臥して、ラヂオで甲子園の野球を聴く。  
午後、「面影双紙」にあっさり手を入れ、「鬼火」と共に春秋社へ送る事  
とする。もとより不満なれど致し方なし、亮一、宜子共に変わった事なし。  
夜湖畔へ流燈会を見に行く 食欲なし。

〔8月17日 土曜〕

津田君来る。風邪気味、咽喉痛し、  
〔8月18日 日曜〕

七度四分

〔8月19日 月曜〕

不快

〔8月20日 火曜〕

不快

〔8月21日 水曜〕

不快

〔8月22日 木曜〕

不快

〔8月23日 金曜〕

不快

〔8月24日 土曜〕

不快

〔8月25日 日曜〕

七時半起床 不快

〔8月26日 月曜〕

不快

〔8月27日 火曜〕

不快

〔8月28日 水曜〕

不快

〔8月29日 木曜〕

雨

不快

〔8月30日 金曜〕

雨

不快

〔8月31日 土曜〕

雨

不快

〔9月1日 日曜〕

6. 3. 6. 6. 7. 0. 6. 4. 雨 涼シ

七時起床、豪雨、終日何もせず。出水の注意あり、気分よし。

〔9月2日 月曜〕

時事通信\*より稿料、杉山\*より電報、

八・四一五円(一四八五) 黒蘭姫、第三回

昨夜雨降りたれど今朝は上天気、但し、風やゝあり。午後、藤田君\*と共に浅野先生のところへいく筈なりしも、大晦日、年越うどん腹につかへて気分悪し。止めにする。午後、曇りて季節風強くなる。午睡。夜、酒をのみて、早く眠る

\*日本社 「にっぽん」などを発行。のちの日本出版社

\*時事通信 時事通信社。「読物時事」などを発行

\*杉山 杉山書店の杉山市三郎

\*藤田君 藤田嘉文。疎開先の岡山で出会った医学生。藤田との交流から「本陣殺人事件」のアイデアを得る

一月二日、金曜日、晴、後曇風強し。

着。作家クラブ\*、海野、妹尾\*、鬼怒川\*、中野\*、武田\*、渡辺\*

発。海ノ、西田、作家クラブへ原稿

◎一九四八年の課題 一二枚(会報)

女房倉敷へ「三本指」\*を見に行く。午前中は暖かなりしも、午過ぎより又風出て寒し。作家クラブへ原稿を書く。

\*作家クラブ 日本探偵作家クラブ。昭和22年発足

\*妹尾 妹尾留夫(アキ夫)。翻訳家、探偵作家

\*鬼怒川 鬼怒川浩。探偵作家

\*中野 P54の中野(大阪新聞)と同一か。昭和22年10月の横溝日記にも「大阪新聞の中野時春君、原稿とりに来る」とある

\*武田 武田武彦。作家、翻訳家

\*渡辺 渡辺啓助。探偵作家。渡辺温(編集者、作家)の兄

\*「三本指」 映画「三本指の男」(大映、昭和22年公開)。「本陣殺人事件」を原作

登美生、もう一晚泊る。

発、なし。

一月五日、月曜日 晴、夜中風強く小雨

着、なし。

発、なし。

としている

一月三日 土曜日 晴

着。海野、九鬼、岩谷\*、中澤\*、午過ぎ原田貞四郎氏\*来る。年始。後眠る。夜藤田君来る。年始。今日は一日中風なく、午後曇りたれど、わりに暖かなり。

\*岩谷 岩谷満。探偵小説雑誌「寶石」の出版社・岩谷書店の社長

\*中澤 不明

\*原田貞四郎氏 不明

一月四日、日曜日、晴

着。西田、高岩\*、原田、荒木以上全部年賀状。江戸川より空罐。

発。九鬼、荒木、武田、高岩、美枝\*。

登美生\*来る。亮一、「蝶々」\*を見に行く。

夕方着。鬼怒川、

発。鬼怒川、妹尾、阿知波\*、海野

登美生泊る。

\*高岩 高岩肇。脚本家。「蝶々失踪事件」など横溝作品を手がけた

\*美枝 不明

\*登美生 不明

\*「蝶々」 映画「蝶々失踪事件」(昭和22年公開)。「蝶々殺人事件」を原作としている。

横溝は1月15日に鑑賞(P50)

\*阿知波 阿知波五郎。探偵作家。アチバの表記も多い

一月六日、火曜日 晴、風強し。

着、自由\*、水谷、木々\*、達子\*、大賀\*(年賀)

発、なし。

登美生かへる。一日ブラ〜、

\*自由 自由出版社

\*木々 木々高太郎。医学博士、小説家、詩人

\*達子 横溝正史の末弟・博の妻

\*大賀 不明

一月七日、水曜日、晴、風強し。

着、山陽朝報\*。

徹夜にて「びっくり箱殺人事件」を書上ぐ

◎びっくり箱殺人事件 六十三枚。

\*山陽朝報 のちの山陽新聞。岡山県中心の地方紙

一月八日、

着、西田、「郷土」\*

夕方着。海ノ、自由、戸田、城\*

発、「びっくり箱」を時事読物\*を通じて送る。終日無為。

\*「郷土」 不明

\*城 城昌幸。小説家、探偵作家、編集者。「寶石」創刊時(昭和21年)の編集長

\*時事読物 時事通信社発行の「読物時事」か

一月九日、金曜日、曇、雨模様、

着、「ぶろふいる」「真珠」\*「TIME」\*「にっぽん」\*

夕方着。山崎\*、城、戸田(謙介)、自由、

「夜歩く」を書きはじむ。

\*「真珠」 探偵公論社発行の探偵小説雑誌

\*「TIME」 アメリカのニュース雑誌

\*「にっぽん」 日本社発行の大衆雑誌

\*山崎 山崎徹也。「ロック」編集長

一月十日、土曜日、晴、

朝五時より起きて、「夜歩く」を書きはじめ午前中に書上ぐ。午後「男女」\*より原稿取りに来たので渡す。

「夜歩く」 六十三枚。

六〇〇〇円……夜歩く第一回。

着。長谷川\*、海野、「歪んだ顔」\*

発。西田、

夕方着。水谷(荒木氏の事)本位田、海ノ、

\*「男女」 中矢書房発行の大衆読物雑誌。のちに「大衆小説界」に改題

\*長谷川 長谷川修二。翻訳家、映画字幕翻訳家、服飾評論家、文筆家

\*「歪んだ顔」 角田喜久雄著。京都日日新聞社から昭和22年7月に、自由出版から

同年12月に刊行されており、当館ではどちらの版も横溝旧蔵書として所蔵している

一月十一日、日曜日、晴、

着。渡辺、(作家クラブ会報)阿知波二通、読売(経歴調べ)岩谷よ

りカラスミ。

昨日、「男女」の記者「小説」\*(黒猫掲載誌)を持てるに驚く。わが方

へ送り来らず、稿料も寄来さず。不とゞき千万なり。今在君\*来る。

発。海ノ、水谷、九鬼、熊谷\*、以下ハガキ 本位、城、山崎、戸田、

速達渡辺、岩谷、

夕方着。海野四通、日本(原稿依頼)

\*「小説」 かもめ書房発行の長篇小説雑誌

\*今在君 1月26日の日記(P52)に「今在君来る。「夕刊岡山」を持参」とあるので、

「夕刊岡山」の編集者か

\*熊谷 熊谷市郎。「ぶろふいる」発行人

十月十二日、月曜日 晴、

着。森下、中野、神吉\*（原稿依頼）自由出版社、

二、五〇〇円―自由利息

発。森下へ本。森下、海野、江戸川 西田、長谷川修二

\*神吉 光文社出版部長（少年漫画雑誌「少年」編集長）の神吉晴天か

十月十三日、火曜日、晴

着。なし。

発。村瀬\*、葛山\*、上塚、伊藤\*、

夕方着。月刊読売\*。新世界\*（原稿依頼）

\*村瀬 村瀬進。自由出版社社長

\*葛山 葛山二郎。小説家、推理作家

\*伊藤 不明

\*月刊読売 読売新聞社発行の月刊誌

\*新世界 新世界社発行の雑誌か

今日は春の如く暖かく、天気よし。「読売」を見ると、関西地震近からんと。あな恐ろし。

一月十四日 水曜日、雨。

着、「小説」 海野、

一日かゝって「双生児は囁く」を書く

◎「双生児は囁く」六十六枚

一月十五日、木曜日、晴、寒し、夜雪

着。杉山より春色眉かくし十冊。

発。「双生児は囁く」

石川\*、藤田君と共に倉敷大映へ行く。講演二十分、後映画「蝶々」失踪事件を見る。先づ先づなり。後、清風荘にて茶菓の饗応をうけ、帰宅。

夜 石川、藤田、加藤\*三氏を招待。新年会深夜の二時に至る。石川君泊る。外大雪なり。

\*石川 石川淳一。疎開先の岡山で出会った神戸出身の音楽学校生。石川との交流から「蝶々殺人事件」のアイデアを得る

\*加藤 加藤一（ひとし）。疎開先の岡山で出会う。加藤から聞いた土地の話が、「本陣殺人事件」や「獄門島」「八つ墓村」の構想をふくらませた

一月十六日 金曜日、晴、寒し

着、海野、二通、平吉\*、牧歌社\*、新世界社、

発なし。

\*平吉 平吉廣州。大阪薬学専門学校の同窓生

\*牧歌社 「小説特集」などを発行

一月十七日、土曜日、晴。

着、水谷、西田、海野。

発。西田、海野、平吉、高岩、

夕方着。九鬼、江戸川、大虚堂\*より稿料、

六、六三〇円 殺人鬼終篇

\*大虚堂 大虚堂書店。昭和21年に「りべらる」を創刊

一月十八日、日曜日、晴、暖、

着。海野（手紙とハガキ）

発。九鬼、水谷、海ノ、江戸川、熊谷、阿知波、今在。

亮一とよし子岡山市へ行く。日展見物、放送合唱団を聴きに行きしなり。

一月十九日、月曜日、晴、暖。

着、登美生より芝居番附とブロマイド 海野さんよりハガキ、井上

英三君\*遺児より手紙。

発、なし。

あまりよい天気ので暖かなので、女房と二人で下肥担いで開墾地へ行き、ソラマメに施肥。落葉を掻く。わが家の菜園にキャベツ十八株植ゑる。

今在君来る。懸賞本極まりの由。

\*井上英三君 仏文学者、翻訳家。昭和22年没

一月二十日、火曜日、晴、

着。森下氏より手紙とハガキ。（P・B本\*の礼なり）

発。江戸川氏へ夕刊岡山\*の懸賞募集本極まりの由報告。

今日も亦べらぼうによい天気なり。昨日よりまだ暖く、雨が近いのであらうと思はせる。夜遅く、石川、藤田、大溝君\*来たり。二時過ぎまで

話していく。

\*P・B本 ペーパーバックのこと

\*夕刊岡山 昭和21年創刊。のちの岡山日日新聞。昭和22年に横溝疎開宅で座談会を開催

\*大溝君 不明

一月二十一日、水曜日、晴、暖し

着なし。

発なし。

女房、福田へスキちゃん\*のくやみにいく。福田の篤さん\*と一緒に帰る。篤さんと二時ごろまで飲み、三時ごろ眠る。

夕方着。杉山より印税。乾。海野、月刊読売より金二回分、

三〇〇〇〇円、

三・三六六（五九四） びっくり箱第二回、

三二六四（五七六） 〃 三回、

\*スキちゃん 不明

\*福田の篤さん 不明

一月二十二日、木曜日、晴、

着。「TIME」「新青年」

福田の篤さん午後二時の汽車でかへる。原田の光枝さん\*、石嶮持って

来る。夕方帰る。

夕方着。海野二通、山崎。

\*原田の光枝さん 原田光枝。義姉。岡山疎開を勧め、住居を紹介した

一月二十三日、金曜日、曇、暖し。

着。なし。

発。海野、登美生

藤田君、サントニン錠\*を持って来てくれる。

夕方着 海野、作家クラブ、

暖く、曇り、いまにも雨になりさう。

\*サントニン錠 回虫駆除薬

一月二十四日、土曜日、雨後曇り

着、西田、トップ\*

朝方雨あり。午前中に曇る。

\*トップ 昭和21年に創刊された前田出版社発行の大衆文化雑誌

一月二十五日、日曜日、曇、

着。森下、海ノ、西田、乾、村瀬、中澤 延原\*、山崎

夕方着、海野、九鬼、村瀬、

一日中曇り。但し、寒くはなし。

\*延原 延原謙。編集者、翻訳家。「新青年」3代目編集長

一月二十六日、月曜日、晴、

着、九鬼、「キング」\*② 「月刊読売」② 「冒険少年」\*② 講談雜

誌① 登美生よりプロマイド

発。世界社\*(福田泰子) 前田\*(以上二通印税催促。読売、毎日、(以上二通履歴書)

合同\*より、月刊岡山\*の岡崎、児島\*両氏来る。月刊岡山のスリラー号につき、人選、原稿依頼を依頼される。

発、森下(25枚100円) 角田\*(50枚150円) 海野(30枚150円) 西田(20枚80円) 九鬼(25枚80円) 江戸川(10枚150円) をそれぐ出す。

今在君来る。「夕刊岡山」を持参。

夕方着。高岩君。

\*「キング」 講談社発行の大衆娯楽雑誌

\*「冒険少年」 日本正学館発行の少年雑誌

\*世界社 「探偵実話」を発行

\*前田 前田出版社。「トップ」を発行

\*合同 合同新聞社のこと。この年5月に山陽新聞社に改名する

\*月刊岡山 合同新聞社が発行していた月刊紙「月刊をかやま」のこと

\*岡崎、児島 合同新聞社刊「月刊をかやま」の編集者

\*角田 角田喜久雄。小説家

一月二十七日 火曜日、晴、稍寒くなる。

着。なし。

発 緒方氏\*へ非戦災者税送る。

女房倉敷の税務署へ行く、洋服出来る。

夕方着。原田光枝さん、レーンコート地のこと。

\*緒方氏 吉祥寺の家の借主

一月二十八日、水曜日 晴曇寒し。

着。「蝶々殺人事件」15冊来る。

一日寒くて、コタツに寝てゐる。「男・女」より豊田幸夫君、原稿を取りに来る。前日打電したのが間にあはなかつたのらしい。恐縮、夜、今在君来り、東京帝銀事件\*について感想きいていく。

六、〇〇〇円 「男・女」夜歩く第二回、

\*東京帝銀事件 昭和23年1月26日に起きた強盗殺人事件。行員ら12名が毒殺された

一月二十九日、木曜日、晴、

合同より、帝銀事件の感想きいて来る。女房税金払ひにいく。

発。杉山、登美生(五・〇円) 海野さん、

中澤へ税金そちらで支払ふやう手紙。

一月三十日 金 晴、

着、海野よりハガキ。

孝\*来り一晩泊っていく。溝口\*へ手紙ことづける。

\*孝 横溝正史の甥

\*溝口 横溝正史の姉・富重の婚家

一月三十一日 土曜日、晴、

着。西田、海野、登美生よりハガキ。「宝石」\*

夕方着。上塚、橋本\*、村瀬、岩谷、阿知波

四、四二〇円 獄門島、新年号、

孝午前中にかへる。海野さんより登美生の就職口につき来信、女房直ちに福田へ赴きしが篤さん留守なりし由。石川君来訪。六高\*の笹井君\*、

阿知波さんところより本持つて来てくれる。今在君新聞持参

\*「宝石」 岩谷書店が昭和21年に創刊した探偵小説雑誌

\*橋本 橋本善次郎。雑誌「真珠」などを発行した探偵公論社の編集者兼経営者

\*六高 旧制第六高等学校。明治33年に岡山県岡山市に設立された。岡山大学の前

身校の一つ

\*笹井君 不明

二月一日、日曜日 雨

着、阿知波、

発、阿知波、海野、西田、福田、

「男女」の豊田君来る。「夜歩く」六十枚を二日午後までに書く。夜十二時まで書く。

二月二日 月曜日、晴、

豊田君原稿もって四時の汽車でかへる。

夕方着。海野、森下、江戸川、村瀬、

二月三日、火曜日、

朝着。福田、東西出版社\*、合同の児島

発、児島、海ノ、森下、江戸川、

夕方着、角田、作家クラブ、

\*東西出版社 築井健人が設立した出版社

二月四日、水曜日 晴、

着、海野二通、鬼怒川、

発。諸方へ小包送る。

江戸川、海野、森下、西田、水谷、乾へ以上つぎの五冊、

「本陣」「蝶々」「鬻」「双生児」「暗闇」

大下、木々(本陣、蝶々、暗闇、鬻)

城、角田、延原(暗闇、本陣、蝶々)

税務署員来る。

発。角田、児島、乾、鬼怒川、

二月五日、木曜日、晴、

着。阿知波、海野、山崎、

自由出版社の本田氏来る。

夕方着 海野二通、関川\*、「男女」

\*関川 関川健治。横溝の友人

二月六日、金曜日、晴

発、富美生\*、海野、

着。九鬼ハガキ地方事務所より西氏来る

\*富美生 たびたび記載のある登美生と同一人物か

二月七日、土曜日、晴、

着 「ロック」\*

獄門島書きはじめるがうまく行かず、

発、関川、山崎、

着。富士\*より原稿依頼。東京\*より同、自由出版社より利息。

\*「ロック」「探偵雑誌」「The Lock」。筑波書林発行の探偵小説雑誌

\*富士 世界社発行の雑誌

\*東京 新生社が昭和20年に創刊した「新生」から改題した雑誌

二月八日、日曜日、晴、

着。「リーダーズ、ダイゼスト」\* 武田君より「日本小説」\*

杉山君、寝込みを襲ひ来る。昼過ぎかへる。亮一のことよく頼む。

\*「リーダーズ、ダイゼスト」「リーダーズ ダイゼスト」。アメリカの総合雑誌。日本版は昭和21年創刊

\*「日本小説」大地書房、のちに日本小説社発行の文芸誌

二月九日、月曜日、晴、寒し。

着。水谷、作家クラブより二通、海野、孝(溝口)

発。熊谷、海野、水谷、福田、作家クラブへ(履歴、ハガキ、「探偵小説」)

二月十日 火曜日、晴、寒し。

着。西田、

昨夜「獄門島」書上げ、時事に頼む。

◎獄門島 五十三枚 第十五章 山狩りの夜

女房倉敷へ行く。夜浅野氏の招待、旧正月なり

\*浅野氏 岡田村字桜の住人

二月十一日、水曜日、晴、やゝ暖。

着。関川君より「ヒット」\*

\*「ヒット」 東京スポーツ新聞社発行の野球雑誌

二月十二日、

着。中野（大阪新聞）、原田、前田、杉山、海野二通、乾、登美生、

女房倉敷へ行く。

二月十三日、

着。海野、村瀬、

発。武田、乾、中村（新生社\*） 村瀬、杉山、西田、

\*新生社 戦後初の総合雑誌「新生」を創刊した出版社

二月十四日、土曜日、雨後曇、

着、朝なし。

夕方着。西田、江戸川、（本の受取）城、武田、大阪新聞。

夜一時までかゝって「びっくり箱」第四回 半分書上げる。

二月十五日、日曜日、晴、夜雨、

着。阿知波、「男女」より夜歩くの、ゲラ。

発、江戸川、海ノ、大下（以下モチ送り状） 関川、登美生、西田、城、

武田、近藤（読者） モチを江戸川、海ノ、大下

夕方着。山崎、城

三月十六日 月曜日、雨、後、曇、

着。角田、登美生より文五郎芸談\*、プロマイド。

「ビッキリ箱」六十六枚、読物時事を通じて送る。一日中寝てくらす。

\*文五郎芸談 吉田文五郎「文五郎芸談」（昭和18年、桜井書店）

二月十七日、火曜日、晴、

着。なし。

夕方着、水谷、江戸川、

二月十八日 水曜日 晴

着。雑誌類のみ、

発。阿知波、海ノ、西\*（講演謝絶）

夕方着、漫画と読物\*、西田、風人社\*（安中） 池内、海ノ三通、

女房倉敷へ行き、スプリング\*を持ってかへる。

\*西 不明

\*漫画と読物 「読物と漫画」。「大阪バック」のち「漫画日本」から改題した大阪新聞社発行の雑誌。横溝の「薔薇より薔へ」「双生児は踊る」「双生児は囁く」を掲載

\*風人社 「人情」などを刊行

\*スプリング 不明

二月十九日、木曜日、晴、とても暖し。

着。雑誌（月刊中国\*）

発。江戸川、水谷、海ノ、池内\*

着。上塚、時事（税通知） 武田、

\*月刊中国 昭和21年に中国新聞社が創刊した雑誌。昭和24年3月に「読物中国」に改題

\*池内 二十一日会同人（大衆文芸）を編集）の池内祥三か

二月二十日

着。Gメン\*、谷川（朝日） 登美生、杉山細君、  
発、上塚（病気見舞ひ）

\*Gメン Gメン社が昭和22年に創刊した探偵小説雑誌。昭和24年に「X」に改題

三月二十一日、土曜日、雨、

着。西田、鬼怒川、森下、

二月二十二日より三月二十六日まで日記怠る。

その間、双生児は囁く 六十六枚書く。河井来り、原稿持つていく。関川君来り二晩とまっけていく。

着、オール小説\*、ハンド・ブック社\*、海野（五通）、山崎、城、乾、

岩谷から稿料、読売から稿料、武田、

\*オール小説 江戸書院発行の大衆文芸誌

\*ハンド・ブック社 ハンドブック社。「ホーム」など手芸雑誌を刊行

二月二十七日、金曜日、曇、

着。鬼怒川、（原稿月刊岡山出来た由。）キング、海ノ、熊谷、（黒猫

の稿料15円振替にて送りし由）

◎夜歩く 六十三枚。

二月二十八日 土曜日 雨

高松へ講演に行く。朝九時に家を出て夜六時半帰宅。留守中「男女」よ

り原稿取りに来て稿料おいていく。

二月二十九日 日曜日 晴、暖かきこと春の如し。

着 海野、平吉、河井、大下、

ボンヤリと捕物の題を考へる。

スミ『鳥田の大書』『月丸太夫』（猿芝居の太夫）『長崎土産』『蝶合戦』『石

見銀山』スミ東京『人魚のお波』

着。西田、森下、牧歌社、

発。西田、海野。

三月一日 月曜日 曇、稍寒し

着なし。

女房岡山へ出向く。

夕方着、海野、手紙とハガキ、

石見銀山を半分書く。

三月二日、火曜日、晴寒し、

着、海ノ、

◎石見銀山（東京・捕物）六十五枚書上ぐ。

夕方着、杉山より亮一の受験番号

三月三日、水曜日 快晴、

着。なし。

朝は寒く氷が張ってゐたが、日中は快晴にてよい天気なり。

発。「東京」へ原稿と手紙。「自由」へ黒猫のあとがき。大下、山崎

着。水谷、（クラブ賞授与式の報告）大下よりノリ。

題を考へる。

紅を買ひに来る女、（捕物）

地獄の花嫁

死仮面された女（或ひは女の死仮面）

着。武田君より原稿と日本小説。矢作君\*より神戸の会報、「ぶろふい

る」\*より仮面の挨拶状\*。「文芸」（二冊）

\*矢作君 矢作京一。探偵作家。関西探偵小説新人会創立メンバー

\*仮面の挨拶状 この2月に探偵雑誌「ぶろふい」が「仮面」に改題しているので、

その挨拶状のこと

三月四日、木曜日、晴、やゝ暖し。

着、登美生、城（原稿サイソク）

夕方着、江戸川よりクラブ副賞、

発、武田の原稿を、月刊岡山へとどける。

◎「地獄の花嫁」「月刊岡山」九十二枚書上げる。

三月五日、金曜日、晴、

着。海ノ、森下二通、「読売新聞社内探偵小説を愉しむ会」。横溝善章

（倉敷市美和町）なる未知の人物より二万円貸せの手紙。

発。「地獄の花嫁」を月刊岡山へとどける。水谷（作家クラブへ金払

ふこと）江戸川、（クラブ賞の礼）海ノ、登美生、武田（原稿の

受取り）児島（原稿の訂正）

◎獄門島（第十三回）五十八枚、第十六章お小夜聖天 第十七章海賊の

砦

三月六日、土曜日、曇後雨

着。海ノ、延原（本の礼）自由（利子）熊谷（未知の人から染筆）

三月七日 日曜日、曇、霰模様

着、関川（礼状とプロ野球メモ）

伝記、蘆田（未知の人から無心状）「仮面」文苑社\*から原稿依頼、

◎八つ目鰻、五十八枚（天狗）

夕方着 女性（原稿依頼）池内 福田トミ生 海ノ二通（ハガキ）渡辺、

大阪新聞より稿料

\*文苑社 出版社

三月八日、月曜日、晴

着、中澤に送った金戻る

発、渡辺、海ノ、村瀬、城へ原稿。城へ（写真）ハガキ。

夕方着、「リー・ダイ」熊谷より稿料

三月九日、火曜日、晴、

着、ナシ

発、熊谷（ウケトリ）海ノ、杉山、森下、西田、江戸川（葛山の件）

帝銀事件の容ギ者として葛山君の名が出たので、驚き、一応交番へ葛山

君のところしらせておく。亮一岡山へ行く。

着。西田、

三月十日 水曜日、雨、

着。山崎、「月刊岡山」

亮一、今日より六高入試。ルミ\*学芸会なれど、彼女は出してもらはず、

ナゲキなり。

着。海ノ、ハガキ二通、

夜、葛山君のことにつき、お巡りさん来る。

\*ルミ 横溝正史の次女・瑠美

三月十一日 木曜日、春雨、

着。海ノ、（ハガキと手紙）武田武彦、乾信一郎、

夕方着。江戸川氏よりコップ。海野氏より本。

三月十二日、金曜日、曇、時々小雨

女房、よし子、亮一の汽車のため、駅へ立ちにいく。阿知波さん、葉沢

山下さる。

夕方着。海野、森下、中矢書房

三月十三日 土曜日、曇、雨、

発、武夫、大林\*、海野、阿知波 江戸川、矢吹\*、森下、海ノ、西

田、乾、鬼怒川、

着なし。

夕方着。三島（大地書房\*） 榎井\*

電報、「月刊読売」「朝日」「亮一」

女房昼頃、福田より帰る。

\*大林 不明

\*矢吹「男女」編集者

\*大地書房「朝日」「日本小説」などを発行

\*榎井 不明

三月十四日、日<sup>ママ</sup> 曇 雨、

着。小野\*（縁談）海野二通、Gメン、日本正学館\*、橋本善次郎よ

り金、城昌幸

夕方着、西田手紙とハガキ、海野手紙とハガキ 河井君、（捕物の

注文）文芸クラブ、自由出版社より本二冊。

\*小野 不明

\*日本正学館「冒険少年」などを発行

三月十五日 月曜日、曇、小雨、

着。海野、

発。海野、西田、三島、河井君、

三月十六日、火曜日、曇、今にも降りさう。

着。海野二通と亮一

発。海野と亮一

夜より雨となる。

三月十七日、水曜日 雨、夕方曇、

着。原田、海野、

三月十八日 木曜日、晴、

着、「漫画と読物」「宝石」稿料

夕方着、海野手紙とハガキ、西田（獄門島の切抜）上塚、亮一、トッ

ブ社の移転通知。

三月十九日、金曜日 晴、

◎びっくり箱（六十五枚）

岩崎さん（社会部長）田村君と浜本君 八八新聞。カッキリ四時（シバ

ラクの楽屋入り）

第七章、わが道をいく

第八章 赤き赤き心。

着。西田、阿知波、

発、「月刊読売」原稿時事へたのむ。

着。江戸川（葛山君のこと）ヤラカス館\*。博、

藤田来る。石川君来り夜かへる。

\*ヤラカス館 大阪の企業。中矢書房の親会社

三月二十日、土曜日、曇、時々雨、

着。週刊探偵、雄鶏通信\*、

孝来る。浅野間さん\*の畑へジャガ芋植える

\*雄鶏通信 雄鶏社が発行の外国文化紹介誌。昭和22年より延原謙が編集長を務める

\*浅野間さん 浅野間筆子。岡田村字校の住人

三月二十一日、日曜日、雨、

着、海野（ハガキ、手紙）「Gメン」「少年クラブ」、上塚 大林君、

キング、青木（出版申込み）西田（切抜き）

夕方着、海野、登美生、森下

孝、午前中帰る。

発。博、徳田（無心の断り）

三月二十二日、月曜日、曇。

着。亮一、針原\*（原稿依頼）海野、

発。海野、亮一、大林、原田、

\*針原 不明

三月二十三日より四月一日までなまける。その間書いたもの。

◎双生児は踊る 七十四枚、

◎夜歩く 六十八枚

五九五〇・〇〇 江戸川(第一書房)

三、〇〇〇円 武夫(クラブ)

三月二十五日、六高発表、亮一落つ。

三月二十九日、女房岡山へ行く、岡山より三十日に上京する。

三月二十九日、中矢氏、記者氏来る。「小説界」に捕物引受ける。

(二十七日、イモ床作る。二十八日、苗床作る)

四月一日、木曜日、晴、

着なし。全干ストにて何も来らず。

中矢書房より人来り原稿持っていく。

九〇〇〇・〇〇円 夜歩く(第四回)

四月二日、金曜日、雨、

着、海野(手紙とハガキ)、「宝石」「月刊読売」「スポーツ新聞」城君

より電報

◎獄門島、(第十四回)五十二枚、

第十八章、最後の十木 駒が勇めば花が散る

四月三日、土曜日、曇、

着。海野、(手紙1、ハガキ3) 西田、河井(原稿受取)

発。獄門島を時事を通じて起る。海野、城。

夕方着。海野(四千円返却) 亮一、月刊読売(稿料)

四月四日、日曜日 曇、

着。雑誌類、

よし子矢中\*へ行き亮一の卒業証明書を貰ひ、東京へ送る。

\*矢中 岡山県・矢掛町にある矢掛中学校

四月五日、月曜日、快晴

着。海野二通、亮一二通、雑誌類沢山、水谷、

題を考へる

「目」(現代物)

「振袖狂女」(捕物)「尼屋敷」

発。海野、水谷、

女房帰る。

着、西田、小玉(ファン) 孝 海野、

発、西田(香料三〇〇〇円)

四月六日、火曜日、晴、

着。西田、その他出版物、

四月七日、

着。上塚、講談社(パンフレット)

四月八日、木曜日、晴、

着、海野(ハガキ) 今在君来り、放送の依頼 懸賞小説持参、

杉山君来る。三万円渡す

発、海野、上塚

四月九日 金曜日、晴、

着。城(原稿受取り)

発、森下、海ノ、西田、鬼怒川、

杉山君帰る。

四月十日、土曜日、雨、

亮一帰る。女房岡山へ行く

着、海野二通、ハガキ、

発、杉山(三万円四〇〇〇円) 海、

四月十一日、日曜日、晴、

着、海野、矢島、武田、文芸クラブ

発、海野二通、武田、

◎自分の道楽 六枚、

\*矢島 不明

四月十二日 月曜日、曇後雨、

着なし、

発。九鬼、江戸川 博、武夫

四月十三日、火曜日 雨後曇、

着、海野。オールロマンス\*。孝、

\*オールロマンス オール・ロマンス社発行の大衆娯楽誌

四月十四日、水曜日、曇、

着。森下

発。江戸川、森下、海野。

四月十五日、木曜日、曇、

着、海野、

放送に行く。くたびれる。

四月十六日、金曜日、雨、

着。海野二通、自由出版社より、西田、

二、五〇〇円、自由の利息、

四月十七日、土曜日、晴

着、西田、九鬼、原田、

四月十八日、日曜日、晴、

着。東横\*より映画化申込み。海野、(手紙とハガキ)

発、海野、江戸川、西田、牧野(東横) 原田

\*東横 東横映画株式会社。昭和24年公開の映画「獄門島」を製作

四月十九日、月曜日、晴、

着。森下、「朝日」より原稿紙。

「四月二十日(三十日未記入)」

五月一日、土曜日、晴

着。雑誌三種、上田君(六桜社\*)

発、なし。

一日中かゝって、手紙、雑誌の整理をする。「りべらる」\*「読物と漫画」

ともに二月号なし。藤田君が持ちかへったのか。「男女」より人来る。

一〇、〇〇〇円、捕物。

\*六桜社 日本初の写真感光材料メーカーでコニカミノルタの前身の六桜社か

\*「りべらる」 太虚堂書店発行のカストリ雑誌

五月二日、日曜日、晴 曇、

着。雨読書院\*より原稿依頼、海野

発。海野、森下、西田、水谷。

着、海野よりハガキ二通、

\*雨読書院 「読切雑誌」などを発行していた出版社

五月三日、月曜日、雨、

着。関川より日刊スポーツ。

◎緋鹿の子狂女―小説界 六十六枚

右を夜十二時頃まで書く。

五月四日、火曜日 晴、

着、海野、九鬼、探偵クラブ報、

「緋鹿の子」書上ぐ、昨夜は一睡もせず。

五月五日 水曜日、曇

着、新聞だけ。(后)海野三通

時事通信より林君、記事とりに来る。海ノ、九鬼に通信書く。

発、九鬼、海野(3)上田、五十嵐(原稿ことわり)

五月六日、木曜日 晴

着、森下夫人、湊\*より写真、

発、海野(写真)湊へ礼状。

着、亮一、孝子\*、杉山、世界社富士より原稿依頼

「夜歩く」半分書く。

\*湊 横溝正史の甥

\*孝子 横溝正史の妻

五月七日、金曜日、晴、雨、曇

着、新聞と、レポート

◎「夜歩く」―六十九枚書きあげる

発、杉山(出産祝ひ)、亮一、「漫画と読物」へ稿料サインソク。

着、海野、三島、戸島\*

\*戸島 不明

五月八日、土曜日、晴

着、森下、美枝より亮一の入学祝ひ。

発、海野、世界社へハガキ、

「怪獣男爵」三十一枚書く。

五月九日、

着、女房、海野三通、江戸川

六一二円、江戸川より分配金、

◎今日は日蝕なり。

着、九鬼、海野、

五月十日、月曜日、曇後晴、

着、オール、(原稿依頼)

発、森下、西田、海野(二通)江戸川(金の受取り)九鬼、三島、オ―

ル(断り)孝子。

着、矢貴書房\*(藤間哲夫)原稿イライ

\*矢貴書房 矢貴書店。矢貴東司が創業、のちの桃源社につながる

五月十一日、火曜日、曇

着、「男女」

◎びっくり箱、半ペラ三十二枚書く、下書 清書、

五月十二日 水曜日、曇

着、海ノ二通、楠\*

発、海ノ、矢貴、楠、亮一、

着、上田君よりハガキ

◎びっくり箱 六十五枚 書上げる。

\*楠 「講談雑誌」編集者

五月十三日 木曜日、晴、

着、「黒猫」

発。「びっくり箱」

着。九鬼、海野、明星社\*、読売より金催促、ルミの保険

\*明星社 「オール物語」(のちに「千一夜」に改題)を発行

五月十四日、金曜日。曇

着、女房、

五月十五日、

着、鬼怒川、

獄門島 六十四枚(第十五回)

十九章 夜はすべての猫が…

二十章 吊鐘歩く

着、江戸川、海野、

五月十六日、

着、豊田(中矢)ハガキ、

発、海野、江戸川、今在(ハガキ)明星社(断りのハガキ)

着、海ノ三通、森下、西田(二通)九鬼、読売より稿料(六月号)

五二七〇、(九三〇)……びっくり箱

五月十七日、月曜日、曇

着、矢貴書店(藤間)偕成社(岡田安郎)

発、海野、森下、西田、

着、九鬼

五月十八日、火曜日、晴

着

五月十九日、水曜日、晴

着

発、海野、九鬼(速)岡田(速)

着。西田、海野(ハガキと手紙)雨読

五月二十日 木曜日、晴

着。「ホーム」、「面白世界」\*、「小説の泉」\*「関川君より新聞」妹尾

さんより手紙。

\*「面白世界」面白世界社発行のカストリ雑誌

\*「小説の泉」矢貴書店発行の雑誌

五月二十一日、金曜日、晴

着、「宝石」より稿料、水谷(捕物 探偵 集申込ミ 海野、原田、

「Gメン」「クラブ」

六六三〇円(宝石)(二・一七〇)

女房とよし子、岡山まわり。

五月二十二日、土曜日、雨後晴

着、海野

発、海野(二通)水谷(切抜二通)電報三 ミシマ、ナカヤ クキ

着、海野、西田、上田、矢貴、亮一。

五月二十三日、日曜日、晴

着。ナシ

発。亮一、上田、矢貴、

五月二十四日、月曜日、晴

着、阿知波、海野、ハガキ二通

五月二十五日、火曜日、晴

着、海ノ、

着、六桜社(上田)名古屋(朝日)

五月二十五日、火曜日

着、佐伯(楠君の世話の人)

五月二十六日、水曜日、晴

着、読売より稿料、

八・四二五(一・四八五)

五月二十七日 木曜日、晴、

着、話社\*、海ノ、作家クラブ

発、セノオ、アチバ  
運送屋来る。

\*話社「話」を発行

五月二十八日 金曜日

着、海ノ、水谷、

五月二十九日、

着、世間書房\*、(四国春秋\*)猪子、昭和\*、原田、  
豊田君来。

二〇〇〇円(捕物 夜歩く)

\*世間書房「世間」を発行

\*四国春秋 四国新聞社発行の地方誌

\*昭和 昭和書房。「文藝読物」を発行

五月三十日、

着、海ノ、城(五〇〇円承知)、九鬼、

発、水谷、亮一、海ノ(2) 四国春秋 世間書房(原) 文藝読物\*、

河井、東京へ以上二通稿料サイソク。

着、上田、楠 海ノ(2)、関川、双立社\*

\*文藝読物 戦前「オール讀物」編集長だった香西昇が昭和22年に昭和書房より発  
行した雑誌

\*双立社「小説と講談」を発行

五月三十一日、

六月一日

着、海野、豊田君来て泊る。

◎怪談比丘尼宿 六十四枚

六月二日

着、渡辺、雑誌類、

豊田君、原稿もってかへる。

一・五〇〇〇円 夜歩く。

六月三日、

六月四日、

着、荒木あき夫人より荒木氏の死を報告、

着、「読物と漫画」より稿料、前田、萱原

九四三五・(一・六六五)

六月五日

着、海ノ(手紙とハガキ) 江戸川、河井

六月六日、

着、高森

六月七日、

着、雑誌類、

発、江戸川、海ノ、荒木、児島

六月八日、

着、「夕刊岡山」より選評

三〇〇〇〇〇

発、渡辺、高森

夕方、女房上京す。

六月九日、水曜日、晴

発、着なし。

六月十日 木曜日 晴、

着、雑誌類、海野(ハガキと手紙) 妹尾、

発、海ノ二通、博、

着、海ノ、大毎、新星社  
六月十一日 金曜日、晴

着、雑誌類

発、海ノ

着、九鬼、偕成社、

六月十八日、金

発、海ノへ

◎「怪獣男爵」二〇〇枚

六月十九日、土

六月二十日、日曜日、晴、

着、海ノ二通、西田、島\*、

\*島 島久平。探偵作家。関西探偵小説新人会創立メンバー

六月二十一日 月 晴

着、江戸川、孝子、

発、海ノ、乾、孝子、孝子、

六月二十二日、火

着、九鬼、博、上田、

六月二十三日、水

着、武田、村木、

◎「びっくり箱」三十一枚、

六月二十四日 木、

着、海ノ、(ハガキ) 宝石、講談雑誌

六月二十五日 金

着、アチバ(ハガキ) 亮一、藤間、

六月二十六日 土 雨、

久しぶりの雨、文字どほり旱天の慈雨なり。但し、この雨も大した降り  
ならざる由。

着、森下、海野への配達証明、

夜相当の雨あり。

着、江戸川、長井、海ノ

六月二十七日、日曜日、曇、時々小雨

着、海ノ、六桜社、孝子、乾

発、高森、江戸川、海野、太田\*、森下、武田、九鬼、鬼怒川、西田、

孝子

\*太田 不明

六月二十八日、月曜日、雨、

着、海ノ、月刊読売、

発、「獄門島」原稿

◎獄門島・第十六回。六十枚、

第二十一章、忠臣蔵十二段返し、

第二十二章、見落してみた断片

昨夜又相当の雨あり。今日は一日降ったり歇んだり。相当の降りなり。

六月二十九日 火曜日、晴

着、雑誌類のみ。孝子より空罐の類

暑し。

六月三十日、水曜日、晴、

着、海ノ、孝子、岡田(偕成社) 文友社\*、

豊田来る。

\*文友社 文友館のことか。昭和23年に博文館は好文館・博友社・文友館に分割した

七月一日、木曜日、雨

着、奥村君より、印税分前

二五〇〇円 捕物集

◎「浄玻璃の鏡」六十七枚、

今日の雨にて、水事情いよいよ好望。田植え大いに進む。

七月二日、金曜日、晴、

着、海ノ、武田、上田 海ノ、作家クラブ、

「小説の泉」へ電報、

七月三日、土曜日、曇、

発、江戸川、横溝、奥村、海ノ。

着、森下、鬼怒川、海ノ、小包、木々ノ本

一五・〇〇〇円 電為。

発、海ノ(2)、森下、孝子、税ム署、江戸川、奥村

着、海ノ、アチバ

七月四日、日曜日、雨、

着、亮一、海野、

着、雑誌類、

発、海野、島久平、

七月五日、月曜日、雨、

着、緒方(家賃)荒木、

七月六日、火曜日、曇、

着、雑誌、新聞、

七月七日、水曜日、曇

着なし。

びつくり箱殺人事件、七十枚、

第十五章 びつくりシャックリ時代

第十六章、吾輩はカモである。

七月八日、木曜日、曇、

着、海野、富夫、若尾(東横)

発 若尾、

七月九日、金曜日 晴、

着、江戸川、武田、大地、亮一、読売

九四八六(一・六七四) びつくり箱

発、海野、亮一、武田、高木\*、佐伯、江戸川、

「猫侍」五十六枚、

\*高木 高木彬光。推理作家

〔七月十日〜九月三十日未記入〕

十月一日、金曜日、曇、

来客。中村喬一君\*、

モリちゃん\*来りて鶏小屋の建設はじむ。午後海野邸へ出かけんとして、

電車に乗りしも気分悪しく、あわてゝ飛降り逃げかへり、終日寝てる。夜、

ビール二本、酒二本。

\*中村喬一君 不明

\*モリちゃん 植木屋か

十月二日、土曜日、曇、

来客、新井君(小学館) 安藤君(中部日本) 博。りべらる。

モリちゃんと老植木師来り、鶏小屋竣成。夜、酒二本半。

十月三日、日曜日、雨

来信、海野2通、自由出版社よりハガキ。小栗一弥君\*より小栗氏著

書数冊、サン・ルーム\*、子供の科学\*(自由)

終日仕事せず、小栗君の小説を読む。夕方沢井氏来り、ラヂオ修繕成る。

台風大したことなし過ぎたらしい。

来信、海野、博、江戸川、

往信、海野、江戸川、熊谷、

ルミ、成城パス。女房入学手続きにいく。

十月八日、金曜日、晴、

来客、中村君、池内君、小学館、渡辺(世間)

二、七五(非人の討仇)

池内君、(怪談園の鴛鴦)を持帰る。渡辺(五)を置いて行く。

小学館へ、雪だるま四三枚渡。

◎雪だるま 四十三枚、

発信、城、納言\*、小林

\*納言 納言恭平。小説家。捕物作家クラブ発起人

十月九日、土曜日、晴、

来客、海野春彦君\*、ルミのお祝頂戴。

一日中かゝってドクロ検校に入朱。

発信、服部元正、

来信、西田、海ノ、

春彦君を引きとめ、ルミのお祝ひをする。

\*海野春彦君 海野十三の長男・晴彦のこと

十月十日、日曜日 雨、

来客、内田書店、「渦巻く濃霧」\*を出すことにする。

来信、熊谷、内田のキンさん\*。

発信、海ノ

\*「渦巻く濃霧」 初書籍化は昭和4年、平凡社刊の「少年冒険小説全集第12巻」として(写真P122)。昭和24年2月、内田書店からの刊行時に『まぼろし曲馬団』に改

十月七日、木曜日、曇、

来信、海野三通、

本位田君、自転車でかへる。台風今夜中に来る由。

来客、小学館。

十月六日、水曜日、雨

\*鷺の宮 鷺ノ宮書房。昭和21年に『人形佐七捕物文庫』を刊行

成城入試、

夜歩く(六三) 書上ぐ。本位田、自転車をとりに来て泊っていく。ルミ、

来客、小学館、中村 本位田君、鷺の宮\*、「ロック」(市川)

十月五日、火曜日、曇、

\*イヴニング イヴニングスター社。「読物春秋」を発行

\*家庭世界 大日本家庭教育会発行の雑誌

は九とする由。

中井、車井戸の稿料、内金、四・持参。あとは十日のうちに。稿料

新居、原稿明日。

中村、原稿明日。捕物は古物(非人の仇討)でカンペンして貰ふ。

倉橋女史、原稿連載一回三十枚、引きうける。二月号から。べ切十一

十月四日、月曜日、雨、

\*子供の科学 誠文堂新光社発行の児童科学雑誌

来客、倉橋女史(家庭世界\*) 新居、中村(男女)、中井(イヴニング\*)

\*小栗一弥君 小栗虫太郎長男

\*サン・ルーム サンルーム。蒼土社発行の雑誌。昭和24年2月に「小説娯楽版」

に改題

47

\*内田のキンさん 内田謹一郎。岡田村字桜の住人

十月十一日、月曜日、晴、

来信、海野、

発信、海ノ、城、納言、小林、

十月十二日、火曜日、晴、

海野氏宅へ、女房ルミとともにいく。御馳走になって帰る。夜、宮田\*、

長谷川、山内光来り、スキヤキを食ふ。宮田（松茸）長谷川（ウイスキー持参）

\*宮田 宮田新八郎。新聞記者、編集者。戦後「週刊朝日」編集長を務める。大正15年に下宿先で横溝と知り合い、慶應大学の同窓だった渡辺温を横溝に紹介した

十月十三日、水曜日、曇、

発信、西田（速達）森下、宮田、海ノ、

来客、前田君来り、土曜会を二十三日、成城で行ふことを知らせて来る。西田氏へ速達を出す。

十月十四日 木曜日、晴、

蟹を書きはじめる。

十月十五日、金曜日、晴・曇、

蟹の一部分渡す。夜、かもめ\*ト部□元氏より金来る。

二・二五〇

一・九〇〇

偕成社\*より「怪獣」の校正来る。二時迄かゝって校正をする。

\*かもめ かもめ書房。横溝はこの10月に同社より『探偵小説』を刊行

\*偕成社 この11月に同社より『怪獣男爵』を刊行

十月十六日 土曜日、晴、

前田（作家クラブ）君来り、土曜会又三十日とやら。西田氏は諦めることにする。

◎蟹 六十九枚渡す。

十月十七日 日曜日、晴

一日ブラブラ寝てる。信木君\*夜来て、原稿サイソク。二十日まで書くことを約束する。散髪。

発信、海ノ、北海道作家クラブ、笹本\*

夕刊岡山の芹田来り、県賞につき諒解を得ていく。

\*信木君 不明。20日締切という記述から、「りべらる」の編集者か

\*笹本 笹本寅。小説家。横溝の捕物帳出版を手がけた八紘社杉山書店を紹介した

十月十八日 晴、月曜日、

風強けれど晴、ルミ初登校。

着。教山\*、森下、角田、

発信、森下、海ノ、鬼怒川、

来客、倉橋、内田、

二・〇（渦巻く濃霧内金）鐘楼の少女 バラの怪盗、

\*教山 不明

十月十九日、晴、火曜日、

来客、延原、新井（小学館）りべらる、青山\*、オール、

一・〇二 小学館（雪だるま）

四・〇〇 りべらる

青山、幽霊鉄仮面\*を持ちかへる。昨日夜中に起きて仕事、六時ごろ眠る。

\*青山 不明。青山俊文二（文筆家、風俗研究者）か

\*幽霊鉄仮面 初出は「新少年」昭和12年4月〜13年3月。昭和24年1月に東光出

版社が初めて単行本を出版しており、そのために初出誌を持ち帰ったということか

十月二十日、

着、海ノ、

来客、りべらる、市川、信木

◎恋の通し矢 八十三枚（りべらる）

市川君に「神の矢」の題と絵組み。

### 昭和三十年 一九五五年

「二月一日 土」 「天気」晴 「発信」賀状 「受信」賀状

快晴、気温、去年の正月より低し。トソ、雑煮、（餅四つ） 旧臘書きそびれた年賀状かく。「墮ちたる天女」に手を入れる。博来り、年始、三人の子どものうち、上ふたりをおいていく。

「二月二日 日」 「天気」晴 「発信」賀状 「受信」賀状

雑煮（餅四つ） 年賀状書く。「墮ちたる天女」に手を入れる。高木君より結婚記念日の祝電来る（アタミより） 四時頃、水谷君、六時頃 津川君\*来り、年始、

\*津川君 津川溶々。「宝石」編集長をつとめた。映画評論家としても知られる

「二月三日 月」 「天気」晴 「発信」賀状 「受信」賀状

雑煮、餅四つ 年賀状書く。カズ子\*来る。「城」「梅田」年始、杉山、角兵衛獅子\*と、狸御殿\*持参。酔うて半時間寝る。夕刻、神尾君\*三味線持参。

\*カズ子 横溝正史の弟・武夫の娘、和子

\*角兵衛獅子、人形佐七捕物文庫『角兵衛獅子』（昭和22年、杉山書店）

「墮ちたる天女」最後を書直し百六十枚となる。久保田君来る。まぼろし曲馬団\*渡す。神尾君来る。三味線のこと依頼す。

\*まぼろし曲馬団 昭和30年3月刊のポプラ社版のための原稿か

〔二月九日 日〕

「蜃気楼島の情熱」書足しをする。女房神尾君とともに三味線をあつらへにいく。

〔二月十日 月〕

「散髪」 「蜃気楼島の情熱」百枚となる。他、旧作等読直してみる。

〔二月十一日 火〕 「天気」晴 「余記」野瀬君・電 「音羽の猫」 「発信」平吉少年たちに賀状 「受信」平吉父子

根津先生\*に歯を見てもらふ。レントゲン写真とる。佐分利先生\*より平吉二世の部屋のこと電話あり。大体O.K. 恰もよし平吉君より来信。返事書く。仕事出来ず。捕物帳の筋を大体まとめる。夜、キングの武田君来る。捕物の小ミダシ入れるのを忘れてたのなり。

\*根津先生 成城の歯科医

\*佐分利先生 不明

〔二月十二日 水〕 「天気」晴 「余記」東宝より原作料 荒木、キング\* 稿料

歯ぐきはれて気分悪し。東宝の金原君、めくら狼\*原作料の一部を持ってくる。黒岩君\*来る。荒木の捕物、呪いの罝針\*を書きはじめるが熱があるのか気分悪く、半ペラ三十二枚だけ渡して、門田先生\*へいきペニシリ売って貰ふ。夜おそくキングより稿料とどく。

\*めくら狼 「人形佐七捕物帖 めくら狼」を原作とした東宝映画。昭和30年3月に公開。2月16日の日記(P71)には試写を見た記述がある

\*黒岩君 大映の社員か

\*門田先生 門田正男。杏雲堂病院の結核専門医

〔二月十三日 木〕 「天気」晴 「余記」呪いの罝針九十四枚

根津先生へいつて歯の治療。荒木の捕物、呪いの罝針\*書きあげる。九十四枚 夜、「砂漠は生きている」\*を見に行くことを女房と約束す。

\*「砂漠は生きている」ウォルト・ディズニー製作のドキュメンタリー映画。昭和30年日本公開

〔二月十四日 金〕 「天気」晴

下痢 映画見物中止 家内だけ見に行く。榎本君より電話 東宝七十万円の由。テレビを売りに来た人にあふが、途中で便をもよおしかへって貰ふ。

〔二月十五日 土〕 「天気」晴

歯医者へいくが下痢を催しかへる。終日何もせず。

〔二月十六日 日〕

滝村プロデューサー\*来訪。吸血蛾 ぜひ欲しいとのこと。

\*滝村プロデューサー 滝村和男。映画「吸血蛾」(東宝、昭和31年)のプロデューサー

〔二月十七日 月〕 「天気」晴

東宝の金原君に電話する。今日きて貰ふはずだったのを十九日に延期申込む。石膏魔\*のストーリー書いてみる。

\*石膏魔 未完・生前未発表。この作品をもとに映画脚本化の話が進む(P69・70)が頓挫した

〔二月十八日 火〕

根津先生で歯の治療。午前中に神尾君来る。終日ブラブラ何も仕事手につかず。夕刻伊藤君より電話、桃園書房\*の稿料二十二日の由。

\*桃園書房 出版社。「小説倶楽部」「小説と読物」を発行

〔二月十九日 水〕

金原君来る。石膏魔の口立てをする。

〔二月二十日 木〕 「天気」晴 「余記」小説と読物 小説クラブの稿料

神尾君来る。浅見君、乱歩全集のセンデン文、二三枚書くやうに頼まれる。原田君来訪。縁談也。マブチ君\*来る。

\*マブチ君 不明

〔二月二十一日 金〕

角谷君来る。「墮ちたる天女」を渡す。「湖泥」の書直しをはじめる。

〔二月二十二日 土〕

今日は講談社の会出席しないつもりで、「湖泥」を書きつけてみたが、原田君\*再三の電話により出席。女房同伴。柳橋、亀清\*が会場、戦後の芸者の美しからぬに驚く。城君の案内にて神楽坂にて二次会。

\*原田君 原田裕。講談社の編集者。のちの出版芸術社社長。1月20日の「原田君は「縁談」とあるので別人か

〔二月二十三日 日〕

頭少し痛けれど、「湖泥」をつづける。終日客なし。千代の山\*優勝。

\*千代の山 第41代横綱・千代の山雅信

〔二月二十四日 月〕

「湖泥」書きつづける。神尾君来る。「悪霊の翼」といふ題にする。黒岩君来る。「吸血蛾」大映に渡す決心するが、その後、榎本君来りまた迷ふ。

〔二月二十五日 火〕 「余記」原田君より電話

午前中早く、「河出」来る。印税、出版後一ヶ月して、四ヶ月分払と聞いておどろく。初めに約束してなかった手落ちなり。杉山、手形の印税。果してどうなることやら。日高君\*(東宝シナリオライター)来り「石膏魔」の台本について打合せ。

\*日高君 日高繁明。映画監督、脚本家。未発表の映画シナリオ「石膏美人」を執筆

〔二月二十六日 水〕 「天気」晴 「余記」湖泥三百拾五枚

杉山に検印三千渡す。「湖泥」書上げる

〔二月二十七日 木〕 「天気」晴

根津先生へいき、歯二本抜く。午後大事をとって安静。左の顔、しだいに腫れはじめる。終日寝床で暮す。

〔二月二十八日 金〕 「天気」晴

左の頬、恐ろしく腫れたり。終日、何もせず寝床暮し。夕方、門田先生の来訪を仰ぎ、ペニシリンの注射。

〔二月二十九日 土〕 「天気」雨

左の頬つべの腫れ、はかばかしく引かず。久しぶりの雨。

〔二月三十日 日〕 「天気」晴

よいぐあひに雨あがり、割合ひに暖くなる。原田君、石原\*母堂来る。頬の腫れ大分ひきたれど、眼の下など気持悪し。

\*石原 不明

〔二月三十一日 月〕 「天気」晴 「受信」平吉君

終日、寝床のなか。床屋さんを断る。金原君来り。「滝村さん、今日来る筈なりしも、風邪のため来られぬ。一両日に来訪の予定。又、「石膏魔」の台本七、八十枚出来、五日ごろ相談に来るとのこと」夜、大火の夢見て、眼ざめても気分悪し。

〔二月一日 火〕 「天気」晴

久しぶりに起きたら、体ふらふら足がぐくとする。体をならすことに専念、仕事せず。午前中に、根津先生へいく。腫れまだ残る。

〔二月二日 水〕 「天気」晴

鋼鉄魔人半分書いて渡す。

〔二月三日 木〕 「天気」夜雨 「余記」神尾君に「かめれおん」渡す。小

説サロより稿料。

加藤君来る。原稿七日と約束。平吉夫人、息子とともに来る。金原君より電話あり。日高君と共に来る。シナリオ半分出来、検討する。「鋼鉄魔人」全部渡し、獣人魔島、半ペラ九枚渡す。

〔二月四日 金〕「天気」雨、晴

平吉夫人来り、借間の保証人の判押す。「獣人魔島」全部渡す。榎本君より電話。東映渡辺より電ワ。明日いくとのこと。

〔二月五日 土〕「余記」東映渡辺 小説クラブ マブチ

・東映渡辺君来り、五月封切のため、不死蝶をほしいとの申込み。マブチ君来るも月曜日といふことにする。・三味線二丁とどく。・夜、神尾君にきてもらひ、家内、よし子、ルミ、稽古始め。◎電気屋来り工事。◎モリちゃん、池の菰をとる。

〔二月六日 日〕「天気」寒し

昨夜より吹きはじめた北の風なほ強く、寒気ぶりかへす。関川君来る。縁談なり、家内にいろいろ注意す。午後、日高君来る。シナリオ第一稿完成す。いろいろとダメを出す。昨日、植木屋に菰をとらせたのに、寒気ぶり返して、池の水凍ってしまふ。少し早まつたり。電気工事了。

〔二月七日 月〕

家内富士銀行へ新株払込みにいく。橋本さんを頼んでフトン造り 部屋の取片付け。一日気分悪しく風邪気味にて寝る。雪の予想なりしも雨。

〔二月八日 火〕

一日臥床、風邪気味少し妙にて、腹具合無闇に悪く度々下痢、食欲なし。夜神尾来り、三人三味線の稽古。自分は寢床にみて神尾君に会はず。

〔二月九日 水〕「天気」晴「余記」杉山、本を持参。留守にてあはず。

気分悪しく一日中歩きまはる。大映より黒岩君使ひ来れる由なるも、外

出中にて会はず。三味線箱来る。食欲なし。

〔二月十日 木〕「天気」晴

三つ首塔\*書きはじめ。夜までに半ペラ六十枚一寸渡し。その中より挿エの場面とって貰ふことにする。なんとなく寒くなりさうなり。

〔二月十一日 金〕「天気」晴

三つ首塔\*あと半ペラ十六枚程渡す。午後から風吹きはじめて寒し。

〔二月十二日 土〕「天気」晴

寒し。おたいちゃん\*、女中をつれてくる予定なるも来らず。明日か。「吸血蛾」書きはじめが気合乗らず。今朝、水道凍りて、十一時ごろまでとけず。今冬第一の凍りようなり。夜、神尾君。

\*おたいちゃん 不明

〔二月十三日 日〕「天気」晴「余記」杉山に検印六千渡す。六千部分の手形持参。

「吸血蛾」八十三枚一気に書く。はじめのはう、半ペラ三十枚程書いてあったのを、はじめから書直したために、夜七時までかかる。午前八時に机にむかつたのである。寒し。おたいちゃん、女中をつれて来る。よい子なり。新潟猛吹雪の由。

〔二月十四日 月〕「天気」晴

散髪、入浴。午後、黒岩君来る。(大映) 稍温し。池、鉢前凍る。終日、何もせず。

〔二月十五日 火〕「天気」晴

寒気ゆるむか。鉢前今朝は凍ってをらず、なんとなく心うれし。東映角谷(原稿延期)謂ク(地名変更)の電話かけさせることにする。池の水もやや解け気味、うれし。花見の仇討\*筋まとまらぬながら、取り敢ず書きはじめ。金原君より試写案内。三十五枚書く。税金調べをやる。

神尾君ケイコ。

〔二月十六日 水〕「天気」晴 稍寒し。「余記」集英社より「稿料」として午后

午前中に本数冊買ってくる。「花見の討仇」を書きつづく。午後、宮城君\*迎えにくるので、「東宝」へ試写を見にいく。めくら狼\*まあまあといふところ。「花見の仇討ち」興味中断されて書く気せず、明日にのばしてもらふ。

\*宮城君 不明

〔二月十七日 木〕「天気」晴 寒し「余記」「花見の仇討」九十一枚鉢前も凍る。池カチンカチンに凍り、鯉大きなのが三匹ういてゐる。あわてて氷をわって、氷を三分の一ほどかき出すに、鯉生きかへる。酸素不足か。税務署来る。「花見の仇討」九十一枚渡す。

昭和三年 一九五七年

四月八日 晴天

昨夜、門田先生の来診を仰ぐ。血圧一七〇。エガリン\*の連用をすすめられる。今晩カビ\*死す。先月十四日医師につけて以来のカビの苦闘を思へば涙なしにはゐられない。家内をはじめ一同よく面倒を見たり。遺体を花に飾りて、万事医者にまかせて、のち、カビの小屋を焼く。晴天のもと炎上する犬舎の焰を見て一同黙然たり。面白ぶつく\*。「幼年クラブ」\*もう一日延期してもらふ。講談の捕物一ヶ月延期。トマト、芽をふきはじむ。胡瓜は双つ葉が出たり。ともに先月二十四日温床に播種したものである。本日はいくらか耳鳴り少いような気がするが。……

講談の捕物、結局書かねばならぬことになる。酒三合、タバコ十六本。

\*エガリン 血圧降下剤

\*カビ 横溝家の愛犬(写真P11)

\*面白ぶつく 「おもしろブック」。集英社が昭和24年に創刊した少年誌

\*「幼年クラブ」講談社発行の児童雑誌

四月九日 晴天

朝、眼をさますに耳鳴りしきりにして、左手の外側掌と、左足の同じ部分が、ともに軽くしびれている。これにていっぺんに自信挫け、仕事の意欲を失う。午前中、散歩約一時間。午後、女房とともに堆肥作り。(約二時間)動いている間中、耳鳴りを意識して不快なり。この耳鳴りの原因は、ひとつは一日よりの甲子園野球をテレビで視すぎたせいに非ずやと思う。夕方「面白ぶつく」来るが、帰って貰ふ。幼年クラブも明日のこととする。酒三合。タバコ二十一本。

四月十日 曇りてやや薄ら寒し。

ヒヤシンス、すでに萎れはじめたれど、チューリップはまだ花開かず。今年にはチューリップ遅いのではないか。庭桜、まっ白に咲きて美し。池のほとりの笠見月\*、黄色い花を一面につけて、すでに萎れはじめたるが如し。破れ笠数日前に、破れ傘の如き葉を開く。温床の胡瓜、トマトなど、半ば発芽したるも、ナスのみ未だ。同日に播種したものうち、胡瓜一番早く、トマトこれにつき、ナス最もおそし。播種した場所にもよるか。(来年の参考のために。)幼年クラブに七枚渡す。但し、内藤君には会わず。角川の志摩君\*とやらに、江戸川、木々、横溝三人一組で一冊出すとやら。明日写真撮影に来るとか。午後テレビでオリオンズーフライヤーズ戦を見る。夜はコマ劇場を二時間にわたりて視聴す。終日耳鳴りに悩む。

# 資料翻刻2

## 海野十三

### 横溝正史あて書簡

〔昭和21年4月14日〕23年10月31日



作家デビューのころ

海野十三(うんの・じゅうざ 明治30・1897~昭和24・1949)

徳島県生まれ。小説家。本名佐野昌一。早稲田大学理工学部卒業後、逓信省電気試験所技師として勤務。科学雑誌に科学解説や科学童話等を執筆、1928年「電気風呂の怪死事件」を雑誌「新青年」に発表。以後「振動魔」(31年)「俘囚」(34年)など科学知識を活かした探偵小説や科学小説を執筆。「火星兵团」(39年)「地球要塞」(40年)など少年向け科学小説にも尽力し、のちの日本SF第一世代に多大な影響を与えた。1930年より没年まで若林在住。

〔日記上部〕角川へ、「真珠郎」「鬼火」「蔵の中」渡す。  
 \* 国民文庫「現代国民文学全集」。昭和32年に『現代国民文学全集第8巻 江戸川乱歩 木々高太郎 横溝正史集』が角川書店より刊行されている。  
 四月十一日 曇りて風強し。いやな日なり。「面白ぶつく」渡す。書くことによいよ自信失う。但し、耳鳴りはいくらかよき方。午後水谷君より電話、角川主人を伴ひて明日ゴルフの帰途写真撮りにくる由。講談クラブへはかつて河出へ書いて返されたものを渡すことに極める。インゲン播種。カピの二世数日中に来るとか。カピの治料費一切含めて三万六千円也。  
 四月十二日 曇、小雨  
 午前、犬商と獣医小犬をもってくる。柴なるよしも、カピより毛の色薄し。但し、毛の質は柔かにて、カピよりはよきようにも思われる。牡犬なり。生後六十日前後の由。買うことにする。七千五百円。水谷君、角川の主人とともに来る。先方の希望によりて、八つ墓村を渡す。小雨そぼ降る庭にて、写真十数枚撮影。夜、カピ二世啼きてよく眠れず。東方社に追加原稿「墮ちたる天女」  
 〔日記上部〕講談クラブへ「三河万才」 角川に「八つ墓村」 東方社に「墮ちたる天女」  
 四月十三日 土曜日 曇  
 仕事するつもりなりしも、睡眠不足に頭脳ぼんやりして、手につきそうにない。テレビでも見て、一日消すことにする。法立戦、阪急南海戦、

早法戦を見る。夜、またカピ、啼きて眠れず。明方頃、家人にいつて、カピを戸外へ出すことにす。内玄関においていたものである。  
 四月十四日 日曜日 晴、風やや強し。  
 睡眠不足で頭ぼんやり。午前中テレビ、日活映画「銀座二十四帖」\*を見る。取りともなきものなりし。午後テレビで野球、夜はテレビで「忘却の花びら」\*を見る。午前見た日活映画より面白し。  
 \* 銀座二十四帖 昭和30年公開、川島雄三監督の日活映画  
 \* 「忘却の花びら」 昭和32年公開、杉江敏雄監督の東宝映画  
 四月十五日 月曜日 終日無為  
 四月十六日 火曜日  
 日曜日の晩よりカピを屋外に睡らせることにするに、成績よろしい。恐らく内玄関は窮屈で眠られなかったものらしい。カピ朝より絶食。午前十一時頃医者来り、駆虫薬のませる。蛔虫数匹。カピ、手当八時頃に至りて、初めて食事でありつく。それまで腹をへらして、ひよろ／＼なるが、おかしくも哀れであった。  
 四月十七日 水曜日 終日無為  
 四月十八日 木曜日  
 オールの安藤君来訪。原稿依頼。かくも自信を失へる自分に原稿依頼あるが不思議のやうな気がする。でも引受けることは引受ける。立直りたきものなり。トヨダを昨年買っておいたのに一〇〇円ばかり値上がりなり。家内安田女史に売るべきや否やを相談に赴く。五月まで待つべしと。

【資料概要】

海野十三から横溝正史にあてた書簡。昭和21年4月14日〜26日（4通）、昭和23年7月30日〜10月31日（73通）、計77通

当館所蔵の海野十三 横溝正史あて書簡はいずれも横溝孝子氏（横溝正史夫人）寄贈である。戦後まもなく岡山県に疎開していた横溝の居所を人づてに聞いた海野が横溝にあてて手紙を送ったことから両者の間に文通が始まり、それは昭和23年夏に横溝一家が帰京したのちも続いた。特に成城転居後は連日のように書簡の往復があったことがうかがわれる。



昭和23年8月13日の書簡に同封されていた「THE NEW YORK TIMES OVERSEAS WEEKLY」(1948年8月1日号)の切り抜き

当館では海野から横溝にあてた書簡は今回収録のほかに昭和23年11月から翌24年5月17日（海野が逝去した当日）までの148通を所蔵しており、今後も順次翻刻を進めていく予定である。

横溝は、海野が「新青年」でデビューした当時の編集長であり、横溝あての海野の署名入り献呈本も複数残されていることから、二人の間には戦前から書簡のやりとりがあったと推測されるが、当館での所蔵は右記のみである。また、横溝からの海野あての書簡は所蔵していない。共に結核療養中の身であり気軽に外出が出来なかったため、書簡には毎日の詳細な病状のほか、執筆に関する話題や読んだ本、日常生活、家族・共通の友人のことなどが詳らかに記されている。

【凡例】

- 資料番号は各書簡の年月日の下に（ ）で記した
- 発信地の住所はすべて世田谷区若林の海野十三宅のため省略した。受信地の住所は世田谷区成城の横溝正史宅以外の場合のみ記載した
- はがきや封書の差出人欄に書かれた日付を資料名に入れた。但し本文と差出人欄の日付が異なる場合には本文の方を採用した
- 漢字の旧字体は新字にあらためた。ただし、人名・固有名詞などは一部表記（旧字）通りとした
- 仮名 表記通り（ほぼ旧仮名、但しカタカナ表記の撥音便は表記通り）
- 数字・記号 表記通り
- 改行、文字間の空き、句読点の配置はほぼ表記通り
- 判読不明の文字は、その字数分、□□□とした
- 書簡内の海野による絵は極力図版として入れたが、入れられなかったものは「○○の図」と表記した
- 翻刻者註（\*）は適宜各日末尾に記載。なお「横溝正史日記」翻刻に入れた事項、人物は一部省略した

資料翻刻2

# 海野十三 横溝正史あて書簡

（昭和21年4月14日〜23年10月31日）

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和21年4月14日（12068）

封書 便箋3枚表裏に記入 筆書  
〔宛先〕岡山県吉備郡岡田村字桜 横溝正史様

拝呈、近日来寒気も漸くに退散いたし寒さざらひの小生大満悦にをります。先日「寶石」の会合ありてマ司令部\*の出版調査官タトル大尉の臨席を仰ぎ在京探偵作家勢揃ひにて近頃にないうれしい会合でした、江戸川、大下、水谷、木々、城、角田、小生の在京者の外に、渋川在の渡辺啓助も加はりました。いづれ同（うら）誌上で発表される事でせう。但し大尉の話は大した事ではなく、探偵小説についてのみのこつちの質問はむしろ同大尉にお気の毒でした。しかしいい方で、全く敬意を生じました。

「ロック」一号はひどいものでした。二号から漸く体裁を整へたものとするべく貴兄よりの御申告をたいへんよろこんでみます。又「ぶろふいる」誌が六月より再出発しますので探小誌は三つになるわけ、ともかくも賑かな事です、この方は、九鬼澹君（三上紫郎）の編輯です。

新聞は広告される雑誌単行本は数多けれども数を実際に出すものは極めて寒々。印刷面の渋滞は依然として著しきものあり、但し選挙もすみ官郵書印刷も一息ついたのではとスピードを回復するかと思ひます。

稿料は封鎖支払\*が多くてやり切れません。何十円もらっても封鎖では紙屑同様、一向有難からず、書き始めても、これも封鎖かと思へば気乗りがしなくなり、ます／＼筆がにぶり、作品が低調となります。切手も新円で、原稿用紙も新円で、インキもペンも新円で、そして封鎖を貰ふのでは、新円を減らすために苦労して原稿を書いてあるやうでバカ／＼しい事です—といったやうな考へを起こすのもこれ又人情であります。原稿料は新円にてお支払いたしますといふ社もあり、こつちから頼んで半分を新円でもらふやうにして、やれ／＼と思ふ事もあり、単行本のときは一層この支払が微妙であります。封鎖なら印税一割、新円払ならば八分にといて叩いてくる出版もあります。

とにかくだん／＼と新円化する事でせうが、大きい社など封鎖でよこします。しかし又このうち平価切下やら新円の尽はりも起るべく、新円をつかんだとて安心ならず、新円があればどん／＼食物に替へてしまふといふのが今日の東京の状態のやうに思ひます。そちらは如何ですか。又元の話に戻り、「寶石」一号は中旬出る様子、「ロック」二号は月末迄かかるといふ話で、「むしろ拙速を」と山崎氏へすゝめてみます。近況ちょっとこれ迄。

四月十四日

## 正史大兄

\*マ司令部 マッカーサー連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）

\*封鎖支払 封鎖預貯金は昭和21年に金融緊急措置令により施行された預貯金払戻しの制限。封鎖支払いは封鎖預貯金から封鎖のまま支払いをすること

\*新円 昭和21年に施行された新円切り替え。社会的混乱を招いた

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和21年4月18日（12062）

封書 海野用箋2枚 ペン書

四月十八日 十三 「宛先」岡山県吉備郡岡田村字桜 横溝正史様

## 正史兄

拝呈、けふ「ロック」の編輯方針討ぎ会のやうなものがあって、江戸川、木々、小生と大慈宗一郎君\*と中島親君\*とが出席、先方は山崎君とマネージャーの成田氏とが見えました。貴案と木々案とが提出され、検討いたしました。大體貴案でこの三ヶ月は進むことになったやうです。（木々案は、八〇枚二本建とし、随筆三〇枚、以て他誌と比べて特色あるものにすべしとの案でした。しかし江戸川さんが、それは駄作を得たとき危険状態を招来するといつてかぶりをふりました）

貴連載\*はすこぶるの期待をもつてみます。山崎君にすすめて、その掲載号はそれをトップに、一号大きい九ポで組み（木々氏は小説は絶対九ポ案。現誌は八ポです）大々的に宣伝することになりました。大慈中島両君は、実際上の編輯スタッフとして二人協力して同誌を推進することにより、毎土曜日は出社し、かたはら新人吉野君の訪問も受けるなど、大いに活躍してくれませう。

これに対し貴兄やわれ々古い連中でバックアップして、何とか一人前の探小誌\*に仕立あげたきもので、とくに貴兄の一層の御指導を私からもお願いする次第。（全く、見ちゃいられませんので、あぶななくして…）

「ぶろふいる」も六月からクォーターリーで出すといふ話は前にしましたが、稿料10円です。これは以ての外だと、資本主の熊谷氏へ伝えておきました。

山崎君がそのうち貴兄のところへお訪ねするかもしれないとのこと。彼は純真で熱情家で、愛すべき人です。十分にきたへてやって下さい。本も雑誌も大洪水のごとく印刷所へ流れこみ、そこで大停頓してゐます。流れ出すのは七月頃からで、それまでは広告は出ても、現物はなかく出ますまい。

古本が大分下がりました（新円以来）。ところがちかごろ少しあがり気味です。生活難からやむを得ず売りに出す人がふえて来たためと思はれます。（近況以上）

\*大慈宗一郎君 探偵作家

\*中島親君 探偵作家

\*貴連載 横溝「蝶々殺人事件」（「ロック」昭和21年5月号、22年4月号に連載）

\*探小誌 探偵小説雑誌

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和21年4月23日（12071）

官製はがき（石川達三衆院選立候補を知らせるはがきを再利用） 筆書

「宛先」岡山県吉備郡岡田村字桜 横溝正史様  
新円生活下の御近説拝読 田舎は餓死の心配なしと思つておりましたが、普通の疎開先は此所えらい脅威を受けてゐるわけですね。併し東京は何しろ食物がない故たいへん。もう配給は八日とまり、昨日やつとアメリカ

七月三十日

かからのジャガイモ一人に付二キロ（値三十三匁／キロ）を配給されそれを食べてみます。旧の敵国から、漸くも恩恵を受けるとは思ひもかけず、全く涙を催してゐます。さるにてもわが政府の無力さよ。イヤナツチャウです。

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和21年4月26日（12075）

官製はがき（石川達三衆院選立候補を知らせるはがきを再利用） 筆書

「宛先」岡山県吉備郡岡田村字桜 横溝正史様  
貴翰「クキーン、マガジン」\*に関する記事あるお手紙只今拝受いたしました。早速山崎君及江戸川さんへ伝達いたします。小生は至極結構と思ひます。只難点は目下の紙の問題により紙面のせまいことです。過日の「ロック」の会の際にも拡大案を出しましたが、目下これは見込薄のやうです。「ぶろふいる」の稿料の件は甚だよろしからず、今資本主熊谷氏にも忠言し、三上紫郎君にもはっきりいってあります、聴かざれば、同誌も三号以後大いに困るでせうが、兎に角常識外れのことはやめて貰はねばなりません。小説30円、随筆20円は主張いたしたく、又他誌「宝石」もやすいので、これも訂正申入れたいと思ひますが如何ですか。ちよつと一筆申候。「新青年」の貴作\*たいへんたのしくうれしく拝見。

\*「クキーン、マガジン」 アメリカのミステリー小説誌「エラーリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン」。のちに日本版が早川書房より刊行された。

\*「新青年」の貴作 「歴」（「新青年」昭和21年4月号掲載）

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年7月30日（19738）

封書 佐野用箋3枚 ペン書

「宛先」岡山県吉備郡岡田村字クラ宛から回送 東京都世田ヶ谷宅 横溝正史殿

私は今日は朝から税金申告の計算で頭をおもしろくなくこき使つてゐます。そこへ税ム署から七万九千何がし円の税金納付督促が来ました。これは海野十三宛で、過日異議申立てをいたし（重複課税につき）、署長より「免除する」との通知が来てゐたものですが、同じ署長で、又納付しろと命令書が来るのは、あまりといへば連絡のないだらしなさに、呆れ果てました。

そこでこつちも只今お冠をまけて、税金計算をおつぽり出して一息入れてゐるところ。

昨日も一昨日も夕方七度に体温があがりました。まだ気管支カタルが十分に癒つてゐないらしく、今日も計算がすんだら寝るつもりです。蜘蛛は全くおそるべき猖獗を極めて居りまして、わが家においてもシヤクにさはる事甚大でありまして、その種類は大より小まで、約十種はあ

るらしく、目下目のかたきにして退治に腐心して居ますが、戦況はわれに不利であります。

その後泥坊来らず、警報機も従つて鳴らず、今日は垣根をつくろひ、隣家との間に板塀をこしらへることになってゐます。

今日延原氏より来信。八月十五日頃迄に移転の予定とあります。東京は畳表のいいものなし。特約しておかれたら、将来きつとおとくになりませう。では皆さんによろしく。

猫の仔は、下から椅子の上へとびあがるやうになりました。

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年7月31日(19883)

官製はがき 筆書、ペン書、落款

〔裏面中心に(寿)の文字〕

只今、廿七日附の御手紙を頂き、大いに楽しみまして、さて御返事をと、用意にかかりまして気がつきました。今日は七月廿一日だ。あなたは家康江戸入城の記念日である八月一日に入京される、すると明日のことである。すると、岡山県宇野クラ宛へ出してももう間に合はぬ。これはえらいことになったぞと微笑を禁じ得ず、今日の分は、成城宛の第一信となるかと、今更のやうにうれしくなり、何かお祝の方法もがたと考へましたが、わくわくうれしくて句を作つてゐるのもまどろこしく、そこで寿の字に万感も万意も代表してもらひまして、謹んで第一信を御新居へ呈上する次第、お目出たうござりまする。東京はまだく熱雷が来ることでせう。さぞそこでは豪華な夕立が見られませう。小生昨日は納税計算に熱中してゐましたが、二男が鋤石受信機を作りだしたので、その指導にのりだし、いつもよりは余計に働いてへとへととなり、腹がどかべり。柳川鍋に息ふきかへしました。延原さんは八月中旬、山下(赤堤町一丁目)へ移転の由

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月1日午(12077)

官製はがき ペン書

今日はかくべつ暑く、汽車で走つておいでの最中のみなさんがたに深く御同情いたしました。走つてゐるうちは、それでも涼しいでせう。停車

すればたいへんな暑さでございませう。今日は小生も大うだり。日曜日

でありますので客来もいつもの顔ぶれとは異り、小栗未亡人\*、中学の旧友、それにおひる過ぎには江戸川さんが来て下さるとの電話がさつきありました。今夕は熱雷必至と思はれます。こんな日に入京第一日を迎へられること故、今日はスペツシャル・デーなることをお承知置きされるがよろしからんと思ひまして一寸一筆。猫の仔いよく可愛くなりました。これならルミちゃんのお気になふことであらうと、楽しみであります。暑いので、子供は西瓜を毎日たべたがってあります。四分の一(二貫匁のもの)のをたべさせたら、昨日はダアとなりしも、今日はもう新しくサイソクをして午前中一ヶをやつつけました。

\*小栗未亡人 小栗虫太郎夫人

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月2日朝(12087)

官製はがき ペン書

朝雷に涼気肌爽かに、お疲れの寝心地一段とおよろしきかと察し上げます。こないいい気持の朝は近頃に珍らしいです。故にこれに味をしめ給ふこと勿れ。仲々きびしい暑さが此所続いてゐますから。江戸川さんは昨日そちらへ赴かれし筈。一番乗りであります。私は失礼、悪しからず。そのうちひよっくりお訪ねするかもしれません。朝顔もだんく咲き出して、いよく盛夏なり。今日よりそろく執筆再開しようかと思ひますが、右肩こりて咳や欠伸をしても筋が釣れて痛く困ります。まあ、ぼつくと始めることです。

江戸川さんより只今電ヲあり、あなたへことづけ。歓迎会用意に十日以上かかる和水谷準の申します故、会は十四日か十五日頃と思つて下さい。いづれその前に連絡しますとのことなり。以上

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月3日夜(12090)

封書 佐野用箋5枚 ペン書

八月三日夜

昨日はありがたうございました。全く以て意外な御訪問を受けまして、女房にかつがれたかな、かと思つたくらゐです。お疲れもありませうのに、その他お家のお片づけもありませうに、早く来て顔を見せて下さつて、ありがたう存じました。うれしく、うれしく、そして大安心をいたしました。やっぱり気にかかつてゐたのですね。

お土産に下さった桃はでかいのにおどろき、そして喰べてみて、味のいやみのないのに感心いたしました。早くも今夜で、すっかり頂いてしまいました。皆々の食欲の旺盛なることお察し下さい。

昨日より仕事を始め、今日も二十枚あまり書きました。今週はこの調子でダッシュいたしますつもり。十分休養したあと故、調子はいいです。昨日「小説の泉」が来て「どうですか。あと先生一つをお待ちしてゐます。一番おそくなつた角田先生の御原稿も明日頂くことになって、いよ／＼先生おひとりが残つてゐますから」といはれ(女房が玄関に出て、右のことをいはれてゐます)、私は襖の陰にてをかしさを怵へてゐました。あとで女房のいふところによれば、「よくもあんなにうそがつけることですねえ」私曰く「しかしさういふ嘘をつくのも仕事なんだから、それでいいんだよ」

それとてにかく私は来る土曜日の七日に渡すことに約束いたしました。(はじめ九日渡しといたところ「それでは甚だ困ります、なにしろ××日も発行がおくれましたので…」といはれてとにかく病氣故何ともいへないが土曜日に来て下さいといはせました。

今日の夕方、税ム署の人が二人来ました。大いにおどろきましたね。う

ちへ見当をつけられるとは何たる事であらう。大いにいぢめられるかと思ひましたが、玄関へ出た娘のいふことに「私用なんですって」私「なんだ、私用だつて」娘「さうですって」私「ふーん、私用か。上へあげなさい」と元気を回復して、二人にあひました。文学志望の人で、鱗さんと柳沢さん。それから話をはじめましたが、大分しゃべりました。すべて文学と小説作法のことばかりで、税ムのことは一言もしませんでした。

そのうち又遊びに来てくださいと送りだしましたが、世田谷の作家先生のところを次々にまはつてゐる由。よかつたら、お宅も御紹介いたしませうか。いかが、いかが。

一人は日大の文科の夜学に行つてゐる人、もう一人は他の学校へ行つてゐて、文学志望の人ださうであります。

今日はこれにて擱筆。

皆さんへよろしく。

十三

正史大兄

硯北

あなたは、これまで頂いたどの写真よりも肥つてみました。そしていい顔色をして居られて、大いに安心もいたし、羨ましくも思ひました。

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月5日朝(12094)

官製はがき ペン書

成城よりの第一信を拝受。岡山県云々となのが目に立ちます。お宅とうちの距離が急に何千分の一か何万分の一かに縮まつてしまひました。大いに心強いわけですが、これからは同じ地方に在住し、同じ客たちに

接しますので、連絡事項も自然大いに減るでありませうが、又別のものと身近い問題や出来ごとについておたよりを頂きたく、期待する次第です。今日はむし暑くていけません。仕事も三日前からはじめましたが、昨日は慣れないこと故つかれてしまひ、床へはいると本も読まないでぐうぐう睡ってしまひました。一日二十枚を目標でやってみますが、十五枚ぐらゐしか書けません。いよ／＼老眼になつたらしく、よほど目を紙から放さないと二重に見えます。度のよく合ったメガネを渋谷へ買ひに行きませう。

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月6日夕(12096)

封書 便箋3枚 筆書

八月六日夕

当方三十日差立のサクラ行手紙が同封の如き符箋つきで拙宅へ舞戻り一循環いたしましたのでお届けいたします。調べてみますと川辺局の符箋の記載に脱漏があったことが分りました。すなはち「世田谷区成城町」のうちの○印の四文字がおちてゐます。そこで差出人たる私方へもどつて来たもの。川辺局へご注意ありて然るべきかと存ぜられます。

昨日息苦しく顔火照り、いやな気持でありましたがおくれてゐる連載六つの中の特に重大なる三つ目のをぜひと書いてしまはねばならぬので、熱ありと思へど計ったがさいごペンを放り出すことにならうと頑張り、そして后四時やうやくふら／＼ながら書き了へ、そこで検温計を腋下へはさんでみると、なんと七度九分強。なるほどこれでは辛かった筈頭も痛かった筈と、寝ました。主治医かけつけられ、万事処置をしてくれ、夜は楽になつてやすみました。今日は正午に七度丁度。夕刻(只今)六度六分。すっかり楽になりました。夕立頻々で、涼気が急にやつて来

また暑くなり、この上り下りが頻繁なのが、身体にこたへるのでせう。暑いなら暑いで、きまってくれるといいんですが。明日は「小説の泉」の藤間さんに大叱られを覚悟してゐます。

十三

正史大兄

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月7日午(12101)

官製はがき ペン書

五日附の御手紙昨夕拝受。なか／＼いい原稿用紙ではありませんか。私がいま武田君に頼んであるのはもつとお粗末で、ずっと薄いですが、それでもやつと探しあててくれたものであります。一万円渡しましたが何枚こしらへてくれますか。とにかく楽しみにしてゐます。おどろかさされた私の発熱も今日は平日よりもずっと低くなりました。これで癒つたのだと自信がつかました。しかしどうも気持がわるい。どうしたわけかといろ／＼しらべてみましたところ、両方の肩がひどくこつてゐることが分りましたので安心しました。といふのは、これなら主治医によくきく注射をうってもらへばすぐなほる事が分つてゐますのでなほる見込がついたわけ。(もう膏薬紙を貼ることはやめました。主治医の注射の神効をあらはすにしかず)御荷物も無事御到着。うまくお受取りになつてたいへん結構でした。

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月8日(12103)

封書 佐野用箋3枚 ペン書

八月八日

六日附の御手紙をありがたく拝受。五ヶ年計画のこと、私までも大いに

嬉し楽し。払い用一日も早く御実現のほど祈ります。私方も、あなたの真似をして何か計画をたてたいものです。

しかし昨夜もくだらんことを考へてみましたよ。「もう何年生きるかなあ。是非しておかにやらんものは何々かなあ。生きてゐるのにも草臥れた。わしやもうだめだよ。」——これは大兄に大いに叱られると気が付き、途中にて気をかへ、「なあに、病気に負けるな。きさまこの春あたりから調子がいくせに病気に喰はれちまつてグジグジしてゐるぜ。すこしぐらゐの熱や咳や痰などがなんだい。駆足で渋谷あたりまで行つてみろい」と叱りつけまして漸く熟睡。(但しアドルム錠一錠半の効目があらはれしなり)

とにかく昨夜はわりあひ気持ちよく睡りました。睡眠薬アドルムのせいもあります。夕刻村上博士\*に両肩へうって頂いた肩のこりを沈痛する注射の効目があったのが主です。今朝も痛みを覚えますが、それでも楽になりました。本夕もう一度注射をして頂けばそれでもうすっかり癒るでせう。今朝は気分もすっかりよくなり、昨日の「わしやもうだめだ」の気も消散しました。案ずるに肩が凝ると呼吸困難になつて、やり切れないのが主な原因でありませう。

建築設計家のことは、すぐ手近かに適当な人が居ませんが、考へておきませう。甥で、復興院\*に入つてゐる建築技師(若僧)がゐるんですがこれに相談するといひと思ふが、今青森に行つてゐる秋にならないとこつちへ戻つて来ません。大学時代の同期生で佐藤功一博士\*の助手をしてゐた猪野君はどこにゐるか。とにかく考へておきます。

辰野隆\*先生の書齋は仲々いいやうですね。先生の随筆本の表紙と扉に出てゐまして、感嘆中のものです。

十三

正史大兄  
机下  
\*復興院 戦災復興院。第二次大戦後の戦災都市の復興を担当した政府機関。  
\*佐藤功一博士 建築家  
\*辰野隆 フランス文学者  
\*村上博士 海野の主治医  
海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月9日朝(12107)  
官製はがき ペン書  
冷水摩擦を再開しました。そのあとで咳きこんで、肩の凝りがひどいので、呼吸困難となり、思はず「苦しい」と悲鳴をあげて家内をびっくりさせました。肩の凝りといふやつに近年悩まされるやうになり閉口です。今夕はぜひ注射をして、ほぐしてもらふつもり(昨夕は見合はせました)。今日からすこしづつ仕事をしてみることにしました。さしあたり「小説の泉」を完成までつづけるつもりであります。少年新連載をたくさんもちこまれたので、断りに閉口してゐます。しかし義理もあつて三つばかりは新しく引受けねばなりません。ます／＼時間は逼迫。それでは一層苦しからうにどうするんだいと自問自答。

近作

納税し金が残らば生きナサイ

やせ我慢オリンピックを聴いてゐる

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月10日夕(12110)

封書 竹々亭用箋2枚 ペン書

八月十日

## 正史大兄

\*陽子 海野十三の次女

○さつきよし子さんと亮一君の御来、美事な玉葱をどっさりありがたう存じました。いづれすき焼鍋にて頂きませうと楽しみに加へました。

\*陽子 海野十三の次女

○今日も陽子\*はかけちがひ、お目にかかれず。お二方がお帰りになると、すぐそのあとで帰宅いたしました。残念がって居りました。

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月11日朝(12113)  
封書 半紙6枚 筆書

八月十一朝

○「小説の泉」が、私をあきらめて下すつたので(昨夕)、おかげで今日は静養に専心することができ、まことにありかたいことです。昨日までは寝てゐても気が気でありませんでした。

御ハガキ御手紙拝読。税務署。美談は快的。ようございました。東京へおかけりあつて、尚そのうちお宅へ伺つたとき詳細署の心意気をきかせて頂くことにいたしたく。

○この原稿用紙は武田君に頼んだもの。

「小説の泉」は私は勘弁してもらひまして目下さばくですがあなたは御同情いたします。あれはとても五百円などといふ稿料ではやすすぎます。小生本日よりぼつ／＼仕事にかかるつもりなれどいよく猛暑にてピツ

今日出来上つて届けてくれました。百枚綴がたつた、三十八冊。「へえ、これで一万円かい」とおどろきながら、割算してみると、一枚が二円六十銭ばかり。「うむ、たしかに間違いなしだわい。これは原稿料をもつと高くしてもらはにやり切れんぞ」と結論を得ました。

ちよつと動くと、すぐふら／＼息が切れ、情ない事です。昨夜は寺田寅彦先生\*の死床記録を主治医氏が書いてゐるのを熟読いたし、変な気

○これからの機会あらばちゃん／＼原稿用紙をつくることにしませう。

○今日の暑さは又格別なり。とても蒲団の上では寝てゐられず、昼寝を中止して起りました。このへんが暑さの峠であります。仕事さへな

持に陥り、アダリンをのんで睡りをもとめました。四時間経つてアダリンは約束どほり一度ぼつと目をさませましたが、この時夢を見てゐたことに気がつきました。何でも私が青年寺田先生。うちの家内が、その許婚のお嬢さんといふ役割でありまして、さめて苦笑。

○今年は糞虫が多く発生してゐます。

先生は胃潰瘍からいつの間にか胃内に癌腫をもつて居られ、それが死の

○親猫が、あれ以来家に居りません。もう一匹の仔猫がご近所に居るので、そこへ行つてゐるのでせう。乳をのませに行くのです。

三ヶ月ほど前から骨を犯してきびしい疼痛を生じ、就中脚部、肋骨がやられ、のちに腰椎までがやられてレントゲン写真をとると、骨がすつかりとけて吸収されてなくなつて居り、疼痛はこの過程において骨をはなれる軟骨と筋との間に生ずるものなる事が判明、死の数日前に到りては

○皆さんよろしく。

れる軟骨と筋との間に生ずるものなる事が判明、死の数日前に到りては

遂に頭蓋の前左頭骨がやられてコブになり、脳髓を圧し、先生の意識は

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月13日朝(12116)

濁濁し言語不明晰となられやがて死の転帰をとられしと書いてありおどろきました。先生の最後の講演を聴聞したのはその年の春のことかと思

封書 半紙4枚 筆書 新聞切抜(ニューヨークタイムズ)  
八月十三日朝

ひます(先生はその年の十二月三十一日午すぎ死去)。この頃かういふえらい人の病床記録や死床記録を読みたくてなりません。しかしいつも死ぬ人の場合とは限らず、日夏耿之介先生\*の二十年(?)闘病して快癒の病床日記も、熟読してゐます。 吉田絃二郎先生\*の「わが

十日附のお手紙を有難うございました。ピカといふいい名がつけました由。うちの皆もそれを承り大よろこびです。母親(猫の)は昨夜もうるさく鳴いて廊下を歩きまはり閉口。もう忘れてもいい頃と思ひますのに、(いつもなら一日二日で忘れる)今度は仲々忘れかねてゐるらしく、タマ公もやうやく一疋前の母性を備へるやうになつたのでありませう。徳川さん\*の著に「チコ二世伝」なる猫伝あり、これを一両日前読みまし

て快癒の病床日記も、熟読してゐます。 吉田絃二郎先生\*の「わが人生と宗教」を読みかけていますが、これはもちろん病床ものではありませんが、苦痛にやり切れなくて途中たび／＼本を伏せました。先生にはお子さんがなくてお気の毒。御夫婦中は非常に円満にてよくお二人連

て興味津々。徳川さんのよさを再確認いたし、ます／＼長生きして頂きたく思ひました。お風呂は素敵であるらしく羨望。うちももっと生活が楽になつたら湯殿

でお出掛けのところを見ました(目黒がお好きでお二人で汗を流しながら歩いてゐられるところへぶつかりしこともあり) お宅でも羨しいほどでしたが、先生の今の心境はわれ／＼凡人にはきびし過ぎます。先生としては求めて自らさびしい極限のところ立ってゐて、天下のさ

はぜひ改築したいと思つてゐます。昨日は従来になき気分よき日でありましたが、夕刻になりて熱発七度四分、そして両肩が急に猛烈にこり出しまして苦しく、村上博士に注射を左肩へ二本右へ一本うつてもらひました。昨夜も寝苦しく、今朝になりて稍緩和いたしました。肩の凝るたびに熱が出るらしいです(発熱時間は短し)昨日小型の原稿用紙へ急いで十枚ほど書いたのが、原因の一つでありましたらう。

昨日はタマが仔猫を呼んで廊下を歩きまはりちよつと気の毒でした。もう今日はそんなことはないでせう。

「蠅男」の改装本も七月末に出しましてやはり成績よろしからざりし由。或る少女雑誌\*が、「蠅男」をぜひ子供劇として書きなほしてくれ、三十

今日も風なくただ暑し。元氣を出しませう。

よりカンタン相照してゐる仲ゆえ「よろしい引受けました」と引受けてしまひました。どういふ事になりますか、すこしく興味を湧かしてゐ

客来のベル鳴る。これにて。

十三

## 正史大兄

硯北

\*寺田寅彦先生 物理学者、随筆家

\*日夏耿之介先生 詩人、文学者

\*吉田絃二郎先生 小説家、随筆家

\* 徳川さん 徳川夢声。漫談家、作家、俳優

\* 或る少女雑誌「少女世界」。「蠅男」をジュブナイル版に書き換えた「美しき鬼」を昭和24年2月から連載した

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月14日午（12118）

封書 半紙6枚 筆書

八月十四日午

猫学校の級長さんとルミちゃんから免状を頂いたさうで、たいへん私どももうれしいことです。それに反してカムカム伯父さんの平川さん\*のお宅へもらはれて行ったノラクロみたいな仔の方はフン性よろしからず洋間の絨毯の上へ露骨にやりますさうで、困ります。いよ／＼お仕事はじめの由。これでスタートがおつきになり御快作がもり／＼と出てくること、期待いたします。お尋ねの延原さんの転宅はこの月半ばの頃との話でしたから明十五日の日曜日が書き入れになってゐるのではないでせうか。然るにユーカリ（？）台風とやらが近づきつつあって天気よろしからずお気の毒です。

吉田絃二郎先生の全集は、ずっと前永らく三軒茶屋の古本屋に出てゐました。何度か買はうかと思つたのですが中に一冊欠本がありましたので、たうとう買はずにしまひました。その後いつの間にか売れてしまつたらしいです。「わが人生と宗教」は今迄より一層きびしくこたへます。奥さんを偲ぶくだりのところをわが女房がよんで、「奥さんは幸福ね」と感嘆。目下日夏耿之介氏の「耐病秘記」をよみかかつてゐますが昭和六年から同十二年迄の七年間、はげしい神経痛に悩まれてゐたのが、遂に全癒に至りしその手記であります。辛抱づよきこの先

生に敬意をいくら捧げてでも捧げ切れないやうな気がします。そこへ行くと私なんか病気に甘く、意気地がなく、悟り切つてゐません。病氣

と心と身体と人生と世界と芸術境と宗教心とがぼら／＼である。とにかくもつと自我の強さを必要とします。肩のこり、やうやく軽くなり、本日は呼吸がずっと楽に出来ます。数日前からはじめし冷水摩擦がますます／＼気もちよろしく、なんとかして継続したいものです。仕事は八月一杯気分がいい書きたい時だけに書くといふことにしてもう二旬、不義理を方々へかけます肚。御示しのとほり、小生は何か一つ大きいこと氣にしてゐることが片づく、ほつとして氣落ちするたち。あなたがそばへ来て下され、延原さんも来てくださるとなつて、にはかに安心を覚え、砂上のくらげのやうに只今なつてゐるのでありませう。秋来ると共に、すこしく積極的に出ます。一、貴宅訪問 二、延原邸訪問、三、神田へ行くこと 四、日光に必ず当ること、五、冷水マサツ続行 六、カメラ再出動（尚、市内ゆきには自動車を使ふつもり）まづこのへんから始めませう。昨日は少し冷え腹にて二食ありしかり所夕飯はにぎり寿司、もちろん喰べすぎて本日は吸着剤\*などさかんにのんでゐます。 十三

正史大兄

\* 平川さん 平川唯一。NHKラジオ番組「英語会話」の講師

\* 吸着剤 特定の物質などを吸着し体外に排出する薬品

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月15日夕（12120）

封書 半紙7枚 筆書

八月十五日夕

冷え腹も多少悪化し、肩の凝りに至つてはますます／＼猛烈を極め、信頼す

る国手\*の毎日の特効注射も今は少々心細さを感じられだしました。軽微ながら熱が出てゐますが（毎ひるから夕方へかけ六度八分から七度四分の間なり）これは肩の凝りに大関係ありと結論しました（私がネ）。国手に伺うとカネが鳴るのかシユモクが鳴るのかといふところらしく、私には結論がつかめません。どうでもいいです。今夕もう一回いたところへ注射針を垂直にぶすりとさし通してもらひます。なんとしてもこれを直す。これさへ直れば、一切合財平常の状態に戻るのであらうと推理してゐます（これも私が）。「本日は終戦三周年。すずるに三年前を回顧しカンガイ無量たるところへ」「布哇\*よりお前へ小包が来てゐるかからハンコをもつて局へ取りにキナサイ」と、干局よりのお告げあり。阿呆らしい、あつちに知人や親類がある位なら、こんなぼろっちい生活はしてゐないし、又戦争のお先棒もかつがなかつたらう。恐らく同居の中川さん\*の間違ならんと思ひました。長男を干局へさし立ててみると（家内が命じたるもの。ワシは歯牙にもかけず、その直後に忘却）するてえと、長男が重いカーキ色の包装紙に包まれアメリカの切手のべた／＼はつてあるのを持ちかへり、縁側へずしりと置きました。アドレスを見るとなんと意外千万、ちゃんとわしの本名が書いてあります。アリヤ／＼と、差出人を見ると布哇ヒロ市の何某といふ婦人名なり。そこでいよ／＼面喰つて、ちよ／＼日曜でうちに居る中川君に聞かせにやると「それはワシの義理の姉です」とのこと。そこでいろ／＼せんさくしてみると、この前中川君一家の写真を布哇へ送り、そのときの手紙で、かういうわけ

でかかる文士のところと同居してゐると書いたらしい。そこで義理の姉さんかんげきしてこの救援小包を送つて下さつたらしい。（手紙がまだ来ないから、一方的な臆測ばかり）そこで欣然と明けさせましたわ。いや出て来ましたよ。小さいとき少年雑誌の絵に出てゐた宝袋を開いたと

きのよろこびそつくり、いろ／＼出ました。石ケン（化粧、洗濯）六ヶ、チェスタフィールド\*十二袋、布哇一里玉といふ飴玉、パン粉に入れる何ものかの罐入り、タオル、ハンカチ、布地少々、消しゴム二つ（作家ぢやぢやけに）砂糖、しめて六ドル三十二セントなり、郵料一ドル九十五セント。二千五百円ばかりの御惠贈にあづかり、時も時、終戦三周年の当日。三年前のこの日は泣きぬれて、女房と一家総心中を決議した（私が強いたのではない）。ああ、それが三年たつて、アメリカからこんなけつかな御贈与を手にしよつとは、全く思ひがけないことでありました。（肩を頷げ、われの負けなることをつく／＼と感じました。やり直ませう。もちろん心中中止の日から、さう考へたんですが。世界平和のため全力をあげてやります。

十三

正史大兄

\* 国手 名医のこと。医者への敬称

\* 布哇 ハワイ

\* 中川さん 戦後、家族で海野（佐野）家の離れに同居していた

\* チェスタフィールド タバコの銘柄

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月16日夕（12123）

封書 半紙5枚 筆書

八月十六日夕

このところ蚤大発生、昨夜も五匹は捕へましたが、あとはとりがしたか、又はうまく隠れられてしまつたらしい。DDT\*をやけに寝床のまはりや寝衣の中にまきまして、激戦中に有之、昨日は肩の凝りとお腹し

くく」とこの蚤の跳梁にてよく睡られず癩にさまりました。今日は午睡をいたし、(このごろ毎日寝ておます)午後三時半目ざめて熱を測ると七度四分あり。大いに癩にさりました。ピラミドン\*を服用。只今は気持よろし(只今五時なり。六度三分)我を折りて、女房のすゝめるやうに当分ピラミドンを一日二回のみませう(このくすり主治医より頓服用として賜りしもの)。これをのんでおればきいてゐる間気分よろしいのであります。しかし肩の凝りも、もう峠にきたやうな気がします。原稿はほとんど書かず。「書かせると、私は死にますよ」といふ言葉で原稿催促の方へ用意いたしあり、但しまだ使はず。

筆を変へました。今朝大阪の書肆へ頼み置きし谷崎潤一郎\*大人の「都わすれの記」\*到着。ものくしき荷造りにて子供騒ぐこと明けてみますと、これ大谷崎の歌と傍書を主とし文字は有名なる若き夫人\*がものされ(仲々達筆なるばかりか陰翳風韻ありて仲々佳、三嘆す)版画の下絵は和田三造画伯\*。目のさめるほどいいものにて押し頂きたくなりました。今日の日本にかくの如き好本出来る事と、うれしさ楽しさに元気づきました。(価千円也) 寝床にて古川緑波\*著するところの「苦笑風呂」(オンドリ社判です)を読みました。これ又これで頭の上に押し頂きたいもの。食ふ話がたくさん出て来まして、このごろさっぱりアカン小生の食欲をかなり刺激してくれました。乱筆ごめん下され。ルミちゃんにお礼を申します。タマ公に代りて

正史大兄 硯北

\*DDT 殺虫剤

\*ピラミドン 解熱剤。アミノピリンの別称

\*谷崎潤一郎 小説家

十三

「につぼん」一ヶ月先へ伸ばしてくれ、「サイエンス」半分にしてくれ、頼めば同情して何とかしてくれまますので有難いことに思つてゐます。このへんにて…

十三

正史大兄 硯北

\*東光出版 戦後、海野の科学小説を出版。没後『海野十三全集』全8巻を刊行

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月18日(12127)

官製はがき ペン

肩の凝り漸く軽くなり始め、蘇生の懐ひであります。熱の方も一緒に下り始めたらしい様子です。久々に人間らしく呼吸をしてゐます。御説のとほりやがて秋風爽かに吹き入るやうにもなれば元氣を取戻すことが出来ませう。目をつぶつてその日待ちませう。ここ一年半は無理をなすまじ。連日の雨と雷に閉口。蚤いよく、猖獗を極め大閉口。「寶石」に偽肖像を三枚\*かきました。新進のK君、S君、T君です。見たことなき人の顔を、当てずっぽうに描いたもの。武田君これをひろげてみて「当らないもあり、少し似てゐるものもあり」と。この評言にておよそ御察し下さい。しかしエ壺枚につき画料八百円くださるさうで、私のエがこんなに高額にて売れたのははじめてであります。苦笑又苦笑。みなさんへよろしく。

アナタが芸術院会員になるまで、私は生きてゐたい。

\*「寶石」に偽肖像を三枚「寶石」昭和23年12月号の「新人書下し探偵小説合評会」のために、海野がまだ会ったことのない香山滋(K君)、島田一男(S君)、高木彬光(T君)の3人の肖像画を、その作品の印象から想像して描いた

\*「都わすれの記」 昭和23年、創元社刊

\*若き夫人 谷崎松子

\*和田三造画伯 洋画家

\*古川緑波 古川ロッパ。コメディアン

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月17日午(12125)

封書 半紙4枚 筆書

八月十七日午

けふは女房も遂に寝込み、小生が起きてゐます。私が病氣すると、女房が必ず患ふことになってゐます。これは小生の病氣をあまり心配しすぎるためでありまして(子供の場合もまた同じ)要するに心配性。殊に小生の病氣には氣をやみ、私より以上に私の病氣に負け、そしてきつと病んでたふれます。故に小生が病氣になったときは二人前の病氣を覚悟せなばならず、おちくく寝てもゐられないのです。(今度はめづらしく二十日以上床を敷き放しで寝ました)、又女房の方からはせても二人分の病苦を引うけるわけ。半身同志とはいへ、これ仲々負担であります。私は本日は大分調子よろしく、肩も左は殆んど平常に癒り来り、右肩のみまだ疼痛あるも呼吸は楽になりました。腹具合もよろしくなりましたれば脈数も減りました。もうそろそろなほつてくれてもいい頃です。いつも病氣の話ばかりにてすみません。

昨日東光出版\*の須藤社長見えられは已むなく、逢ひました。そのとき大兄の「怪獣男爵」の話をちよつとしたんですが、「なぜこつちへ世話をしてくれませんか」と怒まれたらしい口調。どうか、第二作はぜひ東光さんへやつて下さい。そして出来るだけ永くお書き下さい。小生より呉々お願いいたします。

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月19日(12129)

官製はがき ペン書

肩の凝りも殆ど消え、熱もまた下りまして、今日はもう平常に近くなり従つて当然元氣を加へました。只病氣草臥れみたいなものを感じ横になつたり風呂に入りたくなつたり。今日はお宅の前で大ロケーション実演\*有之の由。東京御帰還の記念になりませう。まさか東京都の歓迎事業でもありますまい。岡山の方々へ御報告になれば皆さんにお宅の位置がハッキリし、そして皆さん目を丸くなさることせう。「獄門島」もいよく大団円の由。ご苦心の作、武田君も終戦后最大の探偵小説だと再三感嘆してゐました。よい装幀、製本にて世に出るやう祈つてゐます。お目出たう。

\*お宅の前で大ロケーション実演 東宝の労働争議。会社側の大量解雇に抵抗し、映画監督ほか多数の組合員が祐撮影所を占拠。これに対し、この日警官隊とアメリカ軍の戦車や軍用機が出動、組合員は自主的に退去した

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月20日正午(12131)

官製はがき ペン書

先刻東西出版社より「推理川柳」\*について横溝先生のところであなたの手紙を見て来たから九月半ばまでに何か書けとの注文の電話があり、病気がなほればやりませうと女房に返事をさせておきました。この件もつと本腰で研究したいと思つてゐます。今朝はめづらしく赤客に見まはれ(但しうすきもの小量)指折りかぞへると四十五日ぶり。この頃朝ひどいせきをするのであぶないと思つてゐたところ。但し拡大はしない見込み。肩は殆んど癒り、やれくくと思つたところへ、後の狼が顔を出す。やり切れませんな。朝タン(といふよりも透明な粘液)が肺の中

で咳と共に動き出しますが、そのとき場所と次第によっては、少しばかり呼吸困難を起すことありて、苦しいです。しかしこれはシンケイのせいもあるらしく、目下観察研究中です。病気話ばかりでスママセン。

\*「推理川柳」海野の造語。推理を含んだ川柳のこと

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月21日朝（12135）

封書 半紙7枚 筆書

八月廿一 朝

お手紙三通拝受。御執筆流るる如くスピード・アップされ、大慶の至りであります。恐らく今年の後半は今までの記録破りにお書きになるのではないかと想像します。

東宝の活劇は目下東京随一のスペクタリになりしを、居ながらにして引つけての御見物は、たしかに横正先生東京帰還の歓迎会のプログラム中の一つみたいな次第でありませう。在京の他の連中のよく知らないことを、あなたが一番知つてゐられ、話が出るんだからこれは妙であります。とにかく東宝争議も終つて結構。近所へ迷惑をかけて、あたり前だと思つてゐるのでは同情を失ひ、従つてその主張にも同情の士は少なくなりませう。どつちにしろよく仕事をして、仕事で万事を評決して貰ひたいものです。

昨夜出た血タンは、本朝は綺麗に消失いたしました。肩も、まだ右が少し凝つてゐますが、まづこれ位なら大した事でありませぬ（むしタオル法御教示ありがたう。そのうち試みませう）

呼吸困難への対策もいさゝか研究が出来、今朝はそれが起らず。その他身体の調子も頭の調子も涼気と共によくなつて来ましたやう。多分もう御心配をかけないですむところ迄回復したかと思ひます。ありがたう。

十三

正史大兄 硯北

\*「晚翠放談」詩人・土井晚翠の隨筆集。昭和23年、河北新報社刊

\*お嬢さん 海野は晚翠の娘と書いているが、実際には同行の声楽家の娘

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月22日（12144）

官製はがき ペン書

只一つのことを除いてあとはみんなOKであります。その只一つのことといふのは微熱（七度五分以下）が昼過ぎから出ることがあつていけません（ピラミドンを正午と后五時にのむですが）。過日の気管支カタルからこつちの現象です。しかしそのうちに消滅致しませう。あまり気にもかけてゐませぬ。しかし仕事はなるべくしないことにし、またなるべくたくさん寝ることを心懸けてゐます。（この頃は寝床も敷きっぱなし）。今日午前中松陰神社前の本屋まで行きました。と、ひるすぎから七度二分熱が出ました。主治医にあとで聞いたら、微熱の出る間は外出しない方がよろしいといはれました。今秋から今冬にかけ、いよゝ仕事を少くしたいと思ひました。これは仕事によるエネルギー消耗を最小限度に切下げるだけではなく、かねてやりたいと思つてゐる仕事（創作）の計画をたててみようと思ふからです。私も大兄にならひまして計画第一主義といつてみたいのであります。ヨミナホシマシタガコンナテガミオモシロクアリマセンナ

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月23日午後（12146）

封書 半紙5枚 筆書

八月廿三日午後三時

只今昼寝より起きて、胃袋に異常醗酵あるに気がつき、机のところへ行つてせんぶり\*の粉とヂアスター\*とピオカルク\*とを匙にしやくつて口

日夏耿之介先生の「耐病秘記」は仲々おもしろく（単におもしろいといつては、御病人には失礼ながら。とにかく人柄がよく出てゐますので）のこりの頁を惜しみながら読んでいます。又昨日は河北新報社へ頼んでおいた「晚翠放談」\*が届けられ、拾ひよみしてゐますが、これは又これなつかしい物語。先生が若し「荒城の月」を作らなかつたらお嬢さんの危機を救ひ得なかつたらうといふ秘伝あり。それはお嬢さんはアコデオンをひかれるので、声楽家等と共に北支方面へ慰問に行き、或るとき外城に司令部をおく某部隊を慰問したのです。ところが中共軍の大軍がとつぜんこの外城を包圍してしまひ部隊は全滅の外なくなり、従つて不幸なこの慰問隊も運命を共にするしなくなつた。その夜のことです。月は中天に冴えてゐました由。そのとき慰問隊は城の上に姿を中共軍にさらして立ちました。そして月光を肩にあびてこの一団の男女たちは、「荒城の月」をかなで始めたのです。晚翠先生のお嬢さんのアコデオンの伴奏、何とかいふ青年が今宵最後と胸を張つて高らかにくりかへしうたつた「荒城の月」。籠城の勇士たちは泣かぬものはなかつたのでせう。明る朝は城門を開いて打つて出、玉砕するの覚悟でゐましたので、一層胸にしみたのでせう。さて夜が白けかけ、それといふので城門をひらかうとして、念のために門上より敵の様子を窺つてみると、これはふしぎ敵勢が居ないやうだ。そこで斥候を出してみると、おどろいたことに中共軍はいつの間にか撤退したか一兵も残つてゐないことが判明。よつて全軍討死から助かり晚翠先生のお嬢さんもちろん生命を拾はれし由。さるにてもなゆえ中共軍は撤退したか今以つてわからないといふのであります。しかし分るやうな気がいたしますね

を放り込み、それから水をのんで顔中を毛虫のやうに苦がくしてゐるところです。

「都わすれの記」をお買ひもとめになられた由。大兄には一入およろこびの事でせう。しかし私は、あの本を手にして、ちよつと嫉けましたよ、全くの話が。

今日午前は珍らしく原稿の仕事を一つやり遂げました。八月はずぼらを極めるつもりで居たため、編集の皆さんに何度も無駄足をさせてお気の毒であります。次の御約束を一応「表」にかきこんでおくんだがずぼら月故、それを見ようとせぜ、その日その日に頭に浮かんだ仕事を、気もちよければやつてみるかなと思ふだけ。

先月も今月もエグミが先行するので執筆にかゝるとわりあひ楽であります。しかし昨夜は煩悶して「おれの筆も落ちたよ、なんてまづい作しか出来んのだらう」とヤケ少し起しましたが今日続きを書いて、すこしく気をとり紛らせました。

大橋家\*もがたびしして来てお気の毒のやうであります。戦争中進一社長に私どもはどの位利用されたか分らず（水谷準がその手先なり）、あれでは極楽往生は出来まいと、途中から私は進一社長は相手にせぬことにしましたが、どうやら最近勘定書がとびこんだらしいですな。

わが姿踏跟として秋風に

昨夜蚤に責められて永い間うつら／＼の間にひねり出した半夢中の句なり 句になつてゐませんが情だけが出てゐるやうです。主情は句に出してはいけないとの事なるもいかなりや。

好きな川柳は、よほど機嫌がよく余裕あり調子のよいときでない時半句も出て来ませぬ。

中川君の細君と子供二人けふかへつて来まして、大阪の粟おこしを土産

にもらひました。

十三

封書 半紙5枚 筆書

正史大兄 硯北

\*せんぷり 千振(せんぷり)。胃薬

\*ヂアスターゼ 胃腸薬

\*ビオカルク カルシウム剤

\*大橋家 雑誌「新青年」を刊行していた博文館の社主一族

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年8月24日夕(12149)

官製はがき ペン書

「末摘花」\*全巻を「推理川柳」の頭で読み直しました。その結果これぞと思う程度のもを僅かに数句得ました。今日はとりのりのお百姓が枝下ろしをやったので、すごい蚊群がわが部屋に殺到して方々螫され、ぶくつとふくれ、かゆい〜であります。今日もエグミ一件と少年原稿十枚ほど書いて、あとはもっぱら伸びてみました。仕事をすると気がしゃんとして、やっぱり気持ちよろしきも、今のところやはりフウ〜です。無理はせず、そして適当な刺戟となる程度の仕事は毎日やりたいものであります。今年は朝顔の鉢植をやってみました、なか〜むづかしいもので、この頃では日毎に花が小さくなっていきます。地面へ植えたものくらべて横綱と取的位の差です。もっとも鉢植といっても鉢に植えたといふことだけのことです。さっぱり面倒をみてやらないのですからムリありません。

\*「末摘花」 『誹風末摘花』。江戸中期に編集された川柳の作品集

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月25日朝(12153)

ルミちゃんの学校の件は、もちろんうまく行かれることと思ひますが、もうきまりましたか。

うちの近所にコソ泥横行。ご要慎なさいまし。(身体、平生に近くなりました)

十三

正史大兄 硯北

追伸 一昨日夕刻おとなりへはいりしコソ泥は、茶の間にて家族が食事をしてゐるとき、裏木戸より入りて、家のまわりを一巡し表の庭のところを乾してあったズボン三つ(主人殿は元少将閣下なり)を盗んで去りし由。

夕飯のおそい家では、この手でさかんにやられてゐます。うちも一度この手でやられました。爾来早くたべ終ることにしてゐます。

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月26日朝(12156)

封書 半紙7枚 筆書

八月廿六日朝

よく降りますね、蚤いよ〜跳梁いたしやり切れません。夜中に度々女房を起し、そして「やり切れん」と私がぶつ〜いへば、女房のいはく「いいわよ。蚤がゐない夏はさびしくて、よくないわ」といったらしい(小生は寝ぼけ耳で聞いてゐますので)。あとから考へると何のことやらわからないが、そのときは寝呆け頭で「女房のやつ、うまいことをいふわい」と感心。なにがなんだか分らないのよ デアリマス。昨日夕刻、食事前、どうも息苦しいのです。ふう〜いふ。例の呼吸困難なら朝にかぎった事。夕刻に来るのはをかしいと思つてゐるうちに忘れてしまったのです。それからしばらくして食事を知らせて来て、立つて行きましたが、茶の

八月廿五日朝

ルミちゃん三九度の大腸カタルに罹られし由、おかはいそうに。しかし悪化せずに御軽快に赴かれしは幸ひ。ほん〜を冷やしましたか、それとも水がまだ合ひませぬか。うちの子供いつか(去年)新宿へ出て、珍らしくアイスクリームといふものをたべ、その二人とも大腸カタルを起しました。今年はそんなことなしです。もつとも今年にはアイスクリームはフジアイスの御相伴したばかり。もう一軒渋谷の駅を出たところに「箱の絵」入りのうまいのがあるといふことで買って来ましたが、フジアイスのもの(これは本もの)をたべたあとには洗濯石鹼を嘔むやうな感じがしまして爾来アイスクリームの事を子供はいはなくなりまして。これは余談なり。ルミちゃんの家来どの大いに忠勤をいたしておりました。由、ほんとにようございました。脳炎ももう大丈夫。それに普通以上の家には出るものではないやう。村上先生の話に、脳炎らしいとよばれていつてみると二十一とか二とかの娘さん、いつも四十度を越えてみてさかんにうわごとをいふ。三日見たが、親は脳炎ならとどけるといふ。しかし先生首をひねり「いや、脳炎ともちがふふしあり」と。といふのは脳炎特有の昂奮状態がない。しかし他にも内臓その他に異常なし。熱は下らず。そこで虫おろしをかけたところ、これが的に当り、それから出るわ〜一昨日までに二十一匹下り、昨日は遂に三十四匹となり、熱は一昨日より平熱に下がったよしまだ〜出るでせうと先生の話。とんだ脳炎さわぎでありました。この話を、先生が夕刻の食事前に来て詳細如実に話をして下さるので、このところ晩飯が少々まづいのは困つたもの。けだし、こんなひどい蛔虫の害は始めてだと、先生おどろいての話です。

間に入り膳につくとタマ公が下に寝てゐるので、蚤にたかられてはと、私は蠅叩きを手にとつて猫を追ひ出しました。そして食事をしようとしたら急に苦しくなりました。確かに変調です。急に熱くなり、チョッキを脱ぐシャツを脱ぐしてハダカになりましたが、まだ気もちわるく、食事は見るもいやとなり、さかんに心悸昂進し来り、つぎは本格的の呼吸困難が来るかと思はれました。しかしそれは仲々に来ず、一歩手前とところで戸惑ひのてい迄。食膳の皆々心配。女房もたべず、ハラ〜してゐる。小生「大丈夫クック」といへど、どうも大丈夫でない。村上先生を迎へに出すべきかなどと考へてみました。そのときハハアと思ひ当たりました。小生一声を出して「分つたよ。これはコーヒーに酔つたんだ」。皆々分りかねるといふ表情。実は食事より一時間前村上先生来診、そのとき他より貰ひましたコーヒーがあり、これを出し、小生もお相伴しました。うまいコーヒーでした。これが小生の空き腹にはいりし事として今にしてこの変調を来たしたものと判定。実は小生その前に一度経験あり。それはラポール\*へ上陸の日の夕食に、うまいコーヒーがでてね、われ〜報道班員十五名大よろこび、もう一杯と従兵に所望して、宿舎に引揚げましたが、その夜一日床にいたが睡られない。私ひとりと思つてゐたら、あつちでもこつちでも「睡られないなあ」「こんなに疲れてゐるのに、どうしても睡れん」「おれもだ」わい〜いひ出して、「コーヒーのせいぢやないかな」と私がいへば「あつさうだ」と皆々同意。えらい目にあひました。おまけに間もなく実装となり(はじめて体験する空襲)敵は何回も来、照明弾をおとし、こつちは地上からどん〜ぱり〜撃つ、負傷兵がはこばれて来るといふさわぎで、その夜は完全に睡れずじまひでした。

「アダリンを持ってきてくれ」女房にもつてこさせて服用。けだし逆に

鎮静させやうというふつもり。これがきいたか三十分ほどして大分落ちつき、食事を始めまして普段ほどたべました。しかしあとで、やはり動くとどき／＼、目がまはり、足ふらつき苦しくなります。しづかにしてしばらく待つと癒って来ます。コーヒーの興奮作用とアダリンの鎮静作用とは丁度逆の同形となって居らず、喰ひちがつてゐる部分があるやうに思ひました。且つコーヒーの力の方がアダリンより持続性が長いと思ひました。更にアドルム半回量のもので寝まして、やっと普通よりやわるい睡眠をとりました。右は報告を。もちろん今日はなほりまして何でもありません。取引事税なんものが出ていよ／＼厄介。廿九日誌友の説をお聞きおきの上、あとでお教へいただきまし。

十三

正史大兄 硯北

\*ラポール パプアニューギニアの都市ラバウル。海野が海軍報道班員として派遣された

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月27日朝 (12159)

封書 半紙6枚 筆書

八月廿七日朝

ルミちゃん御快方へおむかいのよし、安心いたしました。当分ご要慎のほど祈ります。水ちがひで腹をこわすといふ事はよくありますこと、これは今更申す迄もなし。いろ／＼と新しくご支出殖えます由。これは当然だし、そしてよくなる事ですから結構と思ひます。かはりにお稼ぎになる事です、東京に居れば割のいい仕事、気に入った事を選択できますし、稿料も思ふやうに交渉できるし、仕事は山ほどあり、購入費に愕かれるのもここ一か月の間だけ、あとはすつかり忘れてしまふほど気分

に懸らなくなりすよ。夢御心配に及びません。頭脳使用のリンシヨクとは吾が意を得たるおことば、全くさういふ方針でやらない限り、いつ迄たつてもつまらん仕事に追はれてふうふうであります。(只今少年連載十六種あるを如何にせん) せめて十種に切りつめようと心がけてゐるのですが、どうしても書かなければならない義理のものなどが実状

現はれて、いつの間にかこんなに殖えてしまふわけ。更に縮少を覚悟し、実現を期してゐる次第です。江戸川さんは、客観的には書かねばならない事情にあるらしいが、しかしやっぱり今年に遂に書かないであらうと私は思ひます。いつもいふとほり私は「陰獣」迄の愛読者です。その後のものは魅力を感じません。しばらく頭を使はないであて、昨日必要に迫られ筋を考へはじめたら、たちまち長篇のが二つぼろ／＼と出て来ました。こはくなくて、そこで袋の口を締めました。この分なら、まだ／＼ネタには困らんですみさう。頭を休ませておいたご利益を知りました。(廿九日は失礼します、あしからず)

十三

正史大兄 硯北

追伸 うちにはまだ金の余裕あり、もしルミちゃんの件などで至急に入用なときに御間合でなくばさう仰有つて下されば即時御用だていたします故御遠慮なく。右為念。

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月28日朝 (12160)

封書 便箋6枚 筆書

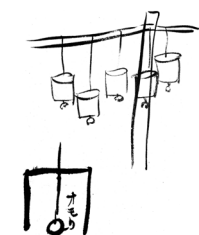
八月二十八日朝

御疲れはもう癒りましたか。あれも引越疲れの一つでありませう。私は病気疲れ(病気が癒ってから起る疲れのこと)但しこれは私のアイデア

で、本当にさういふものがあるかどうか弁(へず)ももはや癒りまして、今日あたり本調子の身体になって来ました。昨日は午後二時間ほど仕事をしました。今日は四時間位するつもり。となりのお百姓田中さん(昔は植木屋さん)の畑のおかぼがよく出来ました。そこで鳴子をつくりました。縄を長くはり、家の前で引張るととがら／＼鳴るといふ仕掛。ところが、これがよく鳴りません。カンヅメの空罐を利用してゐますが、下図のやうに出てゐて、ゴマ



メの歯ぎしり位の音しか出ません。少しアドヴァイスしてあげようかと思つたりおせつかいかなと思つたり。それにあまりよくが／＼鳴るやうになれば、こつちの仕事のじゃまにもなることだしだのと考慮中。



(私の考へでは(一)罐は一つづつ一カン位の間隔で左右にはなして下げる(二)罐の吊紐は不同にして、しかも隣合つた罐はどの部分かであつて、(三)罐のふちにあたるやう、罐の中心からひもでおもしをつけること。) ぐらい自信があるやうですが、これは去年停電つづきで、玄関のベルが役に立たず、そこで空カン利用の鳴子式ひっぱり信号キを作ったときの経験によるものであります。大阪高島屋が大衆雑誌(季刊)を出すとかで探小を頼みに来ましたが、稿料はいくら出してくれると聞けば、大体八百円から千円あたりでいかでせうといはれました。いよ／＼千円稿料がころがりこんで来たわけ。但しよろこぶのはまだ早いかもしれせん。季刊ものといふのは単行本に準ずるもので、一番儲けがいいと思はるんですから、もっともらつてよろしいと思ふのですがね。(只今もゴマメのハギシリが聞えました。

あれをきいてみると煎豆がたべたくなります。どういふわけですか)うちのハナレをと／＼買ひました。十二万円です。八、六、四半の三間。これにてやうやく居住を脅さるゝことなく、家賃といふものを払はなくてすむやうになりました。一年前に買へば七万円で売ってくれる約束なりしもの。建築制限が緩和すれば少々改造して住みよく使ひよく能率よくいたしたい計画であります。(計画はなるほど楽し)。昨日「獄門島」の終篇の一つ前のを拝読。楽しいことござりました。

十三

正史大兄 硯北

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年8月29日朝 (12162)

封書 便箋9枚 筆書

八月廿九日朝

○ヨコセイドクトルの診療指針ありがたく拝承。拳々服膺(?) いたしました。今日あたり日がけりたる頃を、麦藁帽子をかぶって松陰神社前あたり迄出懸けてみませう。昨日は遂にピラミドン一服ものまず、全部平熱、その他の病状も消えましてたしかに平常状態に復帰いたしました。七八両月間の永きいたつき、此所に漸く消散いたしたる次第。主治医も曰く「あとはたたくさん喰べる事です」友ドクトルのおことばを体して新秋と共に、やせた身体に少々肉をつけるやうに心懸けませう。○廿九日の御会二十人とは大盛会ですね。それにしても主客両方おつとめのこと、なか／＼たいへん。○捕物十種とはこれまたたいへんなれど、此の方は「書き損じ」(カゼガフキマシタノデ) 大兄のお腕のふるひどころであり、おやりになれば伊賀越の十人斬りほど骨が折れますまい。さるにても探小すたつて捕物復活とは江戸川老を始めニューフェイス 大家、諸

氏も百考せられて然るべしと思ひます。○内田百閒先生\*の件は、大兄にしてこの事あり得るなりと、敬意を大いに表明します。(わしも一度編集者になりたいと、今さう思ひました)百閒先生の著者はかなり買ひこんでゐます、そしてその人となりは十分に心得、そして羨しく思つてゐる次第。夢声老と共にいつ迄も生きてゐてもらひたい人の随一。しかし百閒先生、この頃あまりお書きにならないやうですが、私が不勉強で見つけ得ないのでせうか。○うちの女房の着物の件では、この十年ばかり女房まかせといたし小生はタッチいたしません。それ迄は相談して買つたり、見立ててやりし事もありました。しかし十年ほど前よりは、買物も不自由になり私も忙しくなり、よつて勝手にしろといふことになり(女房の姉が京都のごふくやと取引してゐたので、これに買つてもらつた事もあるやうです。しかし戦災にてこの筋はだめとなりました。今は近所の奥さんを通じて買ふことがある様子)。とにかく私は収入をだいたい二つに分けて、一半は女房の貯金にして、これにて生活費等(きもの類も)みんな支払させ、そして「その方は全部使つてしまつていいよ」と申しわたしあり、もう一半は私の名の貯金にしてこれは税金準備金にあててあります。しかしもちろんこの方はそんなに必要がないので、臨時の大きい支出と、私のこづかひなどはこれから出して使ひます。私の方が殖えすぎると、下局が注意してくれ、定額預金になほしたりします。又自發的に大きなものを買ひます(「必要経費」項目のものを買ひます。(家、本、本ダナ、受信機 家具、その他の工事など)かうして分けて、私の方は普段は忘れてゐることにしてあるので、有事の際しらべてみると意外にたくさんあつたりしておどろくことあり、納税のときもまごつかなくてよろしいのであります。心細きことは女房の方の貯金が枯渇してきたと訴へてくることで、そのときは私の貯金の方から助け水を出し

ます。しかしこの一年ほどはそんなことが起らなくなりました。これからは起るでせう。病中永く書かなかつたし、いまは本の再版新版が一向このところ出ませんので。いよ／＼つまつてくれればまたそのときやり方を考へるばかりのこと、心配することはありません。そこで只今「来客ありて筆中絶」女房は勝手に着物を買つて着てゐるわけ。たくさん持つてゐるわけではありませんが、又大したものはないですが実用になるものはだん／＼揃へてゐるやうです。尚、貯金帳へふり分けの件ですが、その都度二分はいたさず、小切手など適当にたまつたときに、適当の高にべ切つて、こんどは「私」の方へ、こんどは「女房」の方へと、大体似よつた金高にして預けいれます。現金の場合は、一ヶ月間ハコの中へためておいて、月がかはると出して二分します。或ひは二分しない「第三準備金」として保管しておきます。まアこんなことでいい加減にやつて居りまして、気をつかふこと余りなく、楽であります。子供のこづかひも、子供の買ひ物も、すべて女房が管理しますので、私は何も煩はされず何にも知らず。但し相当大きい買物だとか、女房が首をひねるやうな買物については相談をもつて来ます。「お父うちゃん、自転車買つていい」「お父うさん、バイオリン買つていいですか」などと、男の子の相談にかぎり、女の子のことは女房が採決。あらひざらし(楽屋の中をごらんに入れました。ごめん下さい。

十三

正史大兄

硯北

\*内田百閒先生 小説家

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年9月1日夕(12163)

官製はがき ペン書

今日は御見舞をありがたう。もう平常に近くなりましたから御放念下さい。はじめて葡萄をおいしくいただきました。ありがたう。庭の朝顔も末になり、鉢植ゑの分はいよ／＼縮小してあはれとなりました。水と肥料の効果がはつきり分ります。地面に植ゑた分はあひかはらず大輪をたくさんつけて、紫だけでも三十位をかぞへる朝あり、来年はもっと親切に作つてやりませう。コスモスも一輪咲き出しました。只今はサルビアが女王といふところ。白いバラと白い水蓮も一輪づつ咲きました。今日より長男、二男、三男の学校行きが始まり、家内の起床が一時半ばかり早くになりました。私はおかまひなしに八時ちよつと前に床を放れます。

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月4日午(12166)

封書 便箋4枚 筆書

九月四日午

日光浴のこと御教へ下さつてありがたう 一つ規則正しく十月頃からやつてみませう。冷水摩擦は毎朝やつてみます。もう三週間ほどつづいてゐます。気持よろしいので、つづけてやるつもりです。外に女房が生姜湯マサツを手と足とに毎日三回やつてくれます。これも始めてから二週間位になりませう。

咳止めぐすり、目下赤いものも出ないところから、主治医はやめにし、そのかはり祛痰剤を飲ましてくれてゐます。これにてタンが出が楽になりました。しかしセキの回数が多くなり、昨日今日あたり少々うるさくしていけません。とにかく咳止めを呑んでみると、急に大きな執拗な咳が出て苦しいし、赤いものにははる虞れがありていけません。只今のやうに祛タン剤で凌ぐ方がずつと楽であります。

他の諸症状はすべて消滅し、食欲も少しく出て来ました。

仕事は、相変わらずスローモーションです。今月一杯はべ切を気にしないでやるつもり。

この数日仲々暑くなりました。昨日は三十二度にもなりし由(うちでは三十度位)残暑もきびしい方が豊年なのでせう、七八月のやうに暑かつたり涼しすぎたりの変化多い天候はいけません。毎日暑いのならずつと楽であります。まあぶら／＼秋を迎へませう。黍が高くなりました。カメラを使ひたくなりました。

十三

正史大兄

硯北

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月5日朝(12169)

封書 便箋5枚 筆書き

九月五日朝

なんたる暑きでせう。昨夜は寝苦しくて焦熱地獄へ宿泊いたしたやう。今朝は蒸し暑く、たまりかねて今年の夏はじめての猿股一つの裸体となり、ひげをすり、食事をいたし(きうりと茄子のぬか漬にてお茶漬サラ／＼ではなく、流し込みまして)、それから今も同じ姿で(失礼ながら)この手紙を認めて居ります。○只今自由出版を経て高著「黒猫亭事件」拜受。ありがたうございました。どちらもはじめて拜見するやうに思ひます。楽しみです。○女房も今日はへたばり、大頭痛と胃袋気もちわるしと珍らしく寝てしまひました。しかし大したことはありません。○昨日は仕事をしようとしたが、この猛烈な暑気の中にして、又身体をそこねてはと仕事は中止。終日寝床に伸びて「大南北脚本集」\*を読み、東海道四谷怪談では涼気を満喫しましたが本を描くと暑いこと

暑いこと、芝居の平土間の熱気が急に感ぜられまして逆効果なり。カミ\*、ウエルズ\*、初期の乱歩、大南北、共に奇想天外派の天才。われに才あらば斯の道を行きたきもの。○先日女房イスを日本橋の緑屋へ買ひに行つて参りましたが、本日の新聞で見ると社長さんが贈賄で検挙。女房曰く「ナルホド、椅子にはつてあるあのキズは、さういふ筋から出たものにちがひないわ。今どき有る筈がないキズですもの」と感心。○客に又会ひ始めましたが、会へば頼まれ仕事を断り切れず、客去りしあとにて、ちえツ失敗つた。おれは甘いよ。○自由出版の例の高利御礼の拂ひ二カ月ほどたまり、拂ひわるし。印税しかり。火の車と見えます。あなたも御催促が肝要です。貸金を先月お回収なすつてよかったです。○庭の朝顔を一群残して二群とりはらひました。それから雑花苑の手入れも昨日女房がしました。その為め日射病を起したのかもしれない。

十三

### 正史大兄

\*「大南北脚本集」 歌舞伎狂言作者・四代目鶴屋南北の脚本集。春陽堂刊の「大南北全集」か

\*カミ、ピエール・アンリ・カミ。フランスのユーモア作家

\*ウエルズ H・G・ウエルズ。イギリスのSF作家

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年9月6日午(12176)

官製はがき ペン書

ボールペンとかいふものが流行つてゐるらしく、それをお使ひになつた手紙が多くなりました。江戸川さんまでも使つて居られる。しかし拝見したところ、みなさん書き辛く見え、字のかすれなど気になり、インキの色も気になりますね。憑將軍の奇禍\*はどうです。ジユダノフ氏\*の急

病死はどうですか。ミステリーか非ミステリーの不幸か、とにかく世の中には話のタネがつきませんね。平沢氏\*の筆蹟は本格的に書道習つた立派な字。そして帝銀犯人が小切手の裏に書いた「板橋云々」の文字もこれまた頗る達筆であり、本格にお習字をした筆蹟。ここに於て小生は、これは決定的と考へられる可能性の強きことを感じました(マワリクドイイイカタよ)。暑さにやられて昨日からちよつと熱発。しかし大したことはありません。起き慣れてもうふう／＼いはなくなりありますがいいです。では又

\*憑將軍の奇禍 中国国民党の馮玉祥が船上火災により死亡した事故

\*ジユダノフ氏 ソビエト連邦政治家のアンドレイ・ジダーノフ

\*平沢氏 帝銀事件の犯人として昭和23年8月21日に逮捕された画家の平沢貞通

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月8日朝(12174)

封書 便箋5枚 筆書

### 九月八日朝

本位田氏のひととなりいよ／＼うれしい限りにて、先日椎名町に新居を建てられしを以て、さては龍になつて天上せられしかと思ひしにあなたのお手紙によると依然たるホンイさんでありまして、まことに至宝といいたし珍重すべき御仁。しかし鈍ならず、ズボラならず、市井に活躍して俊敏なる士にして、このヒューマニズム。大臣にしたいもの。事ムや社長より、よほどつてつけであり、世の中は濟度されませう。

ウダル先生\*二十の扉の券のことは、あれは到るところへまき散らして行かれるので、片っぱしから忘却するのせう。大いに催促せにやアキマヘン。うちの子供たちも、もうアキラメトリマス。

水谷名事ム長のことは(名幹事の方がいいかな)わたくしも夙に認め、

至宝と尊敬するところ。「探偵趣味」\*や「新青年」の編集当時の持続力を今日尚氏が持つてゐるならば「探作クラブ」\*に於て大いに活躍御

世話をねがひたしと思ひます。しかし江戸川会長と同じ方向を指してあの会をやつて行かうといふ気ありや否や、それは事前調査を要しますね。小生好調、赤いものも消失。昨夜は寝そびれてアドルムといふ催眠剤のみました。甚だよくきく新薬にしてシオノギのもの、あなたのチュウウの効果に必敵すると思ひます。六時間何も知らずに熟睡しました。過日御来宅のときの記念写真のうち、スーパーセミ\*でとりし分はまだ現像しませんが、コンタクス\*の分は現像せしところ全部(フィルムの全部)が露出不足で、うつつてみません。フィルムがわるいのか、先日このコンタクスのシャッターを直した結果、シャッターが正しい時間を切らないのか、その他の原因か目下取調べ中なれど、一度失敗した撮影はとりかへしがつかなくて、相済みませんやら残念やらず。あとのスーパーセミの分は、たいていまちがひないと思つてゐます。

明日九日午後十時にカゴシマから孫\*がかへつて来ます。

### 正史大兄

硯北

十三

\*ウダル先生 大下宇陀児。探偵小説作家

\*「探偵趣味」 探偵趣味の会の機関誌(大正14年9月〜昭和3年9月)

\*「探作クラブ」 「探偵作家クラブ」会報。昭和22年に発足した日本探偵作家クラブの機関誌

\*スーパーセミ、ドイツのツァイス・イコンが製造したカメラ。スーパーセミイコンタ

\*コンタクス ツァイス・イコン製のカメラ。コンタックス

\*カゴシマから孫 海野の長女朝子の長男・育郎

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月9日夕(112178)

封書 便箋4枚 筆書

### 九月九日夕

御手紙拝謝。自由出版社へ奥様が行かれし由。金づまりは此社にかぎりし事はなきも、てまへのところも金詰りでございどうぞしばらく御待ちをでは、こつちが利用せられるやうで、油断はなりません。いよ／＼嚴重に、検印引替主義、原稿引替主義たらざるを得ず。さりながら、この時世、稼げば稼いだだけ三重四重の税金にまき上げられてしまふので、私はこのごろ最小限に働き、最小限に出版し、時勢のよくなる日迄消極的にならうかと考へました程。しかしそれでは世の中に貢献するところがたいにうすくなるので(アヤシゲなる大衆小説やコードモものを書いて、一時の慰安係をつとめてゐるにせよ)、やっぱり大いに働き、ぢやん／＼原稿もかき、本も出すべきであらうと思ひ直しました。しかれども、さはさりながらでありますよ。本日睡し。暑くてやり切れず。遂に意を決してコーヒーを入れさせ、さつき目をつぶつて、えいっと呑み乾しました。おいしかった。只今シャツキリいたして来まして、筆もいつになく元気に調子よくすべります。今日は心悸昂進起らざる見込ナリ。延原さんもいよ／＼世田谷住人となられし由。長男と同じ年級に須美さん\*の坊ちゃん\*が居まして、本日その事を晴彦が聞いて来ました。大兄こんどはよき原稿用紙を手に入れられましたね。庭にサルビアひとり咲き競ふ。

西田さんも過日「此の秋は、横溝君のところへ行つてしばらくイソーローさせてもらふ楽しみあり」と手紙にありました。老を元気づけたきものです。

十三

\*須美さん 不明

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月11日午(12185)

封書 便箋5枚 筆書

九月十一日午

遂にどうにも抜きさしならなくなつて、昨夜は夜業をいたしました。当分夜業をつづける必要あり。さうでないといふと、どうにも始末がつきません。昨日は結局二十四枚書いたことになります。今日はいかがなりませうか。夕方までに廿五枚ものを渡す約束のところ、只今一枚をかいたるばかり。しかも午後は「世界少年」\*の豆記者たちがやって来て、私との会見記事をとることになつて居り、気が気でなし。いや、「気が気でない」のは、もうやめる事にしたはず、「どうでもなれ」で行きませう。

乾君、「宝石」を叱りとばし、「参りました」と昨日武田君が来ての話。乾君の頭上へとばした由、「参りました」と昨日武田君が来ての話。乾君の説は大いに正論でありまして、小生普段より支持を惜まざるところ(小生も氏から叱られる一員なれども、それはどうでもエエです)、土曜会\*の江戸川臭紛々を排撃することの第一者である乾君の説を御参照なされたく。

探小雑誌「仮面」廃刊、「黒猫」\*も終刊号が出ました。もろくの探小雑誌が相ついで波間に沈んで行くのを見るのは愉快であります。今こそ探小の本質を看取せよ、と新進探小作家たちへも申上げたい。しかし、しつかりした探小雑誌をせめて二つ三つは持ちたきものです。これまでの如き乱立は、始めから不自然でありました。さるにても理解ある資本家と、ねばり腰の編集長は居ないものか。居りませんかねえ。

敗戦后今迄のやうな「新青年」でうろうろされてみたんでは、私たち「新青年」出身者は、甚だ寂しく、不愉快でありやり切れませぬ。原稿の一紙と共に、紙もかへること。あのいやに手にこはい厚い紙は感じがよくありません。

残暑といひ、本年の猛暑といひ、東京物語の御苦労といひ、大いに影響して居られませう。もっとも明日あたりより涼しくなるさうですから、そしたら御元気になる事請合。それ迄は畑の方のお仕事を楽しくなさいます。小生今朝ははじめて「これが心悸昂進かいな」と思ふものを体験しました。約二三分間。どきどきして来て、手足少しく冷え、額に汗が出て来て呼吸苦しくなりました。丁度食卓について、これから箸をとらあげようといふ直前のこと。もちろん箸はとらず、窓を開かせ、着物を脱いで上半身ハダカとなり、不安の心のうごきを見まもりながら、しばらく耐へてみましたら、間もなく治りましたが、それから飯をくひ出してからも二度ばかりその前駆と覚しき手足冷えて来て腹工合おかしくなる事ありしも、克服しました。七八の両月の病臥と夏の疲れと其他の事相にて、このところ神経が細くなつてゐて、何でも気にかかり(特に病気や身体のこと)、それでこんなことにもなるんだと思ひました。今日よりは体温計をしまつてしまひませう。病気のこと、脈のこと、呼吸のこと、足の細り、顔のヤセ、熱、タン、せき、息切れなど、みんな忘れてしまひませう。戦争が終る迄は、自分でも自信があつたほど克己心強く、太々しかったのですが、その後虚脱やら咯血やら以来弱気の底まで落ちこみ、どうやら今がそのドン底に在るのではないかと思ひます。この辺で立ち戻りませう。散歩もやりませう。家に引籠りばかりはいけません。よろしく又お叱り下さい。

昨日は二十枚ばかり書きました。今日もこれより二十枚書かうかと思つ

旬刊ニューズ\*増刊の似顔は、人相わるくて、なるほどこんな人相だから、あんなひどい血みどろを書くのかと、読者を納得させる魂胆か。これは写真のみによりたる画なることの欠点。似顔は本人を見ないで描く手はないと思ひますが如何に。松野さん\*の描く似顔エ(水谷準の油エはカシン致さず)のよきなどといふものは、こんどの「旬刊ニューズ」のそれに比べると国宝級ですね。これより午飯。ではまた。

十三

正史大兄

\*「世界少年」世界少年社発行の少年雑誌。昭和23年11月号に「海野先生を訪ねて世界少年豆記者」の記事が掲載されている

\*土曜会 探偵作家たちの親睦会。探偵作家クラブの前身となつた

\*「黒猫」 イブニング・スター社発行の探偵雑誌

\*「旬刊ニューズ」 東西出版社発行の雑誌

\*松野さん 松野一夫 画家。雑誌「新青年」の表紙や挿絵を手がけた

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月13日朝(12195)

封書 便箋8枚 筆書

九月十三日

お手紙三通本朝拝受。豪華版であります、多謝。おさとしの條々深く感謝。原稿用紙の事もたしかにありませう。昔のやうな舶来上質印刷機用の原稿用紙はいつになつたら手に入るものやら。とにかく極力さがしてゐます。そしていいものを見つけたらたくさん作りたいです。しよつちゆう変るのはいけません。大兄方々からの長篇依頼責めのお形。「ロック」はどうかと思ひますが(ぼくは成田氏といふ人物が嫌ひ。私行の点に於ても)「新青年」はぜひともお書き下さい。「新青年」の名を持ちながら、

て居ります。書いてりや、へんな症状は起らんですから、そこにカギがある筈です

正史大兄 硯北

十三

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月14日朝(12196)

封書 便箋6枚 筆書

九月十四日朝

昨日お知らせしましたる心悸昂進症の件は、夕刻になつて主治医が見えたと報告しましたところ『それは心悸昂進ではありませんね。額から冷い汗が出るなんてことは心悸昂進ではなく脳貧血です』と指摘されまして、その臨機手当を教へられました。右につき訂正いたします。女房いろくくと又心配し、いろくくと気をつかふので可哀想やらやり切れぬやら。ところで今朝は、脳貧血まで行かなかつたですが、その手前あたりまで行きました。そして一つの発見をしました。

つまり、この症状は、冷水摩擦に原因してゐるのです。昨日はさう、今日もさうでしたが、このイヤな気分は湯殿で冷水摩擦を了へた直後にはじまるのです。あれは、この二三日相当水がつめたくなりましたので、ヒヤリとします。するとゾーツとする。それから始まるのです。

昨日と同じ筋道で、今日もやってみました。そして細心の観察をしながら、ひげそり作業、歯みがき、冷水マサツ作業、髪の手入作業と注意して行くうちに、冷水マサツで上半身の部を終へたところあたりで少しおかしくなり、下体にかゝると、いつもなら爽快なのがイヤな気がしました。そのあとがいきけません。まだ冷水マサツをするだけの体力がないのでせう。

明日は、この冷水マサツをやめてみます。その結果気分が悪くならなけ

れば、今日得た結論が裏書せられるわけでありませう。

結局脳貧血で血管がひらくのと同じ現象の軽いのが、冷水マッサージの結果生じるのだと思ひます。なにしろ一日中で、朝起きて食事を終る迄が、此頃で最も不安でイヤな時です。それを過ぎると何でもないので、又、つまらん病気咄をしました。昨日より検温を廃止し、夕方は久々に松陰神社前の本屋まで力行しました。女房あやぶみましたので、長男をお伴につれて行きました。果して何事もなく無事。たゞ少タイキがハア／＼といったばかり。あなたと共に、秋冷を迎へて元気になりませう。

正史大兄

十三

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月15日朝(12197)

封書 海野用箋3枚 ペン書

九月十五日朝

○先日御知らせ下すった『毒薬と老嬢』\*を買って来まして、読み終へました。いろいろの意味に於て面白く感じました。私の好きな洋映画を居ながらにして観た感じもうれしく、又この作のスリリングな盛り上りと、こらへ切れないをかし味とが、たいへん私をよろこばせました。あなたに教へられましたので、これからはこのMPL\*の発行に気をつけておませう。ありがたうと、感謝を一つ。

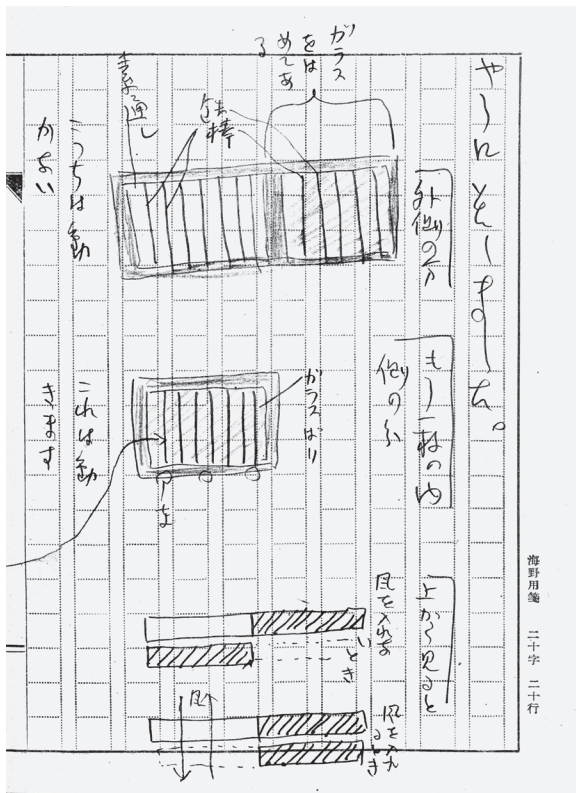
○今朝は、昨日の結論に基き、朝の冷水摩擦をよしてみました。しかるところ身体の調子は一向に悪化せず、脳貧血も何も起らず、鼓動も早くならず、極めて平常でありました。これにてこの問題すっかり解決いたしました。しかし冷水摩擦をやめなければならぬといふわが身の落ちぶれたる健康についてさびしき想ひが残るばかり。

○このごろうちでは、台所を少し改造いたしました。その結果、調理台

が一つ出来ました。そこで子供が食事をするやうになりました。例の廊下図書室に、閲覧用のこしかけが二つあるんですが、これ二つと、もう一つ小さい椅子をもちこんで、腰をかけてたべるこゝとが大流行。たいへんごほんがおいしいさうであります。もつとも、味噌汁にすぐ手がとゞくところにあつて、温いのがたべられるし、冷蔵庫もあり、その他食べるものがみんな手近かにあるので、便利でもあり、好き勝手にくへるからでせう。○台所があまり暗いので、上の方に窓をこしらへました。たいへん明るくなりました。空気ぬきの役目もいたします。そしてこれに入れる格子戸を、次のやうにいたしました。



海野用箋 二十字 二十行



なにしろこれが高いところにあるので、いちいち夜カギをかけるのが面倒ゆえ、ちよつと工夫いたしました。このやうに作らせましたら、家内からたいへん喜ばれました。「締め金不要。この鉄格子は不用なんです、はじめに大工がこしらへて来たので、それでそのままつかふことにしました。私の考へたのはとめの一部を、同じミゾにはめこむことだけであります。」部屋の掃除で、おひ出されます。これにて。

正史大兄

十三

\*『毒薬と老嬢』昭和23年に日本で公開されたアメリカ映画のシナリオ対訳(世界文庫刊)

\*MPL『毒薬と老嬢』は「モーション・ピクチャー・ライブラリー」シリーズの1冊として刊行された

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月16日朝(12198)

封書 海野十三用箋2枚 ペン書

九月十六日朝

水道御開通、おめでとう。どんなに便宜なこととせう。お仕事にハリキリ、おめでとう。じゃんじゃん秋の収穫を祈上げます。もちろん豊年うたがひなし。

私も今のところ、毎日二十枚近くを書きとばしてあります。連載の稿債、日に一つづつ解消して行くので、肩もかるくなって来ます。楽しい分と、のつびきならぬ分から書いて行きます。いいものを書いてあげようと思ふ先の分は、だんだんとあとまはしになり、先方より恨まれること甚だしいですが、どうにもなりません。

本朝も冷水マッサージ取りやめ。よって何の異状も起らず、けろりかんの天下泰平であります。

昨日夕、主治医来診ありて、血圧を測ってくれました。百十です。110です。最低が65です。

血圧が低いから、脳貧血も起りやすいこと。しかし血圧の幅がひろいから、心臓は丈夫で、余裕大きく、長生きをさせよう(心臓だけに関して)とのこと。大いに気をよくして、晩めしのうまかったこと。(私も、こういう他愛のない人間です)それよりとみに元気を加へまして、もりもり仕事をしようと思つてみます。仕事をしてゐると、心悸昂進的なことも、呼吸困難的なことも起らず。

電話はぜひおつけないまし。「必要経費」の項目でちゃんと処理がつかます。昨夜は停電がありました。あれ位の雨ですぐ停電とはナサケナイ。今夜は大荒れとの警報ゆえ、今朝から各ホームライトを急ぎ充電を始めました。これさへあれば、大安心。では又

正史大兄硯北

十三

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月17日(12199)

封書 便箋6枚 筆書

九月十七日

台風一過、けさの空のうつくしき、爽やかさに風が鳴って日ざしも清らか。いい秋日和を迎へました。昨夜はどうなる事かと、パロメーターの針がぐんぐん下つて行くのを気にしてました。七百二十ミリまで下りました。(今朝は七百四十ミリに回復) 低気圧降血をやらすかと様子を見てみましたが、左様なこともなく無事に朝を迎へました。

パロメーターなんか持つてゐるのはナマイキですが、これは今から十年ほど前銀座の夜店で掘りだしたものだ。いはゆるアネロイド式\*のもので、ドイツのスタアガット\*製で五十円でした。その店では、その後オルグー

ルを買いました。これも五十円であったことを憶えてみます。他の店で二十二円五十銭で買った鳩時計と共に、私が銀座で掘りだした三逸品(?)であります。この三品とも、いづれもウゴキますところが、私の好みであります。

停電頻々で、ホームライトの活躍は久しぶりです。今日も充電してやらねばと思つてみましたところ、早くも只今停電となりました。停電をするのが大好きな配電会社であります。

昨日嵐について、新文庫社\*の方が見え、「横溝先生から、ぜひおたづねするやうにといはれました」との口上で、嵐の中のことであり、例外の面会をいたし、十枚犯人探しの原稿をひきうけました。先づ報告をいたします。(このごろは、原稿の来客にお目に懸らないことに慣れてしまひました。なにしろ楽ですし、仕事のジャマがされないでいゝです。)目下連載の峠を越えかけてみます。幸に肩も凝らず、他の病状も消滅し、大兄予言のとほりハツラツ(とまでは行かないにしても)たる秋を迎へられさう。仕事はますく減らませう。

十三

正史大兄 硯北

\*アネロイド式 空気圧によって気圧を測定する機器

\*スターガット スピーカーケーブルの型

\*新文庫社 「新文庫」を発行。海野は同誌23年12月号に「隠れ湯の殺人」を発表

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年9月18日正午(12200)

官製はがき ペン書

百枚もの、スタートをお切りになりし由。フレ、フレと、応援をいたします。四十枚を一日での御力漕、うらやましいことあります。

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月22日(12202)

封書 便箋5枚 筆書

九月廿二日

今日はお祭\*で、太鼓の音がしてゐます。風の間、わっしよいゝの声も聞えます。昨年はおみこしがうちへ来て面喰ひました。今年はその備へて赤飯、煮染、それに合成酒を少し用意してあります。何とかかとかいふものの、秋祭は一年に一度の、土地の若い者や子供の楽しみですから、楽しく盛大にやらせたいもの。

萩が咲きました。女房の好きな花の一つ。梅もどきが赤くなりました。

只今孫がばたくと駆けて来て顔を見せて行きました。頬つぺたに紅をのばし、鼻の先にお白粉をぎゅつと引いて、よろこんでゐます。うちの小若です。

浅草に永いことゐましたが、あの頃は盛大でした。いづれあんな風になる日も来るでせうが三年先か四年先か。旬刊ニュースのために「探偵川柳抄」\*を書きましたが、まだ本格的に調べてないので、読みかへして不満を覚えますが此度は此の儘出します。

只今客来(中部日本新聞の小村氏)につきちよつと筆をおきます。

「婦人とこども」\*に三枚十回の連載冒険ものを頼まれました。十回ならと引受けました。知つてゐる人でもありますので。原稿料のことはいはず。ここはまともに呉れますので、委せてみませう。

偕成社が「怪獣男爵」を頂いたのでたいへん悦んでゐました。次は東光出版社へ書いて下さい。

おみこしの声がだんだん近くなってきました。いつも雨ですが、今年は本当にいい廻り合はせです。このへんにて今日は失礼。

小生も今日と昨日とで四十枚をやつつけませう、二日がかりですよ。今日も快晴。やつぱり気持ちがいいです。前歯がブラ〜となり、厄介です。三枚の歯がブロックになり、両端は生きている歯を利用して金をかぶせてあるのに、その一つはとう〜ぬけてしまひ、他方は半分ブラ〜。片足の綱わたりといふわけ。そのうちお目にかかったときには、前歯のないおじいさんとして大兄を笑はせることになりませう。因に小生歯医者は大々嫌ひであります。只今の弱体では、歯医者通ひも出来ず、当分ハヌケのまま暮すほか方法なしと思はれます。ローライコード\*U型は先日三万円の呼値のところ、今は三万五千乃至四万となりし由、インフレはまだ滔々!

\*ローライコード ドイツ製二眼レフカメラのモデル名

海野十三 横溝正史あてはがき 昭和23年9月20日(12201)

官製はがき ペン書

日曜はめづらしい客が相つぎて来宅。夜まで大いに楽しく暮しました。私の如き者を、はるばる見舞つて下さるお人のあるは、なんたる果報者でありませう。ちやうど三男の誕生日で、お客さんのひとりを加へて、にぎやかに祝ひの膳をすすめました。但し小生二日前より風邪をひいてゐて小熱あり、えらく厚着をしまして、それでゐて寒むがってゐました。風といふやつを私は大いに嫌ひ、且つおそれます。大兄はしからざる様子。うらやましいことです。藤の寝椅子を一台買ひました。古ものです。三千八百円なり。なかなか寝ごちよろしきも、ぼくの好きな横になって、ゆでたえびのやうになつて寝ることが出来ないのがイカンですが、そんなことは注文するのが無理。普通の寝床も敷き、あつちへはいつたり、こつちへあがつたり、ぜいたくなことです。みなさんへよろしく。

十三

正史大兄 硯北

\*今日はお祭 かつて9月21・22日に行われていた若林稻荷神社の秋祭りのこと。現在は「若林鎮守三社例大祭」として9月第2土日に行われている

\*「探偵川柳抄」 「旬刊ニュース」 昭和23年11月号に「江戸推理川柳抄」を掲載

\*「婦人とこども」 「婦人と子供」。中部日本新聞社発行の雑誌

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月23日午後(12203)

封書 便箋6枚 筆書

九月廿三日

昨日のおみこしには百人ばかり町内の若い人やオッサンや小若が来まして昨年よりもたいへんな賑やかさ。用意しておいた酒、こはめし握りにしめ、するめなど、たちまちきれいに捌けてしまひました。

おみこしの帰へりしの一時間半のち、門前に蛇が居ると、うちへ来て、うちからかへる私の友人(河野廣中の息子、技術者)が見つけました。このあたりには珍らしい出来事。トグロを巻いてゐたさうで、子供が追つかけてゐたやうですが、殺したかどうですか。小さい山かがしであつたらしい。どうして何年ぶりに蛇が出て来たか分りませんが、気象の方から寺田式に解く方法もあり、捕物帖式に解いてもおもしろからうし、如何ですな。

昨年の昨夜は、となりの農家の五男が、見張小屋の中にて青酸カリ自殺を遂げ、昨年の今朝はさわぎでした。

昨日この家へおみこしが入つていったのに、オヤヂさんはそれを迎へようとせせず、うちの垣根の近くの大根畑の手入れに熱中してゐるのでふしぎと思ひましたが、あとになって、さうさう、昨年の今夜はと気が

つき、オヤヂさんの心中を図って同情いたしました。

本位田オッサンの親切は今にはじまったことではないので今更感心するのもおかしいわけですが、国宝ものでありますな。ニハトリは、猫よりも犬にはいりこまれるおそれあり十分しつかりした小屋になされたく、特に犬は土台のところを掘って大きな穴をこしらへて入りますから土台のところは土中深く厚い板をうづめ、しつかり防御をしておくことが肝要と思ひます、これはうちでの体験です。うちの子供は映画は渋谷で満足してゐるやうです。もうすこし大きくなったら、それでは満足しなくなると思ひます。では又

正史大兄

十三

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月24日朝(12204)

封書 海野十三用箋2枚 ペン書、一部鉛筆書

九月廿四日朝

二十二日附のお手紙ありがたく拝読いたしました。ザラ紙に、ペンで書くと、滲んでどうにもなりません。万年筆だと、この位にゴマ化されて、まづ間に合ひます。(インキの出がすくないためでせう)しかし万年筆はペンよりも肩が凝りますから、諸効果をサムアツプすれば、同じことになるのかも知れません。

要は万年筆の軽くすべるのを見つけるのが得のやうです。

長谷川修二君健在を承り、うれしいことです。

うちでは、このところ三人の子供の誕生日つづきで、十九日、二十一日、二十三日(聯合誕生祝の日)、二十五日と、ごちさうだらけにて胃袋も悲鳴をあげてゐます。結局魚になり、そして刺身又はにぎり

寿司と生魚がつづきますのでねえ。

さしみも、マグロ、タイ、イナダ、ヒラメ、スズキ?、エビ、カツオとなりまして、どれもたべあきました。二三年前のことを思ふと、ゼイタクのかぎりです。

うちの近所では、アイオン台風\*通過の前夜、ひどい雷鳴あり、そのとき旋風起り、一丁半ほど離れたところのお湯や外五軒の屋根がカチャ／＼となり、トタン屋根はまくられて飛ばされ、家の中はずぶぬれとなり、今以てそのトタン屋根の行方知れず、瓦葺きの家は瓦がとんでしまつてすごいいたらく。しかもこの五軒以外は平然としてゐるのでふしぎです。

もつとも松陰神社の杉が、折れました由。上馬から始まつて、その方向へ旋風がすすんださうです。

○女房からのことづけ「過ぎさしあげましたキップでお買ひになりましたか。今、うちの方ではあれで手拭が買へます。(ヤミ百円位のものが十数円でかへる)もし御必要なら、買ってさし上げてもよろしうございます(モチロンキップ入用)。あのキップは本月末までしか使へませんから、お忘れなく」

やつぱり万年筆でも、肩が凝りますね。もつとも右に用いたものは原稿かき用のものではない細い万年筆でした。原稿用の太いものは、もつと楽にかけます。このエンピツで書くと楽ですが、これよりも太い万年筆は一層楽であります。

とにかく肩の凝らないことが第一。これがその太い万年筆(軸が太いのです)であります。大いに楽であります。

千歳局さんが、あなたの住所の右のところへ、しきりに紫インクのハンコ「東京都千歳局区内」と捺して来ますが、私は常に無視してゐます。サー

ビスを忘れて、自分たちの楽になることを図って、「局区内」を強いるなんて、サービス官庁の精神のクサリを証明してゐます。民主主義は遠い哉です。

正史大兄

硯北

十三

\*アイオン台風 昭和23年9月16日に関東地方に上陸し、各地に洪水の被害をもたらした

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月25日午(12205)

封書 便箋6枚 筆書

九月廿五日午

昨日ちと身体の調子がへんでこれんです。脈拍早く鼓動が大きくなりイヤな気持。昨夜も何遍か家内を起しました。前々より多少此の病状あるやに見えないではなかったですが、かうハツキリ出て来られてはやり切れません。心悸昂進といふべきか、又はもつと云ひあらはし方のあるものか、小生には判定いたしかねます。昨夕からとつぜん起つたので(今日も起ることあり)原因となるべきものを昨日の出来事の中から探してみますと、サントニンを三回に分けて一日量をのみし事。主治医が、小生の脈速きに対してビタカンファを静脈へ一本してくれし事。長崎医大の原子病患者永井博士の著「この子を残して」\*を夜、床の中にて熟読せし事などです。其他主治医と、自分の病状について討論(といふほどのものではないが)をし、小生は小生の容態を先生の語調やその他から掘り出さうと試みた事もありませう(その結果小生の獲たものは少しく悲観的なものでした。これは蓋し誰でもさういふ場合は、悲観的材料を掘り出さないでゐられないでせう。但しさういふ悲観は一時だけの事で、

三四日経てばけろりとわすれるものです)。とにかく神経衰弱に罹りかけてゐるらしい。阿呆であります。この阿呆の爲めにそのうちお身体の御都合よろしきとき、お顔を見せてやって下さい。(急ぎませぬ)そしてゴツンと叱りつけて下さい。

——このところ主治医が来てくれましたして一時攔筆

ビタカンファを今日は皮下注射してもらひました。それからあと来客一件あり、それに会ひまして、遅い昼飯をとり、只今コタツ机の前に座つたところであります。もはや気分普通であります。今日は病気咄ばかりですみませぬ。

萩の花が咲き乱れてゐます。風も爽やか、いゝ気持の気候になりました。(口今はさやうに楽しんでゐます)

今朝写真キヤが来て、すばらしいローライレフ\*を見せてくれましたが、値段も又すばらしいものでした。あるところには、あるものです。ローライコ、ド、U型が三万から四万五千の相場の由

正史大兄 硯北

十三

\*「この子を残して」長崎の原爆で被爆した永井隆医師の隨筆。この年ベストセラーとなつた

\*ローライレフ ドイツ製二眼レフカメラのモデル名

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月26日午後(12296)

封書 便箋6枚(原稿裏面\*) 鉛筆書

九月廿六日 午後三時

奥様が見舞に来て下さつてたいへんうれしいことでした。おかげにて元気を加へました。あなたは咳にお悩みの由。同情いたします。吸入がいいと思ひますが、

如何。リンサン・コデイン\*も少々ありますから、御入用ならどうぞ。

今日は私の心悸昂進開始第三日目です。昨日まではそれが起りましたが、今日はまだ起りません。起りさうな気配のするところまでは行くが、そこでおちついてしまひます。一昨日よりも昨日が楽。昨日よりは今日が楽で、だん／＼軽くなつて来ます。余震みたいな現象です。どうぞ御安心下さい。もう大丈夫です。

どう考へても、三日前の初日は何か原因きんげんがあつたに違ひないと思ひます。遠因はパージ問題\*に在りと思ひます。

昨年十月から今年三月まで大いにこたへました。

蛔虫は、出たのか出ないのか、自覚的には分りません。

ホームライトなどの修理の件、沢井君へハガキを出しておきましたから近日参上いたします。(冬季に近づくと、停電が多くなりますよ。二月頃が最悪でせう)

里芋をありがたうございました。このごろ歯がわるいので、昔はきらひで全く口にしなかつた里芋をこの節は、「こんなうまいものがあつたか」とたべてゐる私です。お笑ひ下さい。

このところ仕事も中止してゐます。今日は小栗虫太郎ののこした只一つの少年ものを、水上幻一郎君\*に書き直してもらつたものをひろげて手をいれました。これが本日の最大の仕事でありました。

——日が变りまして今日は廿七日

昨日は、右のところにて主治医来診。いろいろ注射をうってもらひました。そのうちに、二男暢彦の先生が来宅、(自宅訪問)とかいふもので、小生も引張りだされて一時あまり喋らされました。

今日は、右の喋りすぎのためか、少し赤いものを出しました。(「赤微小交ル」と日記へ書きつけました)

たのに対し女房が本気になって、毎日スキ焼き、オイル焼、ビフテキとは変れど、毎昼食に牛肉をくはすので、今日は早くも悲鳴をあげ、三日に一遍ぐらゐにしてくれと懇願しておきました。女房のひっこんだ臉も、今日は回復した模様。立つてゐた姿勢から、急に下を向いて、手に力を入れて引出をあげるとか、ラジオをいぢるとか、さういふことをすると、アレが起り出す傾向あるを発見。よつて、さういふことは、女房を呼びつけたり、子供に命じたりして用を達し、時には自分の足の指でやってみますが、これはよろしからず。結局身体はどこかへ力を入れて、身体をかたくするといけないらしく、腹がへっこんでゐるときなどは、よろしくないやうです。秋色爽かに、庭は狭けれど、眺めてゐると見飽きませぬ。ほんとにいい氣候です。こんないい季節に、病氣してゐるなんて莫迦々々しいことです。

この心悸昂進症が癒れば、それで私の永年の病体もケリがついて、平常体に戻るのではないかと、そんな気がいたします。(本位田先生が来訪されたらしいです。ここにて擱筆)

正史大兄

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月29日朝 (12208)

封書 便箋4枚 筆書

九月廿九日朝

お手紙をありがたう存じます。今以て咳と痰とにお悩みの由。深く同情いたします。寝てゐるということは、早く癒る妙諦なれども、たしかに退屈。本も読みふけり、そして読み飽きます。私の場合も、寝てゐた方

心臓の工合は、悪くありません。そのうちに心悸昂進症に注意力を集中することに飽きて来て、気にしなくなり、そしていつとは知れず癒つて行くことと思ひます。

本日はすばらしい秋晴れ、気もちよく庭を見て居ります。写真キヤ氏に例のローライレフを貸してくれといつておきました。それが来るでせうから、一本うつしてみるたのしみあり。「この前の記念写真はまだカメラの中にはいつてゐます。」では又

十三

正史大兄

\*原稿裏面「超人間X号」(昭和23年8月〜24年5月「冒険クラブ」連載)の草稿。P25に画像掲載

\*リンサン・コデイン 咳止め薬

\*パージ問題 海野は昭和22年2月から23年4月まで公職追放の仮指定を受けた

\*水上幻一郎君 探偵作家

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月28日 (12207)

封書 原稿用紙(K・H・K製)3枚 鉛筆書

九月廿八日

お咳はどうですか。

私は、大分軽快です。しかしまだとき／＼軽度のものが起つたり起りかけたり。すぐにはなほり切らないのでせうが、こんなものにとりつかれたと思ふと、あわてます。

平沢氏も自白したさうで、本当なら結構ですね。平沢氏なら心悸昂進症なら起すまいと、羨しいです。

主治医が、半ば冗談に、「毎日でも牛肉をたべるといいですよ」といっ

がいらしいのですが、寝るのが嫌ひですから、起きてゐます。主治医は、「急に動いたり、早く歩いたりしなさんな」と注意してくれます。歯もぶら／＼。歯を抜く必要あり、それには麻酔薬を歯ぐきに注射しますでせう。するとそれは心臓へこたへますから困ります。躊躇してゐるのはそのところです。その後も心悸昂進の弱震、軽震、微震程度のが起るやうですが、もはや莫迦々々しくなつて、余りにさわぎもしません。強いのは起りません。毎夜アダリンを呑んで寝ますので(主治医の命令に仍り)朝少々睡いです。今日も睡いです。あとで睡りませう。昨日日本位田さんからいろ／＼慰問され激励され楽しい時間を送りました。「横溝君から、三十分以上面会はいけないぞといはれてゐるから」とて正確に逃げられてしまつて残念。昨夜寝てから軽震が起つた様子。アダリンもそろ／＼効きかけた頃。徳川むせい先生を真似して「心悸句集」を作らうかと思ひ、朦朧ふら／＼の中に二三句を得ましたが、憶えてゐるかどうか。思ひ出してみませう。

○小猫啼く雨戸の外の夜寒哉

○朝寒や雨戸の外に小猫なく

この外に心悸昂進の句と胸の病の句を得たおぼえあれど、只今どうしても思ひ出せませぬ。今日はこれにて。どうぞお大事に。

十三

正史大兄 硯北

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年9月30日夕 (12209)

封書 便箋5枚 筆書

九月三十日夕

肩のお凝りになつてゐるのにお手紙をありがたう。すみません。無理は

いけませんから、どうぞ。私も今日は快調で殆んど心悸昂進のことを忘れて過ごしました。もっとものつびきならぬ原稿を二十一枚も書きましたので、病氣のことを考へてゐるひまも、余りになかったわけ。そして執筆速度は、うんとおとしてゐます。明日は、もうこんな大仕事はやめたいと思つてゐます。連載一つ、完結となりやれ〜です。本月は私も稼ぎがわるく、近來のレコードになりませう。たしかに各社とも支払ひぶりが悪くなりました。要警戒であります。

今日は写真機やさんが、私の単玉レフ（エキザクタ\*）をきれいに修理してもつて来てくれましたので、今宵いい気持でゐます。早くこれをひねくりまはしたいもの。別にローライレフも借りて、一本うつしてみることになりました。それをやって心悸昂進が起つてはたいへんですから、私はなるべく口だけを担当し、万事は長男にやらせることにしたいと思ひます。夜間撮影がどれ位に行くか、たのしみにしてゐます。毎日牛肉をくはせられるので閉口。今日で四日つづきました。第一破算のおそれあると思ふんだが、女房は破算をしても私の病氣を早くなほしたい決心のやうです。目を白黒して、肉にくひついてゐます。（但しおひるに出るのです）

ルミちゃんのおはぎは、ほんとにお氣の毒さま。うちは昨日おしることをこしらへました。そして私も一ぱいのませられ、目を白黒。ルミちゃんが、こんど、さういう日にいらっしやることを祈つてゐます。（電話をかけられるやうになれば、いいですね）

陽子は明日修善寺温泉泊りの一泊遠足に出かけます。その準備にさわいでゐます。葦山の方の通つていくらしいです。伊豆では吉奈よしなといふところが忘れられません。女房は吉奈ホテルの味を忘れかねてゐます。とにかく身体をよくして、温泉へぶらりと出かけるやうになりたきものです。

今日はこれにて。

十三

正史大兄

\*エキザクタ ドイツのイハゲー社製の一眼レフカメラ

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月1日夜（12210）

封書 竹々亭用箋2枚 ペン書

十月一日夜

お咳と痰はどうですか。肩の凝りの方はどうですか。病氣の話ばかりが繁盛するのは、困つたものですね。

私も今日は失敗。昨日は甚だ好調で、もう癒つたぞと思ひましたが、けさ顔を洗つたとき、水がひやりとしたので、それが刺激になって、そのあとがどき〜として来て、夕方まで不安な気持がつづいてゐました。只今はもうすっかりおさまつて、平常の気持でゐます。それと今日の午前中は、腹を冷やしまして腹がつめたくなり、それも刺戟になっていやな気分を誘発したやうです。（腹を冷やしたのは、浴衣一枚の上に前垂だけをしめ〜もちろんサルマタはしてゐますがね〜胸を大いにひろげて風巻を入れてゐたので、それで冷えたらしい）。それに氣がついて、毛の腹氣分のわるいとき、どき〜を忘れようとして、軽い少年連載を十七枚かいてごま化しにかかりましたが、どうやらごま化し切つたやうです。お隣の陸穂もすっかりとり入れがすみ、今日は例のゴマメの歯ぎしりのやうな鳴子もひっこぬかれて、しまはれました。

陽子が遠足で不在ですが、弟たちが「今頃陽子ちゃん、旅館にいたらう」とかなんとかしきりに話題にしてゐます。けんかばかりしてゐるの

に、かうなると、しきりに案じ合ふうちの子どもでもあります。

今日のお昼は牛肉ではなくて、チキンでありました。やれ〜であります。

十三

正史大兄

硯北

正史大兄

硯北

十三

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月2日午後（12211）

封書 K・H・K製原稿用紙3枚 ペン書

十月二日午後三時

又例によつて病氣の話から始めます。今日は好調です。ためしに、（どうもためしをしたがつていけません。そして失敗するのがオチなのです）少し動いてみました。動いたといつても写真機を家の中でひねくりまはしただけのことです。少しふう〜いひましたが、心悸昂進症には陥らず、いささか自信をつけました。（この自信がコワイんですがね）仍つて只今も機嫌よく机の前に座つてゐます。幸ひ今日は原稿催促の客も来ないので、のう〜としてゐられます。

そのかはり、前に並べた原稿用紙には表題と名前と「前号の梗概」が書いてあるだけでさつぱり本文へ進みません。

後になりましたが、あなたのお肩はどうですか。お咳は、痰は？

今日のお昼はまた牛肉へもどりまして、すぎ焼きとなりました。松茸を入れたので、おいしくたべ、いつもより少しく多くなつたべました。家内がよろこびました。

薬屋さんが、注文しておいた注射薬を持って来ました。トロンボゲン5cc二百管、ヒスコパール二百管、アクタシン\*⑤2百管、それに雑品少々

合計四千五百五十円也。このくすり屋さんへ、一回に一万何千円払ふこともあります。バイエルのくすりはもうないかと聞けば、オムナジンの

注射薬が少しあるだけで外にはないといふ話。

旬刊ニュースの稿料、やうやく送つて来ました。

十三

\*トロンボゲン、アクタシン トロンボゲンは止血剤、ヒスコパールは不明、アクタシン（アクトシン）は皮膚潰瘍治療剤

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月3日朝（12212）

封書 便箋六枚 筆書

十月三日朝

私に同情せられ、お訪ねくださる途中、御異状にてお引返し趣、かたじけなく、且つ大恐縮。厚き友情に感泣いたします。そんなに無理をして頂かなくとも、私はなんとか持ち保へてゐますから、どうぞ御心配なきやうに。さるにても服装の儀は、平常のまゝにてお氣輕においで下さい。延原夫人すらゲタバきにすねをむき出しにしておいでになります。

私は渋谷へ出懸けるときにも（但し本年は一度も行つてみませんが）うちにあると同じ位の服装で下駄ばきで出かけます。どてらで下駄ばきに御出で下されたく、ネクタイなんかぎゅうツとしめつけて来られては話がしにくくていけませんや。荷風先生\*調がよろしいやうです。私なんか今以てあやしき風采にてお客にもあへば、（子供の先生が家庭訪問のときにもそのまゝで）散歩もいたします。近所では、海野十三があんな恰好で歩いてゐるぞと評判の由。

陽子も無事伊豆旅行から帰って来ました。第一回は葦山見物定石どほりにて修善寺に一泊。翌日は土肥へ出て、船にて沼津へ出て東京行の汽車へのりこんださうで、私もかつて役所にいたとき、デザインしたコースでした。橋本屋という旅館一泊が四〇〇円。米は持参。さだめし喰べる物がなかったらうと訊けば、夜は、さしみに、かつをの塩やきに、それから野菜煮などつき、翌朝はめざしやみそしるや他に二品もついたさうで、思いがけないりっぱなお膳立だったのにおどろきました。温泉宿も、天下の金づまりで、えらく不景気のせいで、サービスが自然改善されて来たのでせう。私にとお土産を買ってきてくれましたが、木製のお人形、ミニチュアの木製茶器、エハガキ、パイプ、趣味の鳴子。こんなにたくさん、お父さんにくれるのかと一驚いたしました。

昨夜ラジオを聞いてみるときより例の軽震が起り、寝ていても、アダリンをのんでも心音耳に立ち、そこでシンキ俳句をまた四つ五つ考へてみるうちに寝ましたが、暑くて汗が出て、又目がさめました。家内がむし暑くなったことを保証してくれたので、やっと寝つきました。やれ／＼です。

正史大兄

\*荷風先生 永井荷風 小説家

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月4日朝 (12213)

封書 便箋5枚 筆書

十月四日朝

御手紙拝受。牛肉の喰べ方について御教示ありがたう。早速、試みてみませう。因に昨日昼は牛肉休みで助かりました(これを読んだら女房が怒るでせうが)。演舞場へお出になる由。たいへんけっかう。うちで

十月六日夕

この頃は毎夜停電をいたし不愉快です。この冬の発電の水は十分だといふのに、何といふ事です。拙宅はトランス\*から一番遠い末端に近く、昼間の好調子などでも八十ポルト、夜七八時頃は六十何ポルトといふ情けなき。これはトランスから拙宅迄の間に相当の電熱器が使はれてゐることを物語るのせう。ホームライトがあるから灯の方はいゝやうなものゝラジオが聴けないと子供が残念がつてゐます。

今日はコロニア製のオール・ウエーブ受信機\*を会社より修理に来てくれ、元のやうに鳴り出すやうになりました。私は甚だつらいのですが、子供たちは「カネノナルオカ」と「ムコウサンゲン両ドナリ」が大好き。その鳴っている間、こっちは聞かないやうに努力して、この頃では卒業しまして、気にならなくなりました。六大学の野球試合の放送は聴きたいが、聴くとドキ／＼が起るやうな気がし、結局なるべく小さくして遠くの方から聞くことにしました。(只今早立第二回戦。只今ワセダのピンチ。たいへん／＼。只今W九対R三、又入ってW九対四、末吉かはり荒川出る。どうなりますかな) 今日短編を三十枚を書き出す筈のところ、すっかり遊んで(カミノシミアリ、失礼)しまひました。昨日は、数千万年の世界を舞台にした少年連載\*を仕上げました。仕事をしつてゐると病苦を忘れ、しすぎるど病気にわるい影響あり、そのよろしき程度を探しながら、日を送つてゐます。本日やや不安定なるも、症状は起こらず。だん／＼いゝやうです。

正史大兄

\*トランス 変圧器のこと

\*オール・ウエーブ受信機 一般的なラジオ放送の中波帯だけでなく、短波帯も受信できるようにしたラジオ受信機

も、女房が、温泉行とお芝居映画見物の出来る日を待望してゐます。今の心悸昂進が片づけば、お芝居映画の方は出来ると思ひます。温泉の方ハ大分先のことです。演舞場の「法界坊」(多分)は評判らしいですね。大正四年頃の菊吉\*などの青年歌舞伎が二長町へ揃つて出たときに似た気運が今あるやうにも思ふのですが、これはラジオで聴いた印象だけのこと。とにかく実物を見たいもの。

沢井君がお酒をごちそうになりました由。さぞ、よろこんだことをごいませう。昨夜も小一時間停電しましてホームライト活躍。いつになつたら無停電になることやら。

その後心悸昂進症も微震程度に過ぎず、昨日など近来最好調でありました。これなら大したことにもならず、落着いてくれるのではないかといふ気がいたします。夜もアダリンを呑みまして寝ますが、十時頃から五時頃までぐっすりと睡ります。主治医は「よく睡り、よくたべてみれば、間もなくおさまります」といつてくれます。昨日は昼寝を三時間もしましたのに、夜は又よく睡りました。

清水の三保に住んでいる親類からの来信に、富士山は九月三十日に淡い初雪がつもつたさうで、それがおひる頃には早くも消えてしまつたさうであります。

正史大兄

\*演舞場 新橋演舞場。空襲で焼失したが、昭和23年に復興した

\*菊吉 六世尾上菊五郎と初世中村吉右衛門を指す

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月6日夕 (12214)

封書 便箋5枚 筆書

\*数千万年後の世界を舞台にした少年連載 昭和23年12月から24年3月に「少年読物」に連載した未完作「赤毛の猿人」か

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月7日朝 (12215)

封書 便箋6枚 筆書

十月七日

大分御好調なれど少々不安定感ありとの事、御休養こそ然るべしと存じます。台風一過して秋深く、近所の御散策など然る可く、松茸飯、松茸入りのスキ焼きなど如何に候や。

ヒムロ\*は、私の生まれ故郷の阿波などに於ては蚊いぶし用として最上もののやうに云はれ、その木片を夏、さかんにくすべた記憶あり。ちよつと香もよろしきもの、御序あらば、折れ枝などによつて御試みあつては如何。

自由出版の領収証用紙の間違ひの件は、私のところへちがつた金額のもの(七千五百のかはりに五千のものが入つてゐました。私は三ヶ月も礼金支払を延ばされてゐたもの)が入つてゐたので金額訂正して送つてやりました。それから起つた事でせうが、社員ボヤ／＼してゐます。他から聞けば内輪モメひどく(村瀬氏対高山及本田モウ一人の同級生)代金回収もつかず、壊滅に瀕している。只村瀬君のみは強気です。つけてゐるといふ話にて、私の貸金回収も印税取得も甚だ心細い次第。あなたは早く回収されて、本当によろこびました。

とにかく出版には素人のくせに、私なんかの云ふ事は用いず放漫にすぎ、着実に基礎をつくる事に徹しなかつた上、いくらもチャンスはありながらそれを逃したのがいけなかつたと思ひます。私としても残念至極。弟\*の生きてゐたときは、じゃん／＼云つてやり、為めに弟は村瀬君と私の

間に挟まってくるしがってゐたもの。私のいふ通り江戸川横溝天下ものだけ出してゐればよかつたし、昭和二十一年には少年ものに着手してゐれば、今頃は万々歳ものだったのです。商売と社交は別ものである事もよく注意したのです。さういふ事をさっぱり聞き入れないで、手前盛りの怪しげなる装幀で本をだしたり、売れもしない作家のものを、江戸川乱歩さんのお声懸りで出したり、微小出版社のくせに大尽出版社の如く振舞つたのがたつたつてゐるのです。その他放漫なる事沢山あり。元氣はよけれど、素人だし、一見識、一貫性を欠いてゐます。折あらば貴兄を以て村瀬君に忠告し且つ激励を加へられん事を私よりもお願いいたします。今から「少年探偵小説全集叢書」みたいなものを十五六点出すのもいいではないかといつてやってみますが、どこ迄真剣に考へてゐますことやら。

わが家の雑花苑には依然として咲けるは オイラン草 百日草 おしろい、サルビヤ、それに萩です。コスモスイよ／＼丈が高くなり蕾もふくらんで来ました。可憐な花を見せられるのはあと二、三日してでせう。楽しみにしてゐます。では又。

正史大兄 硯北

\*ヒムロ ヒムロスギ。別名サツマズギ、シモフリヒバ

\*弟 海野の弟・佑一。昭和22年3月没

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月8日夕(122216)

封書 便箋4枚 筆書 新聞切抜(ニューヨークタイムズ)

十月八日夕

本日はよし子さんと亮一君がお顔を見せて下され、病人大いにうれしく、元氣づきました。深くお礼を申します。今日は、昨日少々仕事に熱

中したせいか脈が早いやうで、気にしてゐますが、東光出版から頼まれ

し連載\*の書き出しを初めたところ五枚程のところ、心臓が大駆足なる事に気がついて狼狽し、ペンを放り出して別の部屋へ逃避しました。荷重がうんとかゝる仕事は毒ですね。もうやめちまはうかと思ひました。かゝる次第故、入りくんだ筋のものをこなす力さっぱりなく、結局怪しげなるユーモア探小を書く位がせい一杯です。

今日の事故に懲り、以後、新規原稿一切断る決心をいたしました。そして目下引き受けてゐる連載ものを、出来るだけ枚数を詰めて書き、お茶を濁すことにしませう。右本日の決心也。明日、明后日は、またどういふ事になるやら不明であります。お互ひさまに病氣咄はタネ切れになる日が早く来てほしいものです。

ルミちゃんおめでどう。きょう、おいわいに万年筆とシャープえんぴつとを買いました。そのうちに、どなたかにおねがいしておどけます。それまでおまち下さい。

今日ローライレフの試験撮影終了。五日ほどしたら結果がわかるはず。これ楽しみの一つであります。では又

十三

正史大兄 硯北

\*東光出版から頼まれし連載 昭和24年1月から「東光少年」に連載した「少年探偵長」か。海野の没後、横溝が書き継ぎ完成させた

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月9日夜(122217)

封書 海野十三用箋3枚 ペン書

十月九日

今日は晴彦が伺ひまして、御馳走さま。お礼を申します。

実はどこのお家へも出したことがないので、お宅へ修行のため、用をいひつけて出したのですが、当人のためになりました様子、ありがたう存じました。

あの子は、出かけるのが嫌ひで、学校の遠足も休む方でした。が昨日は珍らしく十国峠\*へ行きました。それについて、私と家内申合はせ、今晴彦がカメラ熱を出して居るところから、十国峠へ行ってうつつしてくれば楽しいよといつて出かけさせたわけ。これは当りまして、「楽しい遠足だった」と、かえってから申しました。

本日も皆さんの御厚遇により、たいへん気持がよかつたらしく、気短かの彼のこと故、ルミちゃんへのおみやげを置いたらそのままとんでかへってくるだらうと思つてゐましたところ、暗くなつても帰つて来ないので、ちよつと心配しまして、お電話までした次第。そんなに永く彼をもてなして下さつたのには、さぞお骨が折れた事と思ひ恐縮であります。とにかく今日は彼のため、この上なきありがたき修行になりました。家内とも／＼大よろこびであります。

この次は、日曜のとき、延原さんのところへ使ひに出してみようと思ひます。

なほ、今後お宅へたび／＼参上させますつもりです。どうぞよろしく御引まはし、御教育のほど願ひ上げます。

私の病状は、本日はたいへん好調で、これまでのうち、一等よろしい日でした。但し夕方にはちよつと晴彦を心配しまして起りかけましたが、解決してくひとめました。只今も好調、晩飯もおいしく食べました。

今日は原稿はやすみました。

西日本新聞社の社員で、福岡から東京詰になってまだ、半年もたたない人が、うちへ持つて来る原稿料をどうかしたらしく、本日报社より特使が

来て謝りました。オヤ／＼と吃驚しましたが、大臣にもこの頃の流職あり、雑誌出版社の社員にもこの種事頻発しまして、今年になってこれ三件であります。(光文社とGメン社各一件あり)油断ならぬ世の中でありますが、その人たちに同情もされず。福岡から東京へあがつて来て、若い細君をつれてゐる彼ノ君が、ついそれに手を出した気持もすこしは分るやうです。生活難は、物がたくさん出るやうになつてこの頃に反つて大きくなり、誘惑されて犯罪にまでなる機会も多くなつたのであります。概かほしいことです。

今、昔の春陽堂発行のウルトラマリン色の探小叢書をよんでゐます。次はあなたの「地下鉄サム」\*を久しぶりにて拝読します。大楽しみです。

十三

正史大兄 硯北

皆々様へよろしく

\*十国峠 箱根と熱海の中間にあり、峠の頂上から富士山や駿河湾の絶景が望める

\*「地下鉄サム」 アメリカのJ・マッカーレーが執筆した探偵小説シリーズの主人公。横溝は昭和4年「地下鉄サム」(平凡社)として翻訳、紹介した

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月11日夜(122218)

封書 便箋5枚 筆書

十月十一日夜

今日はよく晴れ、いい気持でありました。しかしあんまりよく陽が当り、縁側の上にギラ／＼と新聞紙が光つたので、これが反射条件となり、ちよつと心悸亢進を起しました。甚だ敏感で、吾ながら軽蔑ものです。尤も間もなく収まりました。癒るにしても波動あり、地震の余震みたいなものあり、それは覚悟してゐます。愚昧なるわれに向つて自ら申すに

は第一「心悸亢進症やその他の呼吸困難では死にやせん」第二「自分で自分の咽喉を締めるやうなことをするな」と。後者は、自ら怯えて、苦しくもないのに苦しいやうに思ふ結果苦しくなるのであります。

今日村岡花子さん\*の弟にあたる元文芸春秋安中改め□□氏が来り、一人息子さん(二二)が二月に突然咯血して今も入院中云々との話を聞き、同情いたしました。そして私の大切と思ふことを述べてあげ、遠藤博士の「新療養道」をお貸ししました。聞けば、やはり若気で無理に勉強をし、アルバイトをつづけた結果の由。

もう書くまいと思ふのに毎度病気の話ばかりにてすみません。しかしあなたが聞いて下さるので、私は大安心をしてゐられるのです。

晴彦が、お宅の見とり図をかいて、こんなところだよ、と教へてくれました。帰って来てから、何か伝染しまして「オルガン買ってくれ」とねだり始めてゐます。小生今日断を下して曰く「家が今は狭いからだめ、広くなったら買ってよい」と。

昨日は延原さんが来てくれました。自分のことはよく分らないが、延原さんがめつきり年をとられたのに感慨をわかしめました。すこし多忙すぎるのぢやないか、鎌倉からの通ひがこたへたせいかとも思ひました。それなら赤堤の新居ではのび／＼として、若返ることです。

原稿はまだ出来ませぬをくりかへしてゐますので、お客と電話いよく／＼繁く、よわったことになりました。名文句を考へて、家内をして代弁させてゐます。

十三

正史大兄 硯北

\*村岡花子さん 翻訳家・児童文学者

右の写真二葉は焼増の上、お送りいたしますから、暫くお待ち下さい。角田君のところには、はじめ男の子さんが生れし由、今朝笹本の寅さんが知らせてくれました。嘸かし大よろこびであります。ではこれにて。みなさんへよろしく

十三

正史大兄

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月14日夕(122220)

封書 便箋3枚 筆書

十月十四日夕

色々と御忠言をありがたうございました。拳々フクヨウいたし一日も早く頰勢軌回にこれ努めませう。

電話屋の森サンが行きました由。彼は商人にちがひありませんが、やることは責任もつてはつきりやりますから、電話のとおりつけ方も最短時日でやることと思ひます。釣の好きな人です。この人の「言葉」は江戸ッ児弁の最後のものではないかと思ひます。お味はひになつて御判定下されたし。

今日は、大阪の高島屋雑誌部の使者の、ひどくねばり強い仁のために、たうとう、十七枚を書いてしまひました。途中少々ドキ／＼が起こりましたが、この一週間か十日間、ウルサイことたいへんで、これを脱れない限りわしの病気もなほるまいと、観念して今日は三十七枚ものを書き上げし次第。これに懲りて、もう大阪ものは一切引受けまいと思ひました。ヤレ／＼。

奥さんが助手を志された由。うちのは看護婦さんでもあります。とにかく手許にひきつけておかないと、不安になつてかなひません。しかし病

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月13日正午(122219)

封書 便箋5枚 筆書き

十月十三日正午

昨日はありがたう。よく来てくださいました。万難を凌ぎ大勇を奮つておこし下されし事、ありがたくうれしく、今朝も目がさめると、とたんにこれを思出して、うれしくてたまらず、元気に起きました。今日はお手紙を二つ拝受。

心悸亢進症についての御教示の点、よくわかりました。早速それを実行に移すことにして、今後原稿の新規引受は断然慎みませう。そして一ヶ月でも早く連載をケリにして、引受連載の数を減らませう。

その他の事も逐次気をつけて行きます。とき／＼大兄より「やつてゐるか」とチエックのことばをかけて頂きました。

今朝写真キヤさんが来て、さきに渡して置いた試験うつしのフィルムの現像焼付を持って来ました。亮一君とよし子さんを二枚撮りましたが、一方は普通に撮り、他方は閃光球を使って撮りしもの。その特徴がいやにハッキリ現はれてゐますので、これでは買はないわけに行かず、たうとう買ってしまふことにいたしました。但しその試験撮写のとき、閃光電球を使つてうつつしたものの四枚ある筈のところ、二枚しかうつつ居らず、他の二枚は全然うつつ居ません。シャッターが開かなかつたやうです。案ずるところ、これは電気装置使用に失敗があるらしく、キカイの罪ではなく、慣れないがための失敗だと思ひます。

― 来客あり、中断 ―

関西の親類より、東上の同僚の手を借りて松茸一籠到来。これよりおひるのスキ焼、ちやうどいいところへいいものが来ました。天に感謝し親類の好青年に感謝いたします。

勢は、先日あなたが来てうれしがらせて下さつた以来、大いに好転したるやうで、御安心下さい。今日はこれにて

十三

正史大兄 硯北

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月18日朝(122221)

封書 便箋4枚 筆書

十月十八日朝

其後好調であります。昨日などは近頃第一の身の軽さを覚えまして、気味のわるいほど、気が持がよろしく、生きかへつたやうな気がしました。この調子で、あと続いてほしいものと祈りました。

先日來、ちよつと動いても、ふう／＼と息が切れましたのが、昨日は少々連続して動きまはつても平気でありました。もう息切れなかなかほる事なく死期を迎へるのだらうと思つてゐましたのに、これは恠に意外でした。主治医先生のたしかなおん腕前と友愛とであると感謝してゐます。従つて昨日は仕事も出来まして、少年ものを二十枚以上も書きました。今日は休養するつもりです。

とにかく、このやうな好調が戻つたことは意外で、この調子なら前途に明るい希望が持てると思ひました。御放念願ひます。もつともいよく／＼自重して闘病に当ります。

今朝の新聞の少年もの出版社の広告ずらりの中に小生の著書は一つも見当らず、この秋は海野十三すっかり姿を消した形であります。いいことだと思つてゐます。しかし、決して負けるつもりはありません。

庭にコスモスが咲き出しまして、それを硝子越しに眺め、楽しいことあります。これは私がタネを五つまいたもので、たいへん可愛いんです。

今日は大西風めいた烈風が吹き出しました。いよいよ冬遠からずといふことになって来ました。竹が吹きたふされさうにしなひます。コスモスが折れやしないかと心配してゐます。

正史大兄

十三

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月19日夜(12222)

封書 便箋1枚表裏に記載 ペン書

十月十九日夜

○御手紙をありがとうございました。偕成社も初版二と決定いたしたる由。近頃の景気では二万は仲々の大出版。社の方でも「怪獣男爵」にほどの自信をつぎこんでみると見ます。尚、つづいて二版三版をいたしますでせう。お楽しみに。かうなると、大人ものよりも少年ものの割のいいことがお分りになります。しかも十年十五年二十年と、毎年同期に出るのですから、いよいよ楽しみであります。どうか、これをきっかけに、少年ものをどしどしお書き下さるやう熱望いたします。次は、東光出版社のをぜひとも願ひます。同社よりはこんど雑誌「東光少年」を創刊します。私は「少年探偵長」を書くことになって居り、筋は「名金」で、しかしその争奪の途中に、それが変造され、やがて二つの断片が一つに合はされたとき、それが大爆発を起す(実は一方にウラニウムが入れてあり、他方は中性子の発生体があり、そこで二つをあはせると、この原子爆弾がバクハツする)といふのがヤマであります。○角田君のところへ私もお祝をしたと思ふのですが、たしかにいいものがないやうですね。都合によつては来年の初節句まで伸ばして五月人形でも贈らうかと思つたりしてゐます。

ました。

○明廿日午後五時すぎから、前に小生の書いた「キューリー夫人」の再放送が行はれます予定。今日はこれにて。

十三

正史大兄

\*玉電 現在の東急世田谷線。海野の自宅最寄駅は若林だった

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月20日(12223)

封書 海野十三用箋1枚 鉛筆書

十月二十日

お手紙ありがとう。バターは、ありますから、いらして下さればおゆづり出来ます。油の方は、この前買ったところへ連絡してみます。一斗罐単位でないと売らないかもしれません。問ひあわせに、しばらく日数がかかりますことを予め、御承知下さい。

以上女房の話を御伝達。

西田先輩も、もう見えたところでせう。どうぞよろしく仰有つて下さい。そしておひまがあったら、一度お顔をお見せ下さいと、頼んでおいて下さい。

乾呂氏南亭先生\*も本郷に家が見つかりしとか。けっかうでした。私の脈も、だいぶん圧力が増して来た由。またタメシをやつて、ときどきふう／＼いつてゐますが、とにかく脈がすこしづつ前に戻つて来て楽になり、今まで病気でありしことが分ります。七月以来仕事をあまりしないことが、漸く顕著に結果を生じて、本月の収入煙霧のたな引くに似たりです。

○身体の方は、波動的に一進一退してゐますが、総合してみると快方へ向いてゐることはたしか。この調子だと故小栗さんなどが悩んだほどのひどい心悸亢進症にはならないですむだらうと思ひます。うちの家内のもひどかったのですが、全くいやな病気で、クワバラ／＼です。それに比べると、私のなんか神経衰弱が主体で、それに附録として心悸亢進症がついているやうなもの。尤もこの七八月の臥床で、大いに体力が消滅し、衰弱したことが原因の一つになつてゐることもたしかであります。

○写真を同封いたします。後の雁が先になつたといふわけです。閃光球をたいた方とたかない方との区別がはっきりつきまますところへ御目をとめていただきます。前の分も後の分もまだフィルムが未撮の分が残つてゐますので、もうすこしお待ち下さい。

晴彦が先日とらせて頂いた分はほとんど失敗してゐます。いろいろと注意を与へてやりました。とにかくそれは近日焼きましをして、不出来失敗のままごらんに入れることにいたします。

○ルミちゃんの入学問題も、これですつかり和了となられ御安心。この上は、楽しい通学生活にいよいよ天真らんまんルミちゃんと生長されんことを祈ります。

○うちの孫(三つ)が昨日はひとりで家を出、玉電\*の踏切を向かうへ渡つて、八百清の店へ行き「ミカン呉れ」といった由。清さんはミカンを渡し、ふみきりが危いからと一緒にそれを渡つたところへ、母親が行きあはせて、つれてかへつたといふ話。全くおどろきました。コンコンと朝子に注意を与へてやるつもりでしたが、なにしろまだ三つですから、話をしてやつても三つの子供には理解が出来ず、困つたことであります。

○病中ながら、病気を知らない先が多いと見え、今日も瀧の川署から警部さん外一名が見え、講演をして下さいと頼まれ、平にお断りをいたし

単行本も、出るべきものが、いひあはしたやうに、さつぱり出ません。(初夏以来)これで、小生の計画どほりです。

これからは、春出版のものを少し考へることにしませう。

とにかくあまりたくさん本を出して、高いレコードをつくると、よくありません。税金の方でも、又読者に対しても。

病気を口実に、ずいぶん断つてしまひました。

「妖奇」\*の本多氏が手紙をよこし「生きてゐる腸」と「模鸚」合計二十枚ほどを、再掲出したいから六千円にしてくれと申入れがありました。ペア50円ではトンデモナイと思ひました。もちろん断りませう。

「獄門島」もめでたく完結。これから拝読のつもり。ご苦労さまでした。

十三

正史大兄 硯北

\*乾呂氏南亭先生 乾信一郎のこと

\*「妖奇」 オール・ロマンス社が昭和22年7月に創刊した探偵雑誌

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月21日夕(12224)

封書 便箋4枚 筆書

十月廿一日夕

今日は起きぬけに偕成社の社長今村氏が来ましたので、これに会ひ、それから「少年ヨミウリ」への新連載\*の絵組を書き、午後はNHK「子供時間」の原稿\*のこりを十枚書きまして、只今へたばり、空気を入れ替へて居りますところ。「少年ヨミ」の新連載の第一回より絵組です。われながらスマンと思ふが、どうにもなりません。しかもこの絵組たるや六七枚の分量あり、本ものの原稿は十六枚なんですから、笑ふべきことであります。今日はもう一つしなければ挨拶に困る原稿が(十四

枚)あれど、これは明日に伸ばします。

なにしろ待つて、々々々が、ここへ来て約束だまりとなり、ぬきさしな  
りませぬ。しかし病気はいや。だから、出来るだけしか出来ず、あとは  
お辞儀の一手をくりかへすばかり。

今村社長の話に、先月あたりが、冒険ものの出版の低調のどん底ならん  
とありました。

さかなのお話。うちでは、毎夕さしみつづきにて悲鳴をあげています。  
おゆづりしたいですね。これは、うちのとりつけの魚屋が、先日來、公  
配給魚屋をやめて、梓の外の自由値の高級魚ばかりの店に直したため、  
いい魚が毎日あるのです。もし御入用なら、お電話下さればその日でも  
手に入ることもあり、前日御注文なら必ず手に入ります。右家内よりの  
伝言にござ候。

つかれましたので、これにて少し休みませう。

十三

正史大兄

\*「少年ヨミウリ」への新連載「少年読売」に昭和24年1月から7月まで連載した  
未完作「未来少年」。未完に終わったため、高木彬光が書き継ぎ、完成させた

\*「子供の時間」の原稿 昭和23年8月〜翌年5月連載の未完作「原子力少年」

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月22日夜(122225)

封書 便箋3枚 筆書

十月廿二日夜

なんといふ暖さでせう、従つて私も元気に過ごしました。このときと  
ばかり少年連載二つをやりあげました。(十五枚と十枚)そして夕方  
なつて、これはやりすぎたなと後悔しましたが何しろ持ちこしの稿債、

の三角洲にあります)

西田さんへもよろしく御伝へ下さい。

十三

正史大兄 硯北

\*小磯良平 洋画家

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月26日夕(122227)

封書 便箋4枚 筆書

十月廿六日夕

本日を以て、重要な少年連載は一先ず片づきました。明日より月末迄、  
ちよつと一息入れます。今月は心亢症にて、べ切を出来るだけ伸ばして  
もらったためどれもこれも一緒に落合つてしまつてこの一週間ほどは全  
く自分の病気を顧る違もありませんでした。過労により悪化するのぢや  
ないかとビク／＼ものでしたが、案外大したこともならず、心悸亢進  
症の方は大ものは出て来ず、たいへん楽になりました。只 何とか外収  
縮とかといふのが起つて鳥渡ワク／＼するだけですが、これは心配なし  
と主治医のたまふにより安心してゐます。

今日は、うちのとなりの元陸軍獣医少将の宅に昼間ノビ師\*の少年がは  
いり、仕事途中に奥さんがかへつて来て泥棒と大喝。そこで少年ノビ師、  
垣根をやぶつて出たところを、うしろと前の両方を近隣の細君におさへ  
され、遂に御用となり、現行犯だといふのですぐ警視庁送りとなりしと  
か。盗んだのは元閣下のズボンと時計カフス釦指環なりし由。この捕物  
帳のため昼寝がオジャン。犯人はいい服装をしてゐて、頭ものばしてゐ  
て一見泥棒をしさうでなかつた由。この節は泥棒なんかの方が服装がよ  
ろしいこと、シヤクですな。

このところ山積し、べ切いっぱいやい／＼いはれてゐて、明日一杯  
は火の車、病を省るひまもなしといふ次第。これも因果であります。

「獄門島」終編を読みました。そして幕切れの余韻嫋々たるに感じ入り、  
陰さんなる殺人事件ながらそれが明朗に見える大兄の御手腕に感じ入  
り、「キのちがひ」では、きれいに背負ひ投げをくらつて快味を覚え、大々  
感心いたして大歎息。第一回の発端とこの解決との昭和の見事さ。まこ  
とに感じ入りました。益益御自愛を祈ります。

今日はこれにて。 十三

正史大兄 硯北

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月24日午(122226)

封書 便箋4枚 筆書

十月廿四日午

昨日は西田さんと共に御來宅下さつて、ありがたう存じました。その前  
日少々仕事を仕過ぎましてあの日は休みたかつたのですが、約束の午前  
さうもならず、仕事にかゝつて居たところ、来て下すつたので、晴れて  
のう／＼と愉快に過ごしました。かういふものをこそ神さまの御恵みと  
申すべきか。友情のありがたさに感銘いたしましたことでありました。

神戸のお話がはづみまして、家内も傍から承つてゐて、私が神戸弁を出  
したと、よろこんでゐました。僕の小学同級生の多くは、地勢上、二中  
へ受験し入学しました。あなたの御記憶に、下記の人々の名が残つて  
ゐはしないかと思ひます。 山本豊之進(級長でした、仲よし)。小

野富弥(小さい子で強度の近眼)。その外 関口誠 岸上格之助(小磯  
良平の兄)、山根某などが居たかもしれません。小学四年卒業の写真を、  
そのうちお目にかけてませう。(湊山小学校は御存じでせうが、湊川上流

十三

正史大兄 硯北

\*ノビ師 忍び込みの窃盗犯を指す

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月27日夕(122228)

封書 便箋4枚 筆書

十月廿七日午後

今日は原稿書きはお休みです。たいへん楽です。ぼつ／＼動いてみまし  
た。まづ愛読者からのハガキや手紙の返事がこの数ヶ月たまつてゐたの  
を整理して、三十数通返事を書きました。文面は同一。ガリ版刷り。一々  
かいてゐた日にはやり切れませんので、それに目下ずつと病体ゆえガリ  
版返事で、かんべんしてもらつてしまつた。これ工合よろしく、あ  
と／＼もさうするつもりです。それからラジオのオール、ウェーブ受信  
機が、この間あなたと共に乾城対談\*を聴きし以来、唾になつてしまつ  
たので、中をあけて調べました。さうしたら真空管の一ヶがぎれてゐる  
ことが分り、早速いいのにさし替へました。これでよく鳴るやうになり  
懸案解決。

その次は写真フィルムの整理をちよつとやりました。寒くなつたので、  
着物を着換へましたところ、只今暖くなり、少々ねむくなりました。一  
昨日も昨日も、脈が不整で、例のナントカ外収縮がさかんに起つてゐま  
したが今日はそれが起りません。するとやっぱり原稿を急いで書くのが  
いけないのかも知れませんが。

兎に角、今日は楽しく動いてみ、病勢が大分落着いて来たことを確認い  
たしまして、ちよつとだけよろこんでゐます。

今月は所得税をおさめる月。税をおさめて、また昭和電工や繊維局や炭

鈹国管事件のやうなところへ使はれノメヤウタへヤだの駒勇さん落籍の資となるのかと思ふと、納税するのがバカらしくなります。

十三

正史大兄

\* 乾城対談 乾信一郎、城昌幸の対談

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月28日朝 (12229)

封書 便箋4枚 筆書

十月廿八日朝

二十七日附お手紙ありがたく拝受、御仕事御盛んの由、御健康を祈ります。私は今日も執筆を休みます。明日は又始めるつもり。

西田老も きげんよくおかへりの由、老とはいふものゝ私よりは頭もずっと白からず 老とはアベコベの事でせう

延原さんと並べてみると、西田さんと同じ年頃でよく似合ふやうです。

自分は自分で見えないので、実際のこととは分らず、どっちが老人くさいですか。そこへ行くとなんたいはたいへんお若く見えますぞ。色艶といひ日やけた顔色といひ健康な歯なみといひ黒々とした頭髪といひ。人生須らくいつまでも若く居ろですな。

椿油のこと、先方へ訊きしところ、只今手に入らず、在庫もないさうです。大島へ行けば有るかもしれぬが、取引中止中の事です。菜種油ならあるさうですが、お宅には菜タネ油はお有りの由故不用でせう。そこで宅に椿油がまだ残つてゐますのでその中から一升お頒けいたしたいと家内が申します。お序の折御出で下さればお頒けいたします。と家内よりの伝言。

菊が咲きました。お宅のも、さうでありませう。菊は大好き。これ

理ある先のことなれば、そこ迄こつちも肚をきめて、伺ひをたててある次第。どうきまりますか未定。一つは先年第一回だけ書いた「鬼火族」\*であり、もう一つは警視庁筋の「蜘蛛」\*といふ雑誌。これは六ヶ月ものゆえ、短いです。大兄に元氣づけられたところへ持込まれ、少々色氣のある返事をいたしました。今はやや後悔のていたらく也。

例のカネは、当方目下必要なきにつき、そんなに早く御返済には及び申さず、どしどしおため下さって、例のカネ高がハナクソ位の比重になつたとき、ちよつとこつちへ吹きとばして下さればよろしく、どうか御介意なきやうに。

本日第二回目の所得税をおさめてやれ。わしの出した分は、どうか大臣老存のワイロなどになってくれるなど祈りましたる次第。

長谷川伸\*氏肺炎になられしとか。コワヤ〜であります。お互ひさまに、体力低下をくひとませう。

正史大兄

今日のヒルは、メンチボールにごさ候

\* 「鬼火族」 「鬼火族事件」 「実話講談の泉」 に昭和24年1月から4月まで連載

\* 「蜘蛛」 昭和24年2・3月合併号から6月号まで「電送美人」(未完作)を連載した

\* 長谷川伸 小説家、劇作家

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月31日夜 (12231)

封書 便箋5枚 筆書

十月卅一日

今日は延原さんが見舞と叱りに来て下されうれしかったりこはかったり。あなたはお風邪とか。急に寒くなりましたから御要慎なさい。久しぶりの東京の冬ですから、気をつけなさいませんよ。しかしこの両

から楽しみであります。

正史大兄 硯北

十三拜

海野十三 横溝正史あて書簡 昭和23年10月30日午後 (12230)

封書 便箋6枚 筆書

十月卅日午後

御たより嬉読。株券へ投資の有利なる事は対外為替レート決定近きあり、それに附随しての平価切下げ、まった生産振興貿易向上の点よりも、実質的な生産をなし得る会社の株は有利でせう。あなたのうしろについて少しのしみながら、やって見ませうか。しかし戦争が起つたらいやです。尤も戦争は今直ぐには起らないと私は信じてゐますがね。

大局よりいつても生産振興へ、国民が投資により協力する事は時節柄たいへん結構なことと思ひます。ローライレフを買ふよりは、ずっとよしい。

今日は寒いので、ちぢこまつてゐます。硝子戸を閉め、障子を閉め、四五尺距つたところに火鉢を置き、やうやく寒さと釣合ひ状態を保つてゐます。

仕事もぼちぼち再開しました。寒いせいか咳少しく頻発。何とか外収縮といふのは左図のやうに、「波動の図」とつぜん大きくうって、それからちよつと休み、それから小さく早くうって、次に元にもどる不整脈でありまして心臓のあたりがむづかくなるアレのことです。今日は、それが少々起つてゐます。

大人もの連載二つが、来年から始まるらしいです。自分で「らしい」とは変ないひ方なれど、どっちも持込まれて、こつちでは目下病氣ゆえ引受けても休載又休載又は尻切れトンボのおそれがあるがよろしきやと、義

日の寒さは少しく変態でせう。もつと温いはずのものです。先夜温かつたときに、睡られぬままにシンキ俳句を

冬蠅の一匹居るや夜の温き

とひねり出しましたが、さやうな温い夜の戻って来らんことを祈る次第。近頃は夜、床に入ると、やがて痰の位置がかはるかして胸の中がむづがゆくなり咳頻発させ 時に過敏症のやうに咳が出て、苦しくてやり切れず、咳を停めようと無駄な努力をすると、これも又苦しくてやり切れず、その揚句が翌朝少々ながら赤味が増すこともあり「お床入り」は近頃の悩みの種であります。といって咳止め薬をのむと、次の朝あたり劇しい咳が出て一層不愉快。とにかくやり切れません。なんとか修養の力で過敏をおさめるか、「お床入り」に於ける体位に氣をつけて研究するか、とにかくなにか解決策を発見しなくてはなりません。

シンクレアの「バッド」\*は私も買ひましたが、まだ読みはじめず、目下幸四郎の「二世一代」\*といふ芸説を読み終りしところ。この本、ちよつと頭の下がる本です。次は川尻さん作の「菊五郎百話」\*を読みます。近頃外出が出来ないので、新聞広告に出る本の中から探して注文するので数が少く、淋しいことです。早く松陰神社駅前の本屋位迄は行けるやうになりたいものであります。

正史大兄 硯北

十三

\* シンクレアの「バッド」 アメリカの作家アプトン・シンクレアの『ラーニー・バッドの巡礼』(昭和23年、リスナー社 並河亮訳)のことか

\* 幸四郎の「二世一代」 七世松本幸四郎「二世一代」(昭和23年、右文社)

\* 川尻さん作の「菊五郎百話」 川尻清潭編「六世 菊五郎百話」(昭和23年、右文社)

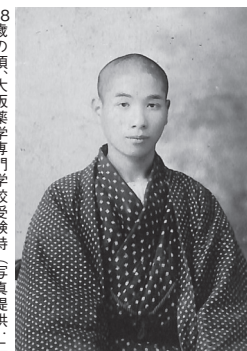
# 横溝正史 略年譜

本年譜は、「新版横溝正史全集」第18巻「講談社、1975年7月刊、別冊太陽」探偵小説の鬼 横溝正史（2024年3月刊）ほかを参照し、世田谷文学館で作成しました。今回翻刻した日記の該当年に●印を付けています。

|                    |     |  |
|--------------------|-----|--|
| 1902年<br>明治35年     | 0歳  | 5月24日、神戸市東川崎に、父・宜一郎、母・波摩の三男として生まれる。父母ともに岡山県の出身。  |
| 1907年<br>明治10年     | 5歳  | 母・波摩死去。  |
| 1908年<br>明治11年     | 6歳  | 継母・浅恵を迎える。   |
| 1909年<br>明治12年     | 7歳  | 東川崎尋常小学校に入学。   |
| 1915年<br>大正4年      | 13歳 | 神戸二中に入學。翌年、同窓の西田徳重を知り、探偵小説を語り合う。   |
| 1920年<br>大正9年      | 18歳 | 神戸二中を卒業。第一銀行神戸支店に1年ほど勤務。秋、西田徳重が死去、9歳年上の兄・西田政治との交友がはじまる。  |
| 1921年<br>大正10年     | 19歳 | 4月、大阪薬学専門学校に入学。処女作「恐ろしき四月馬鹿（エイプリル・フール）」が「新青年」懸賞小説等に入选。   |
| 1924年<br>大正13年     | 22歳 | 3月、大阪薬学専門学校を卒業。実家の生薬屋を手伝う。   |
| 1925年<br>大正14年     | 23歳 | 4月、江戸川乱歩にはじめて会い、西田政治とともに「探偵趣味の会」同人として参加。11月、乱歩とともに東京に赴き、多くの探偵作家、翻訳家を紹介される。   |
| 1926年<br>大正15・昭和元年 | 24歳 | 6月、初の著書「広告人形」(聚英閣)刊行。9月、博文館に入社し、「新青年」の編集に従事。牛込神楽坂の神楽館に下宿。  |
| 1927年<br>昭和2年      | 25歳 | 1月、岡山県出身の中島孝子と結婚。小石川区小日向台町(現・文京区)に新居を構え、父・宜一郎と次弟・武夫を迎えて同居。3月、「新青年」の編集長に就任。   |
| 1928年<br>昭和3年      | 26歳 | 2月、長女・宜子生まれる。夏より鎌倉・材木座に翌年3月まで居住。10月「文芸倶楽部」の編集長に転出。   |
| 1929年<br>昭和4年      | 27歳 | 1月、父・宜一郎死去。12月、「渦巻く濃霧」(平凡社)刊行。   |
| 1931年<br>昭和6年      | 29歳 | 1月、長男・亮一生まれる。母・浅恵と末弟・博を迎えて同居する。夏、避暑に訪れた千葉県・北条の海岸で最初の嗜血。  |
| 1932年<br>昭和7年      | 30歳 | 3月、「探偵小説」の編集長に転出。夏、博文館を退社し、文筆業に専念。8月「殺人窟」(春陽堂書店)、「呪ひの塔」(新潮社)刊行。  |
| 1933年<br>昭和8年      | 31歳 | 年初に吉祥寺に家を新築し、借家から転居。5月に嗜血し、7月から富士見高原療養所に入り、3ヶ月療養。  |
| 1934年<br>昭和9年      | 32歳 | 2月、「塙侯爵一家」(新潮社)刊行。春、水谷進が友人を代表して1年間の執筆停止と転地療養を勧める。7月、信州上諏訪に転地し闘病生活に入る。  |
| 1935年<br>昭和10年     | 33歳 | 2〜3月、「新青年」に「鬼火」を連載。8月、「蔵の中」を「新青年」に発表。9月、「獣人」を「講談雑誌」に発表、「鬼火」(春秋社)刊行。  |
| 1937年<br>昭和12年     | 35歳 | 4〜12月、初の時代物「不知火捕物双紙」講談雑誌連載。4月、「真珠郎」(六人社)刊行。6月、「夜光虫」(新潮社)刊行。7月、乱歩が本位田準一を同行し、上諏訪の療養先を訪ねて滞在。                                    |
| 1938年<br>昭和13年     | 36歳 | 1月、「人形佐七捕物帳」(〜1940年11月まで)「講談雑誌」に連載。10月、諏訪大社の大祭見物を兼ねて乱歩が来訪。   |
| 1939年<br>昭和14年     | 37歳 | 3月、「人形佐七捕物帳」(八紘社)刊行。6月、次女・瑠美生まれる。10月、「悪魔の設計図」(八紘社)刊行。12月、上諏訪より吉祥寺の家に引き揚げる。   |
| 1941年<br>昭和16年     | 39歳 | 3〜7月、「人形佐七捕物帳」全5巻(春陽堂書店)刊行。捕物小説を多数発表・刊行する。   |
| 1945年<br>昭和20年     | 43歳 | 4月、親戚・原田光枝の世話で岡山県吉備郡に疎開。8月、同地で終戦を迎える。  |
| 1946年<br>昭和21年     | 44歳 | 4〜12月、金田一耕助シリーズ第1作となる「本陣殺人事件」を「宝石」に連載。   |
| 1947年<br>昭和22年     | 45歳 | 1月〜翌年10月まで「獄門島」を「宝石」に連載。9月、「双生児は踊る」(民書房)刊行。12月、「本陣殺人事件」(青珠社)刊行。  |
| 1948年<br>昭和23年     | 46歳 | 1月、「蝶々殺人事件」(月書房)刊行。2月、「本陣殺人事件」により第1回探偵作家クラブ賞長篇賞を受賞。4月、長男・亮一が早稲田大学に入学。8月1日、岡山より東京・成城へ移る。10月、「探偵小説」(かもめ書房)刊行。11月、「殺人鬼」(展文社)刊行。 |
| 1949年<br>昭和24年     | 47歳 | 3月〜翌年3月、「八つ墓村」を「新青年」に連載。5月、「獄門島」(岩谷書店)刊行。  |
| 1950年<br>昭和25年     | 48歳 | 1月〜翌年5月、「大神家の一族」を「キング」に連載。11月〜翌年1月まで「八つ墓村」続編を「宝石」に連載。  |
| 1951年<br>昭和26年     | 49歳 | 6月〜翌年5月、「女王蜂」を「キング」に連載。11月〜1953年11月まで「悪魔が来りて笛を吹く」を「宝石」に連載。   |
| 1954年<br>昭和29年     | 52歳 | 8月〜1957年2月、「金田一耕助探偵小説選」全14巻(東京文芸社)刊行。  |



6歳の頃、正史と継母・浅恵(写真提供：二松学舎大学)



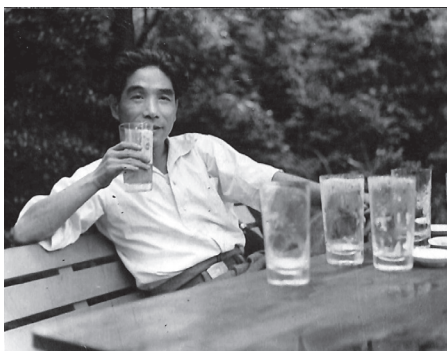
18歳の頃、大阪薬学専門学校受験時(写真提供：二松学舎大学)



横溝正史旧蔵、少年冒険小説全集第12巻「渦巻く濃霧」(1929年12月、平凡社刊)



1933年初に新築したばかりの吉祥寺の家で、左より弟・武夫、長男・亮一、正史、長女・宜子、妻・孝子(写真提供：二松学舎大学)



1949年8月、成城のピアホールにて(写真提供：二松学舎大学)

|       |       |     |   |
|-------|-------|-----|---|
| 昭和30年 | 1925年 | 53歳 | 1月、12月、「吸血蛾」を「講談倶楽部」に、「三つ首塔」を「小説倶楽部」に連載。6月、「迷路の花嫁」(桃源社)刊行。                                    |
| 昭和32年 | 1927年 | 55歳 | 8月、1959年1月、「悪魔の手毬唄」を「宝石」に連載。  |
| 昭和33年 | 1928年 | 56歳 | 6月、翌年12月、「金田一耕助推理全集」全15巻(東京文芸社)刊行。  |
| 昭和34年 | 1929年 | 57歳 | 1月、「悪魔の手毬唄」(講談社)刊行。   |
| 昭和37年 | 1962年 | 60歳 | 6月、黒沼健、永瀬三吾、渡辺啓助との合同還暦祝賀会が日本探偵作家クラブ主催で開催。継母、浅恵死去。   |
| 昭和40年 | 1965年 | 63歳 | 2、6月、「横溝正史傑作選集」全8巻(東都書房)刊行。4月、8月、「人形佐七捕物帳シリーズ」全10巻(講談社)刊行。                                    |
| 昭和43年 | 1968年 | 66歳 | 1、10月、「新編人形佐七捕物文庫」全10巻(金鈴社)刊行。  |
| 昭和45年 | 1970年 | 68歳 | 1、10月、「横溝正史全集」全10巻(講談社)刊行。  |
| 昭和46年 | 1971年 | 69歳 | 3、10月、「定本人形佐七捕物帳全集」全8巻(講談社)刊行。  |
| 昭和47年 | 1972年 | 70歳 | 9月、古稀記念に初のエッセイ集『探偵小説五十年』(講談社)刊行。  |
| 昭和49年 | 1974年 | 72歳 | 11月、翌年7月、10年ぶりの新作長篇『仮面舞踏会』も収めた『新版横溝正史全集』全18巻(講談社)刊行。  |
| 昭和50年 | 1975年 | 73歳 | 7月、エッセイ集『探偵小説昔話』(講談社)刊行。9月、映画『本陣殺人事件』(監督・高林陽一)封切。   |
| 昭和51年 | 1976年 | 74歳 | 3月、エッセイ集『横溝正史の世界』(徳間書店)刊行。10月、映画『犬神家の一族』(監督・市川崑)封切。11月、勲三等瑞宝章受章。                              |
| 昭和52年 | 1977年 | 75歳 | 4月、映画『悪魔の手毬唄』(監督・市川崑)封切。8月、映画『獄門島』(監督・市川崑)封切。10月、映画『八つ墓村』(監督・野村芳太郎)封切。12月、『真説金田一耕助』(毎日新聞社)刊行。 |
| 昭和53年 | 1978年 | 76歳 | 2月、『病院坂の首縊りの家』(角川書店)刊行、映画『女王蜂』(監督・市川崑)封切。   |
| 昭和54年 | 1979年 | 77歳 | 1月、映画『悪魔が来りて笛を吹く』(監督・斎藤光正)封切。5月、映画『病院坂の首縊りの家』(監督・市川崑)封切。7月、映画『金田一耕助の冒険』(監督・大林宣彦)封切。           |
| 昭和55年 | 1980年 | 78歳 | 7月、『悪霊島』(角川書店)刊行。角川書店が公募による横溝正史賞を設ける(現在は横溝正史ミステリ&ホラー大賞)。                                      |
| 昭和56年 | 1981年 | 79歳 | 10月、映画『悪霊島』(監督・篠田正浩)映画『蔵の中』(監督・高林陽一)封切。12月28日、国立病院医療センターで逝去。                                  |

## 海野十三 略年譜

『海野十三全集』別巻2巻(三一書房、1993年1月刊)及び徳島県立文学書道館特別展「生誕一〇〇年記念 日本SFの父・海野十三展」図録ほかを参照し、世田谷文学館で作成しました。今回翻刻した書簡の該当年に●印を付けています。

1897年  
明治30年  
0歳  
12月26日、佐野真雄・かずの長男として、徳島本町に生まれる。本名・昌一。双児の弟たちと妹がいた。佐野氏は代々藩主の蜂須賀家に仕える御典医で、祖父の渉は幕末に長崎で蘭学を修め、維新後は徳島医学校一等教授となり、のち医院を開業。昌一は生涯この祖父を尊敬した。

1904年  
明治37年  
7歳  
4月、徳島市福島小学校に入学。3年生の途中まで在籍した。

1906年  
明治39年  
9歳  
父が神戸税関に転職。7月7日、一家で神戸市に転居する。昌一は大関小学校に転校する。

1909年  
明治42年  
12歳  
母・かず逝去。

1910年  
明治43年  
13歳  
4月、第一神戸中学校(通称・神戸一中)に入学。クラスメイトと回覧雑誌をつくる。この年、父が再婚。

1911年  
明治44年  
14歳  
一家は東京に転居。昌一はひとり神戸に残る。

1915年  
大正4年  
18歳  
3月、神戸一中を卒業。上京し、浅草今戸で家族と共に生活する。

1916年  
大正5年  
19歳  
9月、早稲田大学予科に入学。

1919年  
大正8年  
22歳  
4月、本科(理工科電気科)に進む。この年、徴兵検査を受けるが、第二種で入営しなかった。

1920年  
大正9年  
23歳  
『野球界』5月号にマンガ『野球狂の神経衰弱』(京人生名義)が載る。6月から無線電信学を専攻。

1922年  
大正11年  
25歳  
1月、旧友・樋口正三らと「早稲田電気工学会会報」編集の学生委員会を発足。8月まで事実上の編集長を務める。8月、早大在籍のまま実習生として通信省電気試験所第四部に勤務。

1923年  
大正12年  
26歳  
3月、早大を卒業。卒論は「高真空法に於ける余熱操作に就て」。4月、電気試験所に正式採用。無線通信の技術開発に従事。級友の妹、樋口たか子と結婚。9月1日の大震災で浅草今戸の自宅全焼。のち一家で府下野方町新井に転居。

1924年  
大正13年  
27歳  
この頃から「無線電話」等に科学解説の執筆が増える。長女・朝子生まれる。

1925年  
大正14年  
28歳  
7月、電気試験所調査報告として『米国製真空管一般特性表』(佐野昌一名義)を刊行。



1975年11月、成城の自宅庭にて



1976年11月、勲三等瑞宝章受勲伝達式にて写真提供(二松学舎大学)



早稲田大学理工学部入学当時

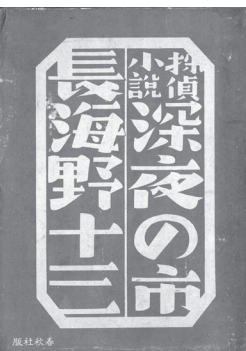


右から父真雄、弟佑一、妹美也、十三、義母はつ

|                    |     |  |
|--------------------|-----|--|
| 1926年<br>大正15 昭和元年 | 29歳 | 1月「無線と実験」に科学童話「ラヂ夫と電子王の話」(栗戸利林名義)を発表。この年、たか子夫人逝去。死因は結核で、昌一も感染する。   |
| 1927年<br>昭和2年      | 30歳 | 友人の横尾赤霧・三田千秋らと語りつて「無線電話」に科学大衆芸欄を開設し、3月号に海野十三名義で「遺言状放送」を発表。この年(あるいは翌年)、電気試験所で真空管研究室から特許事務担当に転属される。                                  |
| 1928年<br>昭和3年      | 31歳 | 4月、「新青年」に「電気風呂の怪死事件」(海野名義)を発表。7月、「日本少年」に初めての少年もの「地味井先生の秘密」を発表。   |
| 1930年<br>昭和5年      | 33歳 | 8月、海野名義のはじめての単行本『麻雀の遊び方』を博文館より刊行。11月、試験所の神崎英と結婚。荏原郡世田谷町に新居を定める。  |
| 1931年<br>昭和6年      | 34歳 | 次女・陽子生まれる。11月、「振動魔」を「新青年」に発表。  |
| 1932年<br>昭和7年      | 35歳 | 5月、初めての長編「空襲送曲」を「朝日」に連載(〜9月)。12月、初めての小説集「電気風呂の怪死事件」を春陽堂より刊行。同月、「新青年」発表のコント「妖説死後の心得」で丘丘十郎のペンネームを使い始める。                              |
| 1933年<br>昭和8年      | 36歳 | 5月、「赤外線男」を「新青年」に発表。8月、「太平洋電撃戦隊」で「少年倶楽部」に初登場。この年、長男・晴彦生まれる。   |
| 1934年<br>昭和9年      | 37歳 | 「俘囚」を「新青年」6月号に、「人間灰」を「新青年」12月号に発表。   |
| 1935年<br>昭和10年     | 38歳 | 9月、「無線と実験」主宰のラジオ科学小説懸賞募集の選者となる。この年、次男・暢彦生まれる。  |
| 1936年<br>昭和11年     | 39歳 | 弁理士資格を取得。7月「深夜の市長」出版記念会。11月、30年ぶりで生まれ故郷の徳島を訪れる。  |
| 1937年<br>昭和12年     | 40歳 | 1月、木々高太郎・小栗虫太郎との共同編集(のち蘭部二郎も参加)で、探偵雑誌「シュピオ」を創刊(〜13年4月)。「十八時の音楽浴」を「モダン日本」4月増刊号に発表。7月、新橋演舞場で「盲光線事件」が上演される。この年、三男・昌彦生まれる。             |
| 1938年<br>昭和13年     | 41歳 | 1月〜12月、「浮かぶ飛行島」を「少年倶楽部」に連載。3月、初の映画化作品「東京要塞」監督・清瀬英次郎が公開2月。また作品がラジオ・ドラマや舞台になるなど、活字メディア外への進出が著しかった。この頃、電気試験所を辞職。芝区田村町に「佐野電気特許事務所」を開く。 |
| 1939年<br>昭和14年     | 42歳 | 9月〜翌年12月、「火星兵団」を「東日小学生新聞」などに連載。  |
| 1941年<br>昭和16年     | 44歳 | 1月、世田谷区若林の自宅裏に費用1千円を投じて防空壕を築く。   |
| 1942年<br>昭和17年     | 45歳 | 1月1日、海軍省から第1回海軍報道班員として南方派遣を申し渡され、2日、東京駅発。カビエング島攻略に参加し、パウルで中空襲を経験。熱帯性の気候で体力を消耗したうえ Dengue 熱に罹り、加えて火山灰で肺結核が再発。5月9日、帰還。               |
| 1944年<br>昭和19年     | 47歳 | 12月7日、「後日の用のため」に「空襲都日記」をつけ始める。   |
| 1945年<br>昭和20年     | 48歳 | 8月6日、広島市に投下された新型爆弾を、「原子爆弾」だと直感。同月15日、一家心中を決意するが果たさなかった。  |
| 1946年<br>昭和21年     | 49歳 | 3月〜翌年2月、丘丘十郎名義で「四次元漂流」を「子供の科学」に連載。6月、咯血。   |
| 1947年<br>昭和22年     | 50歳 | 2月、公職追放の仮指定を受ける。6月、再び咯血。   |
| ● 1948年<br>昭和23年   | 51歳 | 「怪星ガン」超人間X号など少年ものを中心に作品を多数発表。4月、公職適否審査委員会により非該当と決定、仮指定を解除される。9月、呼吸困難と心悸亢進に苦しめられる。夏頃から横溝正史に毎日のように手紙を出す。これは亡くなる当日まで続いた。              |
| 1949年<br>昭和24年     |     | 5月17日、結核のため若林の自宅で逝去。享年51。5月23日、告別式。  |
| 1950年<br>昭和25年     |     | 4月、木々高太郎監修で『海野十三全集』全8巻が東光出版社より刊行される(〜51年6月)  |
| 1962年<br>昭和37年     |     | 3月、『海野十三の碑を建てる会』が結成され会報「JU通信」を発行。5月17日、徳島公園内に建碑される。同29日、除幕式が行われる。  |
| 1971年<br>昭和46年     |     | 7月、橋本哲男編で『海野十三敗戦日記』が講談社より刊行される。  |
| 1988年<br>昭和63年     |     | 三一書房より『海野十三全集』13巻、別巻2巻の刊行始まる。(〜93年1月定)   |



36歳ごろ



海野十三・横溝正史あて献呈本『深夜の市長』(1936年7月、春秋社刊)



1942年、パウルにて



長女朝子の夫永田哲郎、次女陽子、三男昌彦と、自宅縁側にて



1949年5月23日、海野の葬儀で弔辞を読む江戸川乱歩

## 謝辞

本誌刊行にあたり、格別のご協力を賜りました関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

協力（敬称略・50音順）

坂井陽子

鈴木江利

関口千佳

野本瑠美

山口直孝

徳島県立文学書道館

二松学舎大学

## 世田谷文学館 収蔵資料〈調査と探究〉03

### 横溝正史／海野十三

監修 日下三蔵

翻刻・編集 工藤絵里名 瀬川ゆき 竹田由美 中垣理子 原辰吉  
（世田谷文学館）

校閲 株式会社尾野製本所 校閲部

撮影 栗原論

デザイン 溝端貢 (ikaruga.)

印刷 株式会社美松堂

発行日 2026年3月31日

編集・発行 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館  
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10  
Tel.03-5374-9111  
<https://www.setabun.or.jp>

\*著作権等については極力調査いたしましたが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。

©2026 Setagaya Literary Museum